

高崎市文化財調査報告書第135集

高関村前Ⅱ遺跡 高関東沖・村前遺跡

高崎市都市計画道路 3・3・9（環状線）
建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書

1 9 9 5

群馬県高崎市教育委員会

序

高崎市は古くから北関東の交流拠点として重要な位置にあり、様々な文化が栄えてきました。

現在は新幹線や高速道路の建設を核とし、市内全域にわたって道路網の整備や市街地の再開発などが積極的に行われています。

これらの開発事業は本市の活性化と発展に役立つものです。しかし、新しい時代を切りひらくことは、その代償としてかけがえのない自然環境や、人類の足跡ともいべき遺跡を破壊する側面も持っています。

本書で報告致します発掘調査は、高崎市内を巡る環状線建設に伴い行われました。高関町においては、遺跡地は南北の低地部分とそれに挟まれた微高地部分を横切る位置にあります。調査では、弥生時代の集落から古墳時代の集落や畠跡、また水田耕作に関わる水路、地震災害に関わる古代の噴砂など、貴重な発見を致しました。これらの資料が今後、古代や中近世の農耕社会解明に少しでも役立てば幸いです。

最後になりましたが、事業の円滑な遂行にご協力くださいました地元関係者、並びに関係諸機関に厚く御礼を申し上げます。さらに、発掘調査及び整理作業に従事して下さった皆様方に感謝の意を表しまして序と致します。

平成7年3月

高崎市教育委員会
教育長 網中正昭

例 言		
・本書は都市計画道路、高崎環状線建設に伴う平成5年度、6年度遺跡発掘調査報告書である。		
(事務局) 武井洋一 神戸聖語		
石田悦子 篠原伸枝		
(調査担当) 平成5年度 高関村前Ⅱ遺跡		
関口 修 星野守弘		
平成6年度 高関東沖・村前遺跡		
川野邦彦 関口 修		
(所在地)		
高関村前Ⅱ遺跡 高関町字村前60,63,74番地		
高関東沖・村前遺跡 字村前56,59,60番地		
字東沖269,270,271,272,417,418,419番地		
(発掘調査期間)		
高関村前Ⅱ遺跡 1993年6月18日～1994年2月4日		
高関東沖・村前遺跡 1994年7月18日～1995年9月14日		
(調査面積) 合計 7,012㎡		
1,2区	1,140㎡	高前村前遺跡
3区南	1,349㎡	高関村前遺跡
3区北	1,580㎡	高関村前遺跡
4区	1,672㎡	高関村前Ⅱ遺跡
5区	640㎡	高関村前Ⅱ遺跡
6区	75㎡	高関村前Ⅱ遺跡
7区	192㎡	高関東沖・村前遺跡
8区	226㎡	高関東沖・村前遺跡
9区	138㎡	高関東沖・村前遺跡
・遺物、図面等は高崎市教育委員会が保管している。		
・本文第4章第5節1項は星野が、他は関口が執筆した。		
・遺構は担当者が、遺物写真は中村貢が撮影した。		
・基準点測量は(株)外所測量設計事務所、自然化学分析は(株)古環境研究所に委託した。		
石材鑑定は飯島静男氏に依頼した。		
・高崎市教育委員会遺跡番号		
高関村前Ⅱ遺跡	219	
高関東沖・村前遺跡	251	
・本書で用いた遺構の略号は下記の意味を表す。		
SA 柵、柱列	SH 畠跡	
SB 掘立柱建物跡	SI 住居跡	
SD 溝、水路	SK 土坑、土墳墓	
SE 井戸		
・遺物観察表の法量()内は推定値である。		
・土層と土器の色調は「標準土色帖」を参考にした。		

目 次	
序	
例言	
第1章 経緯	
第1節 調査に至る経緯と調査の経過	1
1, 調査に至る経緯	1
2, 調査の経過	1
第2章 方法	
第1節 調査の方法	1
第2節 土層	2
第3章 立地	
第1節 遺跡の地理的歴史的環境	3
第2節 調査位置	4
第4章 検出した遺構と遺物	
第1節 縄文時代	5
第2節 弥生時代	6
第3節 古墳時代及び奈良平安時代	11
1, 遺跡の概要	11
2, 住居跡	12
3, 畠跡	27
4, 溝跡	37
5, 土坑	47
6, 水田跡	49
第4節 中近世	50
1, 遺跡の概要と溝跡	50
2, 掘立柱建物跡と井戸遺構	54
3, 墓址	62
第5節 自然関連遺構	
1, 噴砂	63
2, 木の跡	66
第6節 遺物観察表	67
第5章 自然化学分析	
第1節 地質とテフラ	75
第2節 植物珪酸体分析	80
第6章 まとめ	
第1節 集落の立地	85
第2節 耕地について	86
写真図版	

第1章 経緯

第1節 調査に至る経緯と調査の経過

1, 調査に至る経緯

高度経済成長期に始まった我が国の車社会は成熟期を迎えつつある。本市でも都市交通基盤の整備、拡充に努めてはいるが、急増する交通量には追いついて行けない状況にある。

こういった中で、市街地を迂回する環状線は昭和50年代より建設が始まり、今回発掘調査の対象となった高関地区及び上中居地区の一部を残して既に開通している。

都市計画道路環状線の建設が予定されている高崎市高関町周辺は、過去の発掘調査において対象地に隣接する上中居辻薬師Ⅱ遺跡で中世屋敷跡が、北の高関堰村遺跡では弥生時代の遺跡等が検出されている。当該地にも遺跡が存在する可能性が高いことが予想された。教育委員会では発掘調査実施の旨を、関係課に申し入れ対応を協議し、本調査を行うことで合意した。高関村前Ⅱ遺跡の調査は、文化振興課埋蔵文化財係の担当2人で対応し、平成5年6月18日より調査を開始し、6年2月4日に発掘調査を終了した。しかし、平成5年度調査終了後も、環状線道路予定地で未買収部分があり、翌、平成6年7月18日から調査を開始した。

2, 調査の経過

高関村前Ⅱ遺跡	高関東沖・村前遺跡
平成5年	平成6年
6月18日	調査開始。高関村前遺跡に継続。
6月25日	4区でB軽石下水田跡検出。
7月2日	畦畔確認。
7月30日	4区下層で堅穴住居検出。
8月19日	4区、掘立柱建物跡、倒木痕調査。
9月10日	5区、建物跡、溝確認。
10月5日	4区、噴砂調査。
10月12日	5区、50溝調査、水路の可能性が大きい。
10月15日	5区、5号石組み井戸調査。
10月21日	6区調査、水路検出。
11月1日	4区の一部が調査不可能なため中断。
平成6年	
1月24日	4区の残り部分掘削開始。
1月26日	B軽石下水田跡調査。
1月31日	4区下層で30号住居検出。
2月4日	高関村前Ⅱ遺跡発掘調査終了。

第2章 方法

第1節 調査の方法

高関村前Ⅱ遺跡及び高関東沖・村前遺跡は高関村前遺跡からの継続調査である。よって、調査方法は前回のものを踏襲した。なお、調査区や遺構の番号も通番とした。遺構の検出は浅間山B軽石ないし、この混入土を第一確認面とした。なお、4区、7区、8区の第2確認面は井野川泥流堆積物層最上面である。遺構測量用の基準杭は、国家座標第Ⅸ系内の任意点を選択し、杭打ちを委託した。記録写真は35mmモノクローム及びカラーリバーサルを併用し、必要に応じて高所作業車を用いる撮影を行った。

第2節 土層

下図に遺跡地の標準土層を示した。縮尺は1/40である。地表面では3区北が標高92.3mと一番高く、南に徐々に下がり、1区は91.8mである。9区は90.95mとかなり低いが、北の低地部分に比べるとやや高い。1、2区から9区まで、基盤となるのは井野川泥流堆積物である。B軽石純層は4区だけに確認できる。また、Hr-SないしHr-Iの二次洪水と見られる堆積層は、標高的には一番高い3区が厚い。

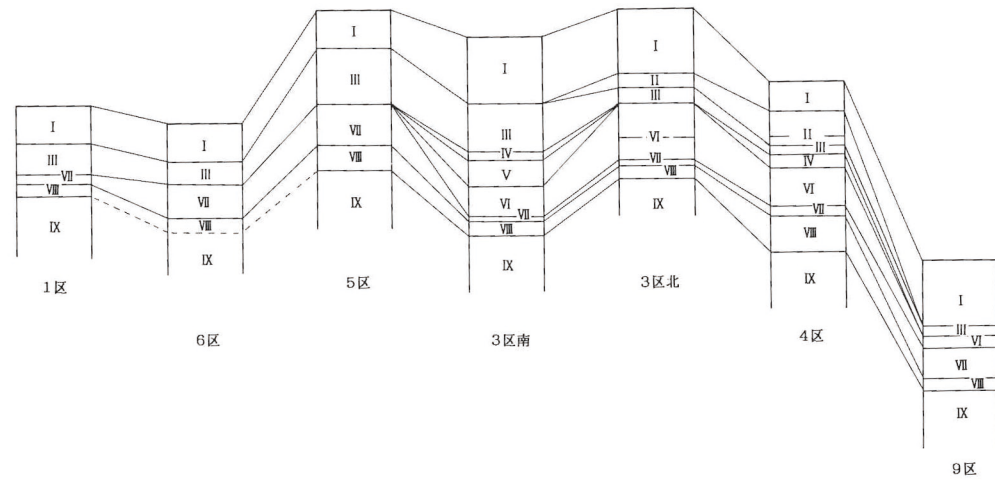


図1 土層図



- I 10YR3/4 暗褐色土、現地表土。
- II 10YR5/1 褐灰色土、As-Aを含む。
- III 7.5YR4/2 As-Bを多量に含む。砂質である。
- IV As-B純層
- V 7.5YR4/1 褐灰色土、やや粘性に富む。
- VI 7.5YR6/4 にぶい橙、Hr-SないしHr-Iの二次洪水層。シルト質でやや黒ずんでいる。
- VII 10YR3/1 黒褐色土、微量のAs-Cを含む。粒子は緻密。
- VIII 10YR3/4 暗褐色土、粒子が緻密で軟らかい。
- IX 2.5YR6/7 明黄褐色土、井野川泥流堆積物層。水成堆積、シルトと礫の混土。

第3章 立地

第1節 遺跡の地理的歴史的環境

高崎市は、前橋市とともに比較的起伏の少ない、前橋台地上に形成された都市である。北西部は榛名山裾野に広がる相馬ヶ原扇状地であり、南部は観音山丘陵である。なお、市街地の大部分は、井野川泥流堆積物で覆われている。東には利根川が、また西には烏川が流れ下り、両河川に挟まれた地帯では、井野川をはじめとする中小河川が微高地や低地などの微地形形成の主役であったと考えられる。

遺跡地(1)は、高崎市駅から1km程東に向かった南北の低地に挟まれた微高地にある。この微高地は高崎市街地の他の微高地と同様に、西から東へと伸びている。微高地の北には、地形変換点に沿って高崎市の主要水路である長野堰から分水した地獄堰(2)が東へ流れる。また、南でも同じく長野堰から分かれた矢中堰(3)が流れている。

微高地上には縄文時代になると、人々の活動の記録が残されている。高関堰村遺跡(4)では石器製作時の母岩が、また、上中居辻薬師Ⅱ遺跡(5)でも剥片が出土している。微高地の周囲は低地が広がるが、本市の農耕の始まりはこの付近であったと推定される。水田跡の検出はないが、遺跡地南の競馬場遺跡(6)、城南小学校庭遺跡(7)、竜見町遺跡(8)では弥生中期後半の土器が出土している。また、高関堰村遺跡では環濠と見られる溝を検出し、中からは弥生中期後半の土器が出土している。今回報告する東沖地区はこの溝に近い所である。なお、弥生後期の集落は、高関村前遺跡で調査されている。東町Ⅲ遺跡(9)では弥生時代と見られる溝があり、将来弥生水田跡が発見される可能性がある。古墳時代には上中居辻薬師Ⅱ遺跡で方形周溝墓が発見され、近くに集落があったことを窺わせる。天仁元年(1108年)噴出の浅間B軽石下の水田跡は、高関塚田遺跡(10)、岡久保遺跡など(11)、低地部分で検出されている。中世では上中居辻薬師Ⅱ遺跡において、小規模な屋敷跡を検出している。屋敷跡を囲むと考えられる堀からは、中世の土器や陶器器だけでなく、近世や近代の陶磁器が出土し、長い期間にわたって機能していたと考えられる。

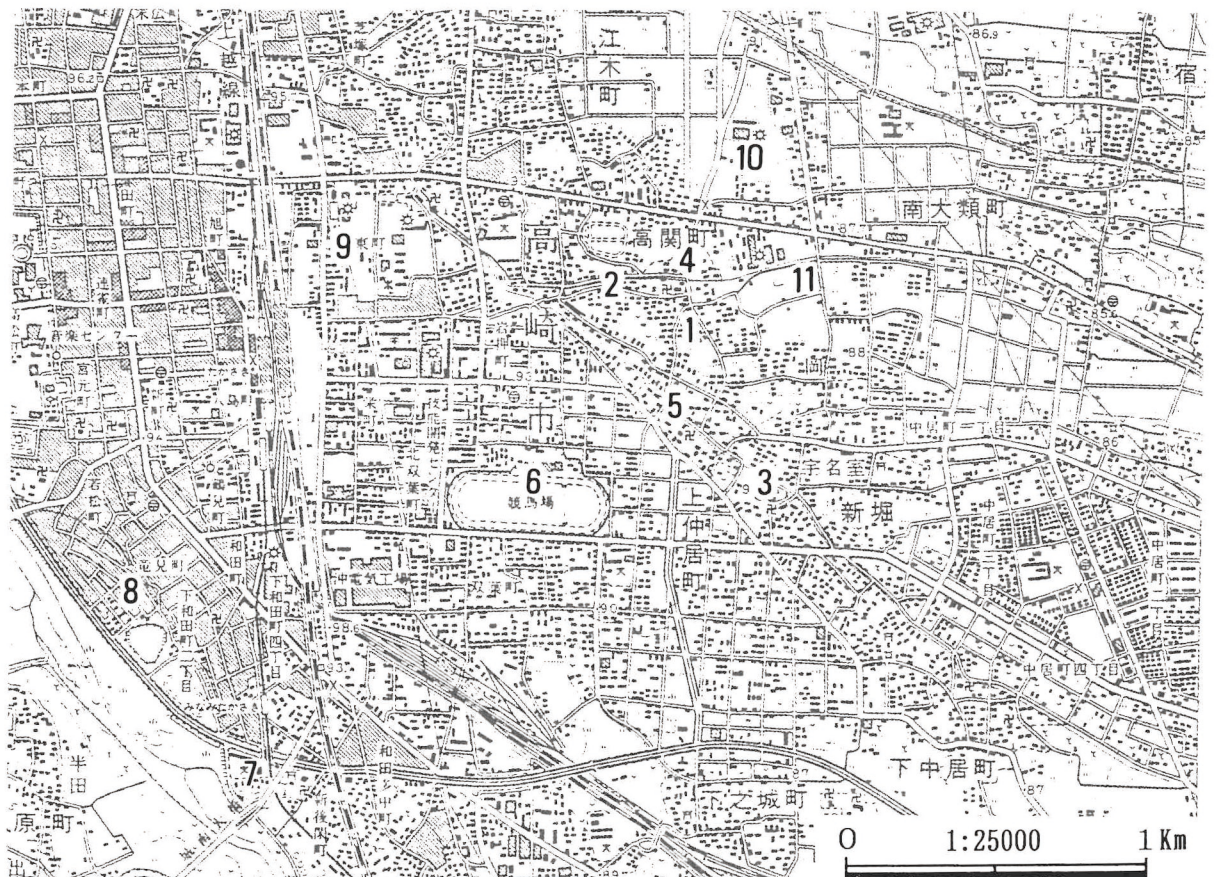


図2 周辺の遺跡

第2節 調査位置

下図は環状線建設に伴う埋蔵文化財調査を行った位置図である。高関堰村遺跡は以前に報告を行っており、本書では部分的に紹介する。また、下図の南には上中居辻薬師Ⅱ遺跡、上中居辻薬師遺跡がある。

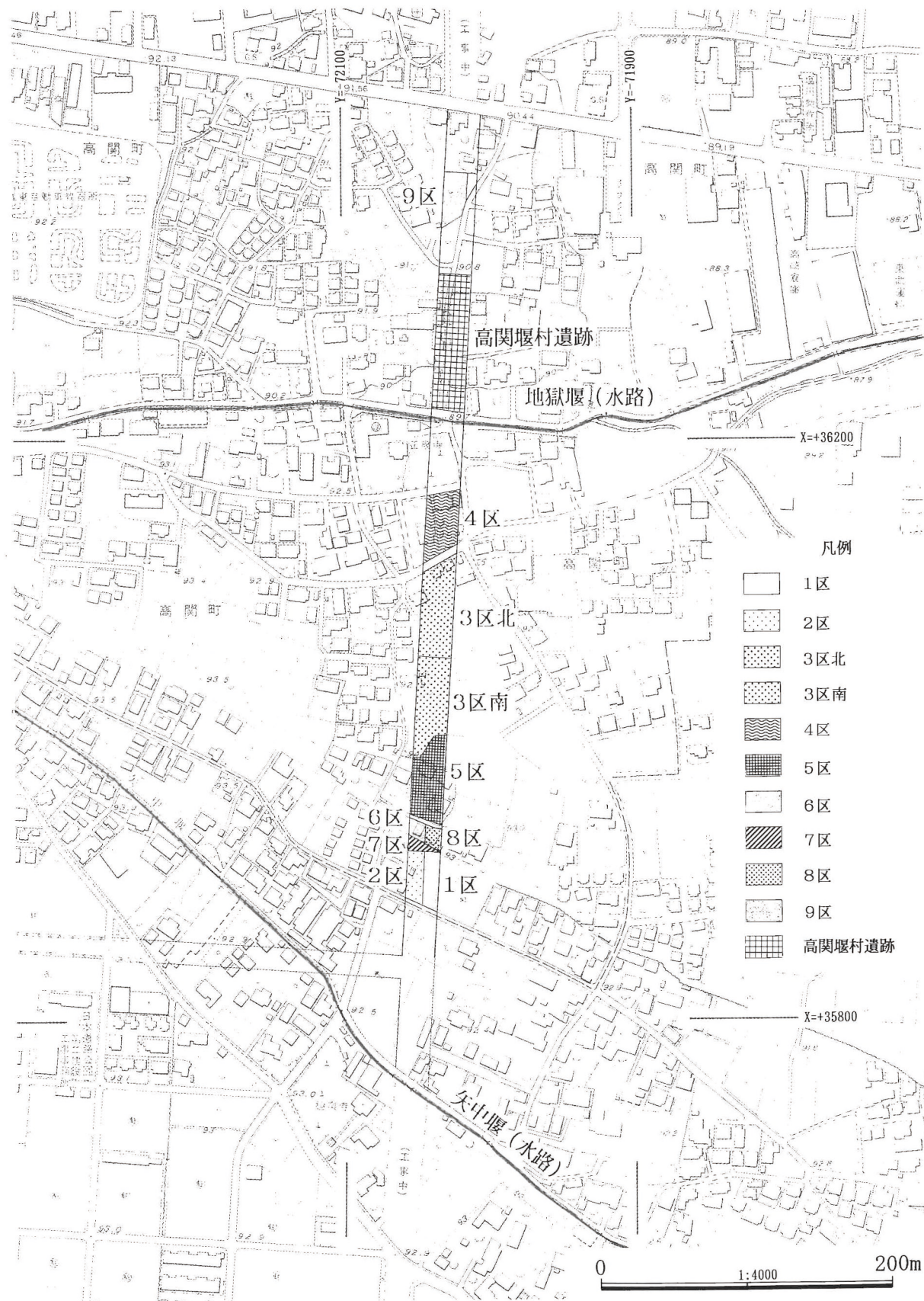


図3 調査位置図

第4章 検出した遺構と遺物

第1節 縄文時代

縄文時代と特定できる遺構は1～9区までの調査区を通じて確認できなかった。以下に掲げるのは、後世の遺構及び覆土からの出土遺物である。1は3区南の11号住から出土した。器肉が薄い深鉢で、頸部の沈線内は縄文であり、加曽利B式と考えられる。2は9区59溝、3は9区南、4は3区北16溝の出土の深鉢口縁で、いずれも加曽利E式段階の土器である。5、6、7は9区31住から出土した深鉢口縁片で隆起線が特徴的である。7には口縁内側に断面三角形の隆帯が巡る。これらは勝坂式と考えられる。8は4区97土坑出土の深鉢で、堀之内2式と考えられる。9は3区南の覆土出土で、沈線文に囲まれた中に列点が見え、称名寺式と考えられる。10は9区出土の黒曜石製の、基部に緩い挟りをもつ無茎石鏃である。11は5号畠から出土した硬質泥岩製の短冊形打製石斧である。上半部は欠損しているが、図の下の部分にあたる先端部は細かく再調整されている。12は3区南の16号住居出土の頁岩の剥片、13は2区出土の硬質泥岩の剥片である。14は4区出土の黒色片岩の自然石である。縦方向に割れた面は新しい。自然石ではあるが、片岩はこの微高地にはない石であり、人為的な搬入品と考えられる。下図以外にも、5号畠では雲母を多量に含んだ阿玉台式土器の口縁破片が、また、3区南の11号住居と5区の50号溝では加曽利E式土器の破片が出土している。



図4 縄文時代の遺物図

第2節 弥生時代

高関村前、高関村前Ⅱ、高関村前・高関東沖遺跡の調査を通じて、調査区最南の1、2、7区、及び最北の9区で弥生時代の住居跡を検出した。

高関村前、高関村前Ⅱ、高関村前・高関東沖遺跡の調査は、高崎市の中央部から中居町にかけて東西に伸びる微高地に、南北にトレンチを入れた状況である。こうした調査で、弥生時代の遺構を検出したのは、微高地中央部の比較的高い部分ではなく、北と南のやや標高の低い地点であった。なお、弥生時代の遺構を検出なかった他の調査区では、弥生時代の遺物も出土していない。

9区の31号住居は、覆土上部から弥生中期とみられる土器片が出土している。土器の出土位置は、住居が大部分埋まった段階でのものであり、31号住居が土器と同時期か否かの判断は困難である。

この31号住居の南では、以前に、弥生中期の土器を多量に出土するV字形の溝(高関堰村遺跡)を調査した。全掘はしていないが、図面上では35m伸びていることが確認できた。また溝の覆土は風成の自然堆積であり、水の流れた痕跡は見いだせない。以上の所見からこの溝は環濠の可能性も考えられる。今回の31住居覆土の土器と前回検出した溝はともに弥生中期後半の段階であり、集落は溝の北にあった可能性が高い。

31号住居跡

9区の南西部で検出した。東側は調査以前に排水路工事が行われた為、残念ながら破壊されている。東西方向の地層をみると、この破壊された部分のすぐ西の地点での地層は右上がりとなっているため、住居の壁に近いと考えられる。よって、この住居跡の平面形は南北に長い隅丸長方形と推定される。

南北は4.5m、西壁から攪乱部分までは2.8mである。中央北に直径30cm、深さ15cm、南に直径35cm、深さ20cmの浅いピットが、また南東にも直径35cm、深さ20cmの小さなピットがある。位置的に見ても南北のピットが主柱穴と考えられる。なお、南西に60cm×50cm深さ20cmの炉と考えられる浅いくぼみがある。炉の底面に近いところには若干灰と炭が見られる。床は井野川泥流面まで掘り下げついている。調査時点で湧水があったせいもあるが、床面は軟弱であった。なお、住居の壁、床などが焼失にあった形跡はない。

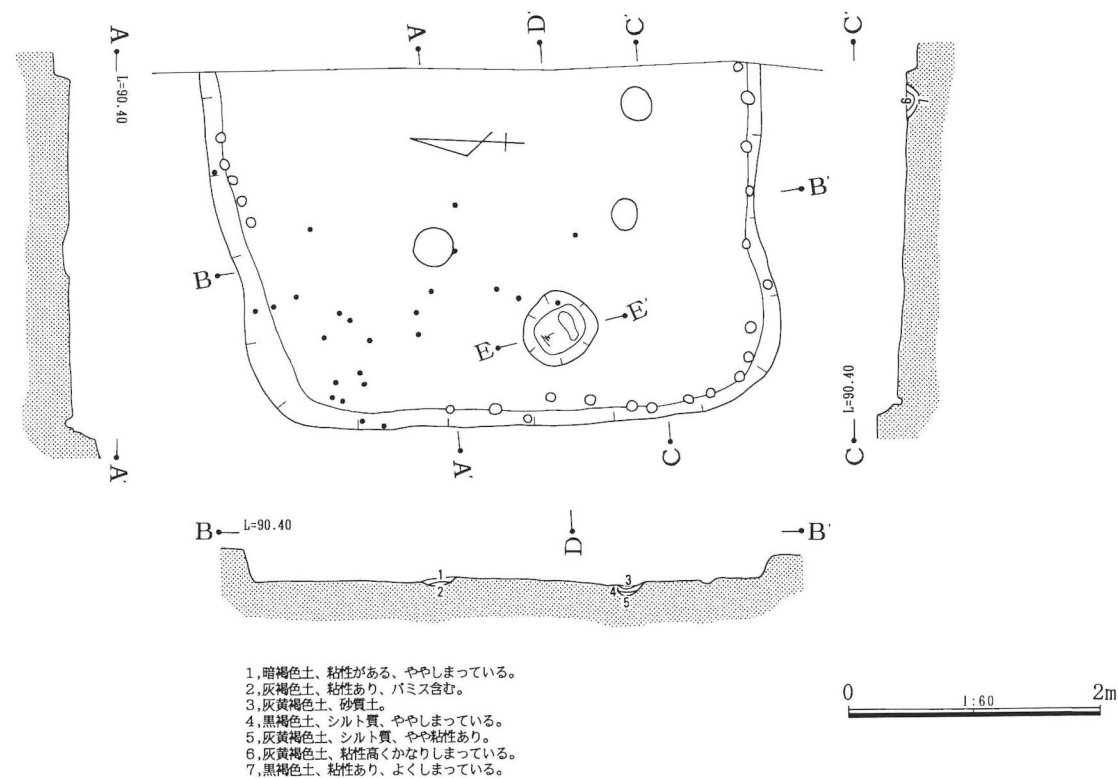


図5 31号住居跡図

住居の覆土は自然堆積土である。土器は覆土の上部及び住居西側の住居外地点からも出土しており、住居と遺物とはやや時間差があると考えられる。また、弥生以外には縄文中期の勝坂式と考えられる土器もある。なお、10から13は9区遺構外での出土遺物である。

1は台付甕である。接点はないが3個の破片から図上復元した。口唇は刻み目、内外面に波状沈線文がある。また、胴上部にも波状沈線文がみられる。2～9は壺の胴部破片である。灰褐色でやや焼きがやわらかい。無花果形の器形とみられる。内外面とも刷毛調整している。10は壺の口縁部破片である。口縁はやや受け口で大きな個体と考えられる。11～12は壺の胴上部破片で、外面に粗い波状文が巡る。13は甕の頸部から口縁の破片で、外面頸部に右回りの廉状文が施されている。文様及び土器の形態の特徴から、いずれも弥生中期後半に位置づけられる。

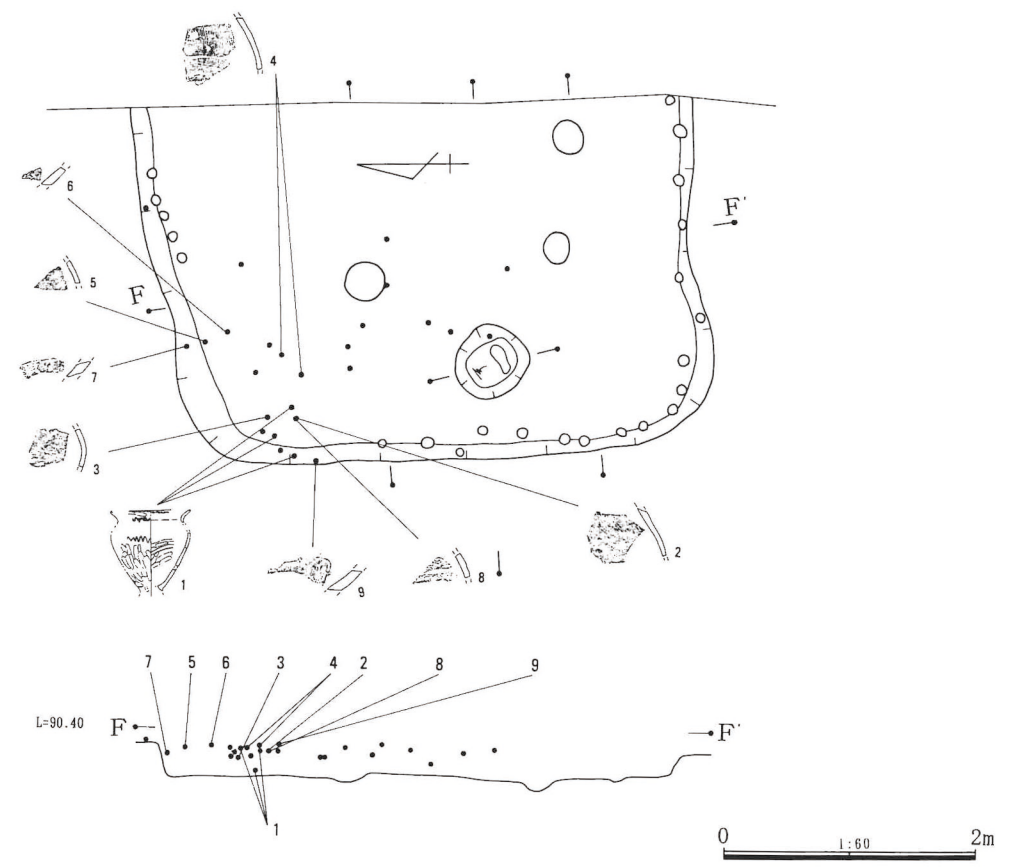
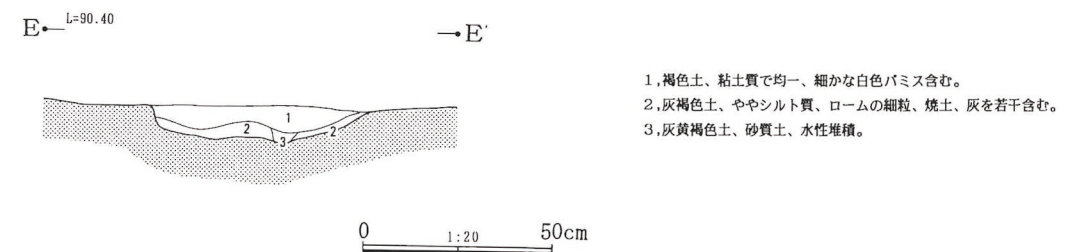
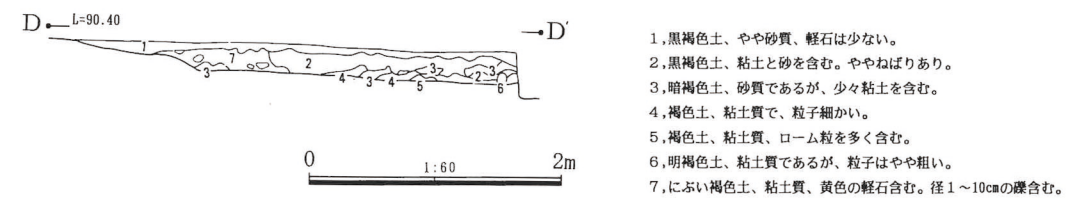


図6 31号住居跡地層並びに遺物出土状態図

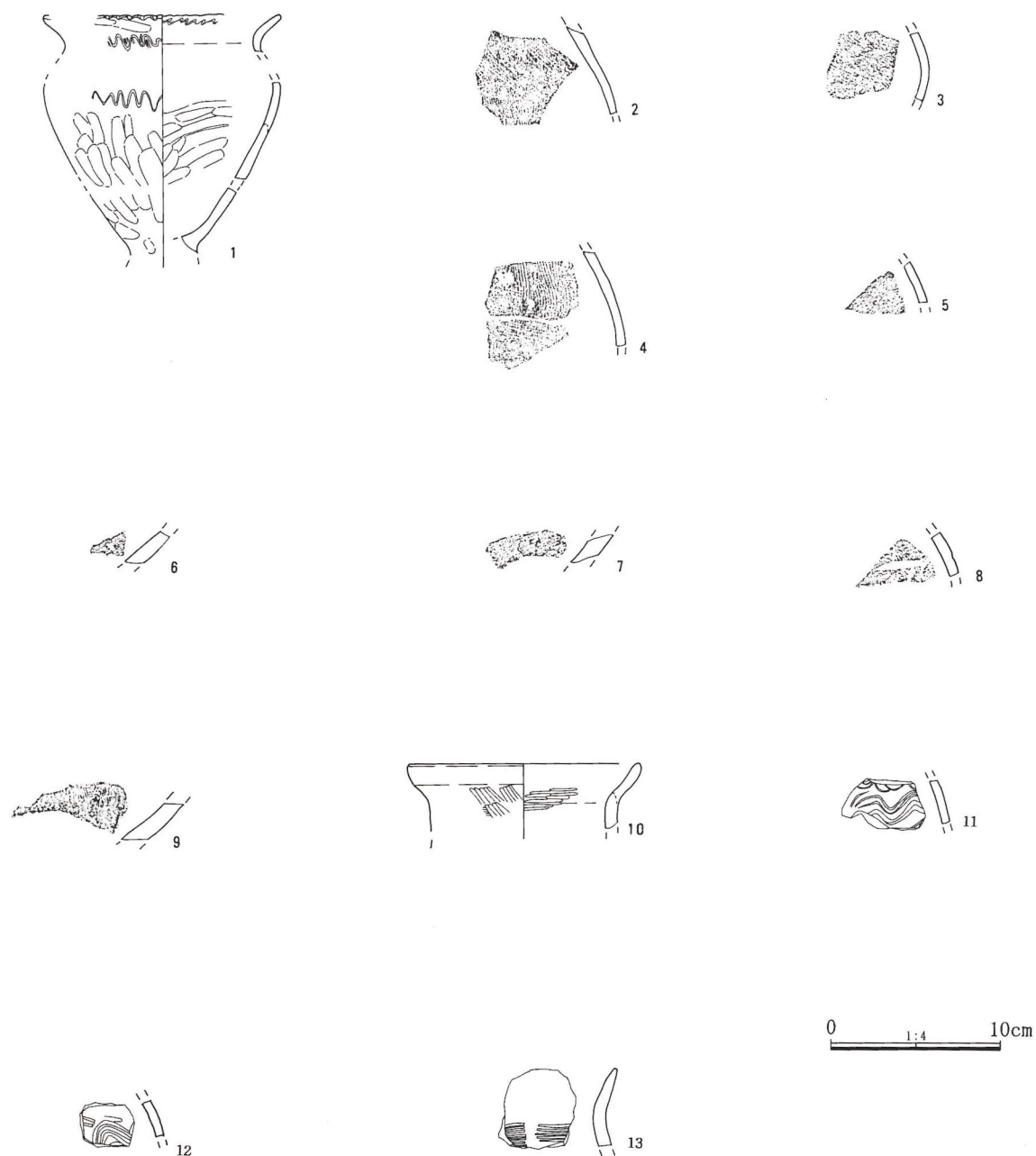


図7 31号住居跡並びに遺構外遺物図

次に掲載した図は遺跡南端の調査区1、2、7区下層の全体図である。これらの遺構からは土器の出土が少ない。土器の出土したのは、1号住と7号住のみで、壺の胴部破片が1点ずつである。1号住の土器は樽式土器の範疇であるが、7号住の土器表面を粗いハケないし櫛状の調整で時期特定ができない。

土器から住居の時期を判断することは難しいが、1、2、7区の住居跡は楕円形もしくは隅丸長方形である。弥生時代の住居に類例が多いものである。また、住居覆土に浅間C軽石が含まれていないことから、弥生時代後期と考えられる。

北東の104号土坑の覆土は浅間C軽石が含まれてない暗褐色シルト質土壌である。遺構の覆土は周囲の住居跡に似ており、同時期の遺構の可能性が高い。平面形は不定形である。底近くでは湧水が激しい。井戸状遺構である可能性が高い。

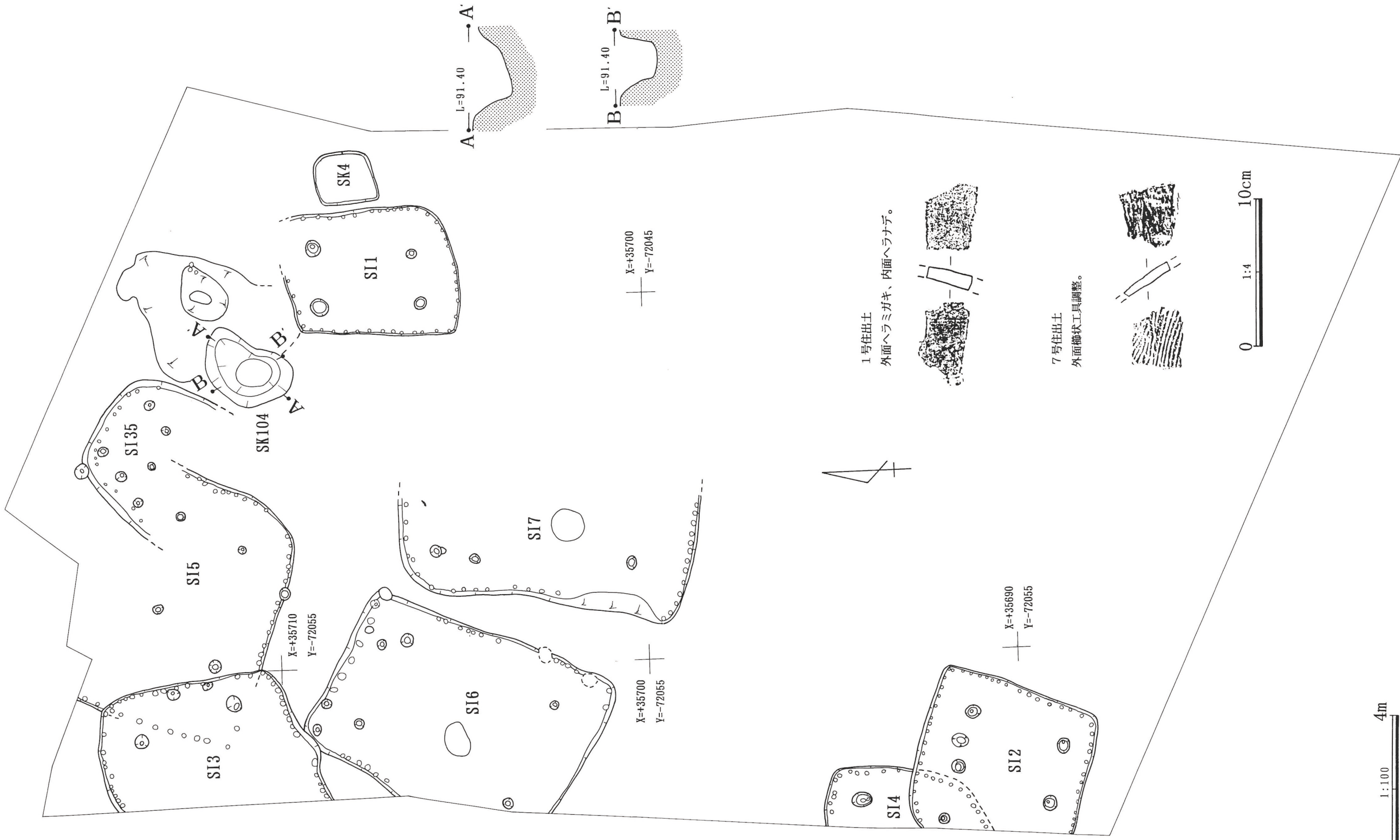


図8 1、2、7区弥生時代全体図

参考 高関堰村遺跡 環濠と遺物

図は高崎市文化財調査報告書第116集「高関堰村遺跡」で環濠と推定した溝と、その溝中から出土した土器である。また、溝全体図の左下には今回検出した31号住居と前回の溝との配置関係図を載せた。なお、「高関堰村遺跡」の報告書で掲載した溝の全体図は北西のトレンチ位置部分の図化方法に問題があり、溝の平面形状が誤解を生じる図となっている。遺憾の意をこめて、担当者の責任において再度、正確な図を提示した。

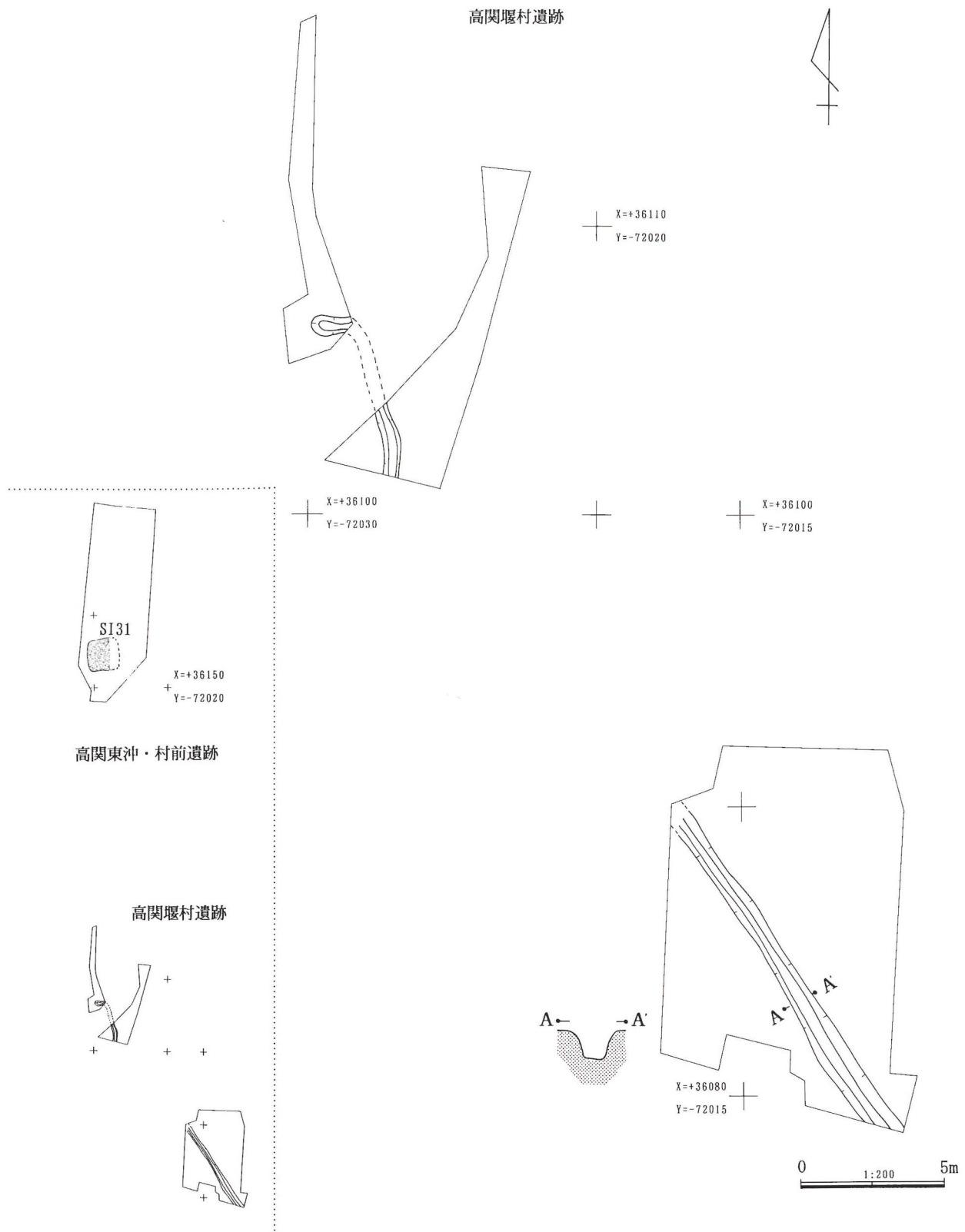


図9 高関堰村遺跡検出溝と31号住居との位置関係図

第3節 古墳時代及び奈良平安時代

1, 遺跡の概要

環状線建設に伴い遺跡を小刻みに分けた調査をしてきた。南から上中居辻薬師、上中居辻薬師Ⅱ遺跡、高関村前、高関村前Ⅱ、高関堰村、高関東沖・村前遺跡である。このうち本書では高関村前、高関村前Ⅱ、高関東沖・村前遺跡について報告する。

・高関村前遺跡の1、2、5、6、7区では古墳時代の遺構はない。5区で8世紀後半に埋没した50号溝から古墳時代の土器と石製模造品が、また中近世の土坑SK76、SK77からも石製模造品が出土している。

・3区南では中央やや北寄り部分と東部に5世紀から6世紀にかけての竪穴住居跡10軒、南西部に掘立柱建物跡を10棟検出した。また北端及び東部において畠跡を検出した。北端の1号畠跡は、後述する洪水に埋もれた7号畠跡と連続するものである。なお、東側の2、3、4号畠も洪水に埋もれた畠であるが、1、7号畠を埋めた洪水の後にも数回洪水がこの土地に起こったことが24号住、及び洪水砂で埋まった水路などから確認できる。なお上層の洪水層中には9世紀の土器があり、上層の洪水の時期を押さえられる。2～4号畠はこれらの洪水のうち、どれに埋まったものかは特定できない。

・3区北は7軒の竪穴住居、1棟の掘立柱建物跡とともに、上下2枚の畠跡を検出した。下層の畠跡はこれを切る竪穴住居や溝の土器から、少なくとも6世紀中葉以前と考えられる。また上層の畠跡は同じく畠跡を切る水路と住居の土器が8世紀、畠より下層の溝で最も新しい土器が6世紀段階のため、その中間に位置づけられる。竪穴住居は24号住を除いてはかまどが見られず、また出土遺物のうち、土器が数片程度のものが多く時代決定が難しい。また、掘立柱建物跡は上層の畠よりは少なくとも古い、それ以外は時代決定の手がかりはない。なお、19号住、22号住は6世紀、24号住出土の土器は8世紀のものである。

・4区は1108年と考えられている浅間山の噴火B軽石に埋もれた水田跡を検出した。またこの下層には竪穴住居3軒、掘立柱建物跡5棟等が検出された。これら下層の遺構は少なくとも断続的に起こった洪水層よりも下部での検出である。

・9区は南に古墳時代の62号溝、北に4軒の竪穴住居を検出した。

・全体的な遺構分布では、微高地の一番高い所に畠跡が、竪穴住居跡や掘立柱建物跡は微高地中央から北部分に多い。また、弥生時代の遺構の検出された1、2、7区では古墳時代の遺構は見られない。

・奈良時代の住居で確実なのは微高地中央部の3区北24号住とそれより南の5区29号住である。同じく5区の50号溝は西から東への人工水路であり、出土遺物から8世紀後半頃に埋没したと考えられる。

・全調査区で、平安時代の竪穴住居は検出されなかった。4区は北に向かってやや下る位置ではあるが、微高地上である。水田の立地としてはやや高いと考えていたが、B軽石下の調査で水田跡を検出した。平安時代に水路が整備された結果と考えられる。

・地震に伴う噴砂が3区で2カ所、及び4区、5区で検出された。特に4区で検出されたものは残存状況がよい。また、3区のもは古墳時代の15号住居の覆土を切り裂くような状況である。



図10 高関堰村遺跡溝出土遺物図

2, 住居跡

10号住居跡(SI10)

3区南の北東部分に位置する。南側の11号住居と切り合う関係にあるが、10号住居の方が新しい。東側は調査区外で東西幅は測れないが4本の柱穴と見られるピットの配置から、平面形は南北に長い隅丸長方形と考えられる。規模は南北6.8m、柱穴は直径35cmから40cm、深さ30cmから35cmである。また壁際には直径5cmから8cm、深さ5cmから8cmのピットが10cmから20cm程の間隔で並ぶ。覆土は自然堆積土で上部には7号畠跡を覆う土に似たにぶい黄褐色の洪水層がある。床面上面はかたくしまっている。なお、竈や炉などの施設は調査区内では確認できない。他の竪穴住居跡から出土する土器は数片程度と極端に少ないのに対し、この住居跡から出土する土器の量は格段に多い。土器は須恵器の坏、土師器の坏、甕である。これらの出土状況から判断すると、住居がかなり埋没した後に廃棄されたものと考えられる。

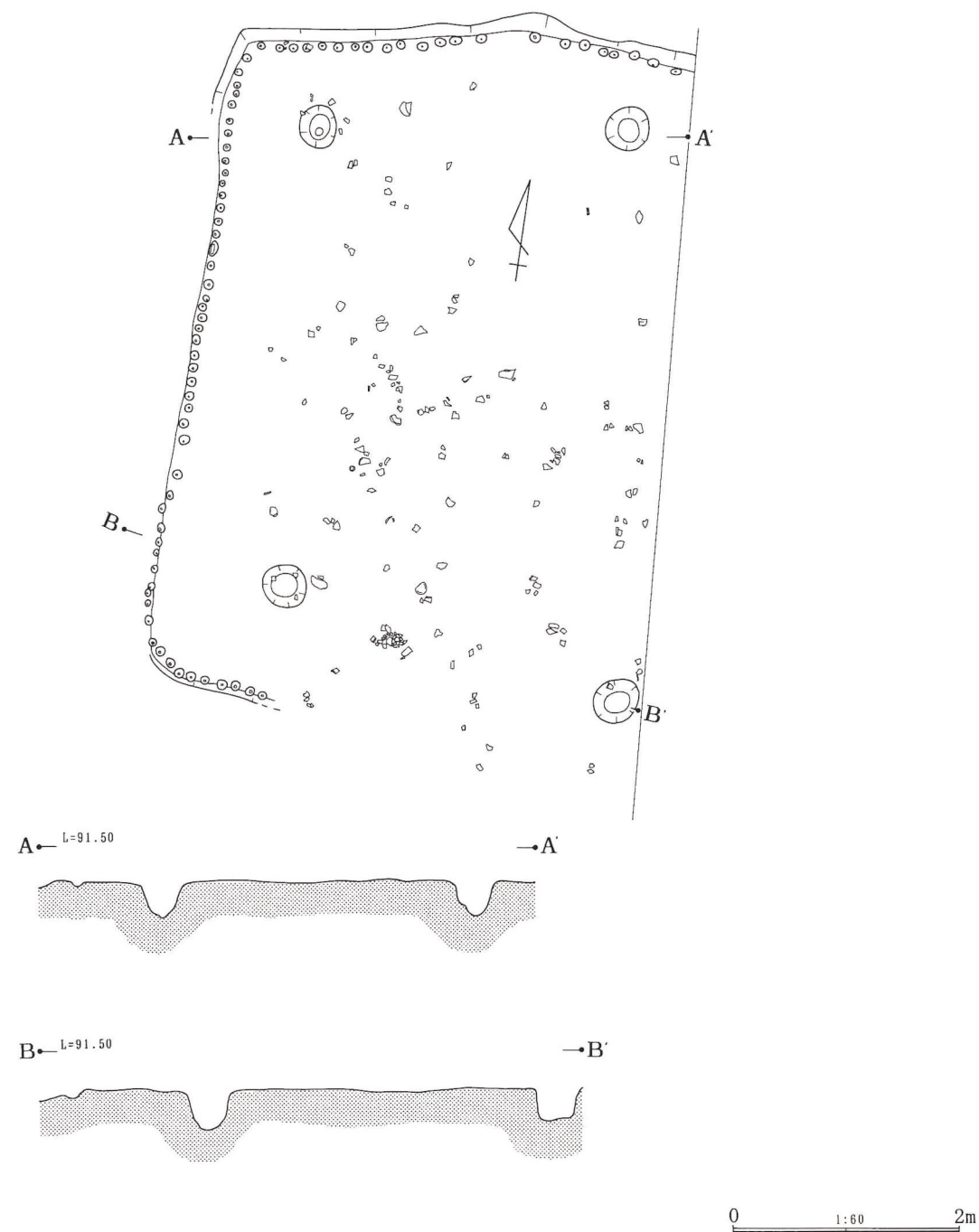


図11 10号住居跡遺構図

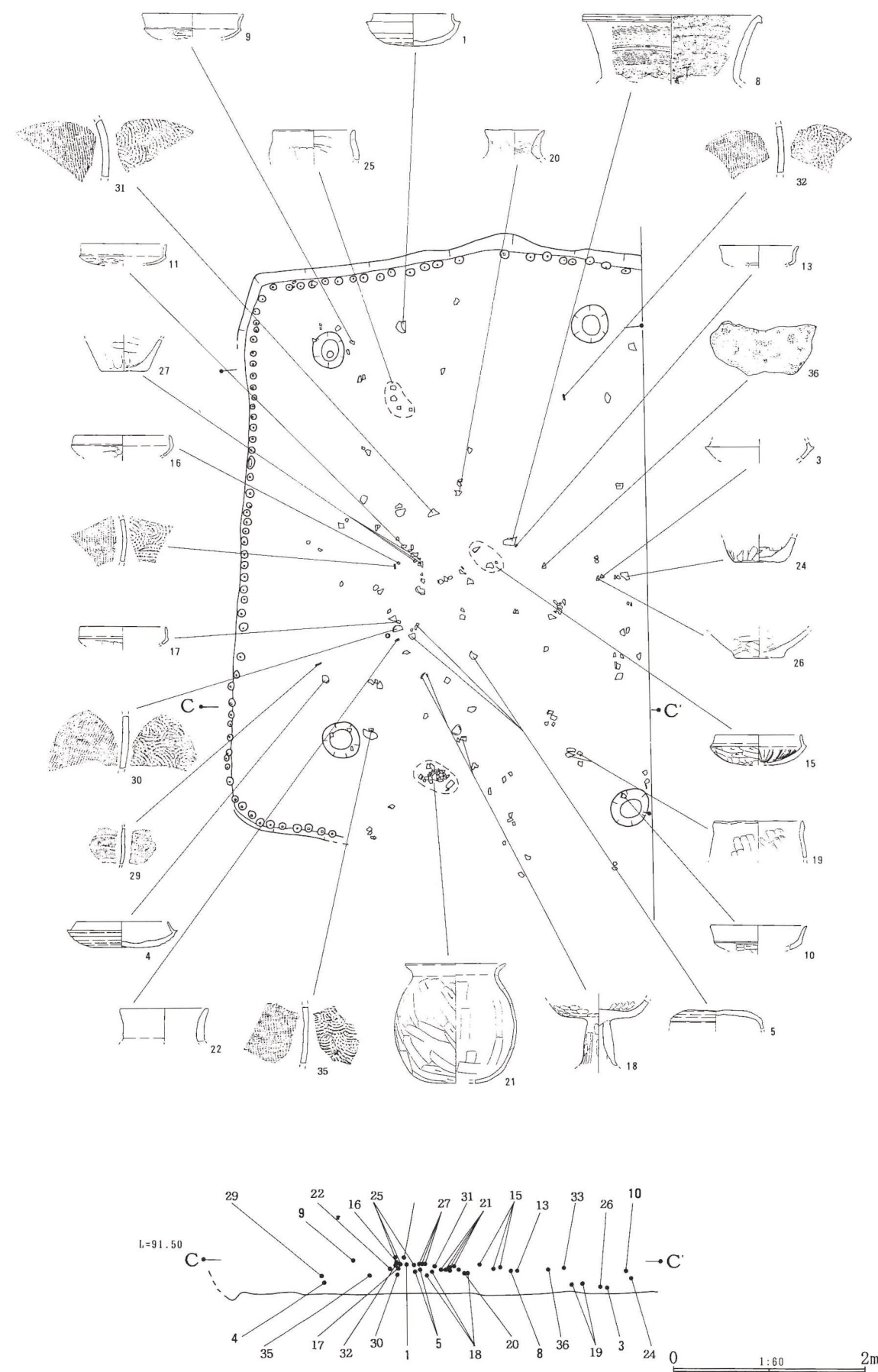


図12 10号住居跡遺物出土状態図

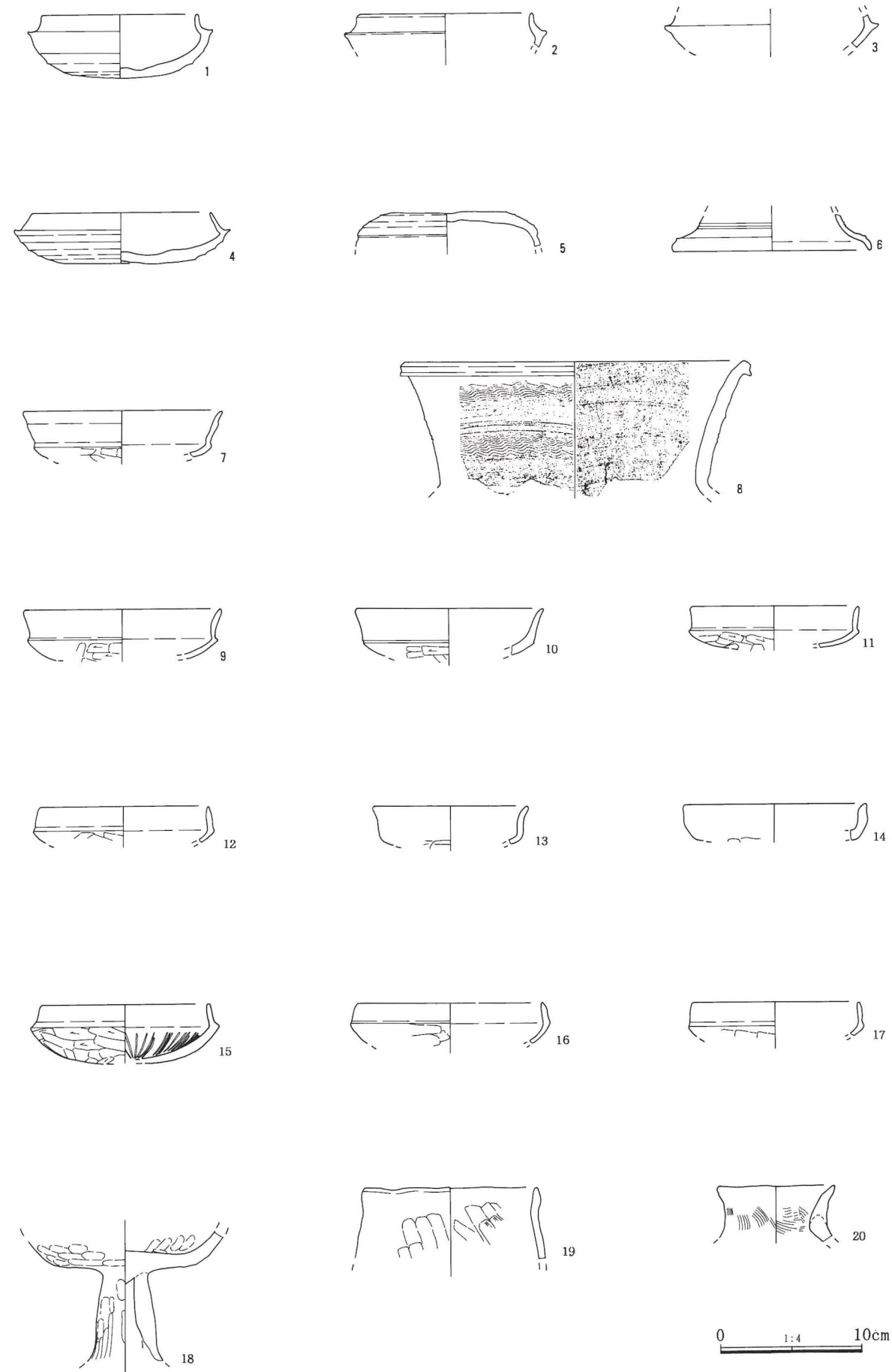


図13 10号住居跡遺物図

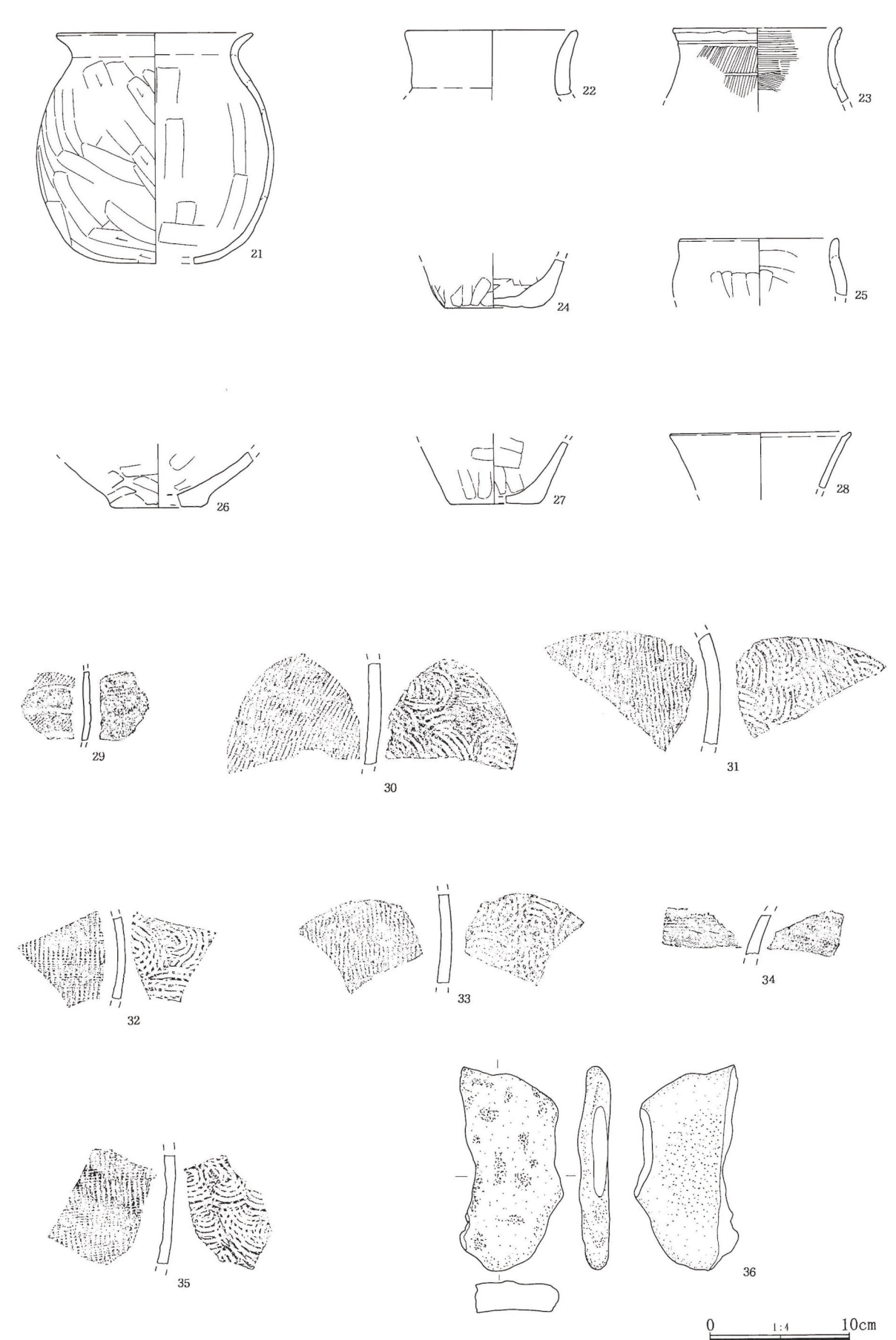


図14 10号住居跡遺物図

11号住居跡(SI11)

3区南の10号住居跡の南側で、10号住居跡と切り合い関係にあり、10号住居跡よりは古い。住居の東側は調査区外だが、3箇所柱穴とみられるピットの位置から判断すると、東西に長い住居跡と考えられる。規模は南北3.7m、深さは35cmである。調査範囲内では竈、炉は検出されなかった。住居内には壁に沿って、幅15cm程度、深さ6cmから10cmの壁周溝がめぐる。床面の上面はややしまっている。

出土遺物には須恵器坏蓋、甕、土師器坏、甕、小型鉢、縄文中期土器片がある。

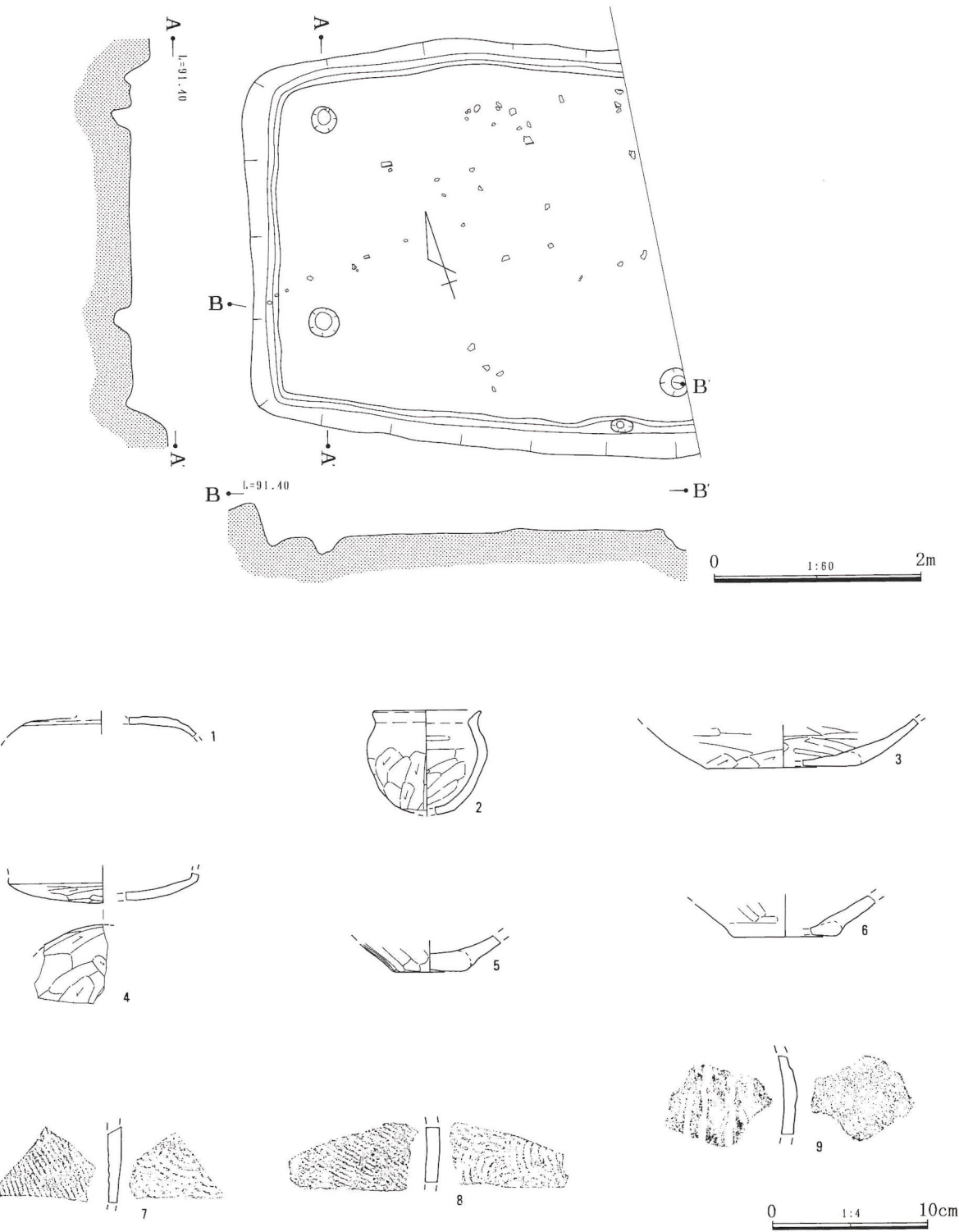


図15 11号住居跡遺構遺物図

15号住居跡(SI15)

3区南の東南部で検出した。東半部は調査区外で、西半部だけの調査となった。南北の規模は7.4mで、住居内には柱穴と見られる2本のピットがある。炉、周溝、竈は確認できなかった。住居覆土の上層には黄褐色の洪水層が、さらにその上には浅間B軽石の層がある。なお、前者の洪水層下面では4号畠が検出されたが、B軽石下では遺構は確認出来なかった。15号住居の中央部付近の地層には、住居の覆土を切り裂くような亀裂があり、亀裂内部には噴砂と見られる黄褐色の砂が確認できる。噴砂が地上に吹き出したのは、この住居廃絶後と考えられる。なお、噴砂はB軽石層までは達していない。出土遺物には土師器の坏や甕の破片があるが、外面調整に篋磨きを多用することから、5～6世紀代と考えられる。

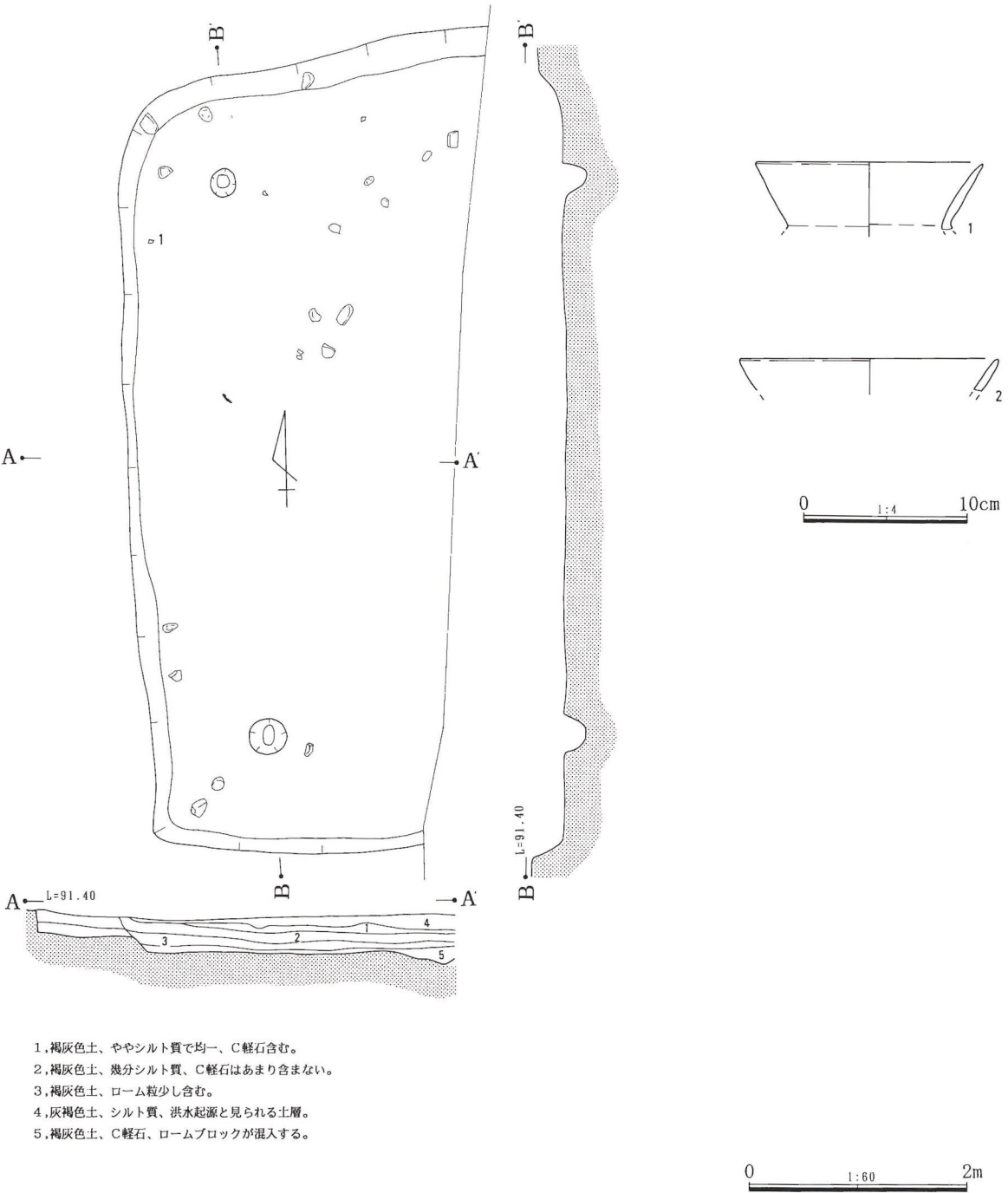


図16 15号住居跡遺構遺物図

19号住居跡(SI19)

3区北の北東部分で検出した。東側は調査区外、西は現代の攪乱で破壊されている。住居の平面形は方形とみられるが、残っている部分が少ないため断定はできない。規模は南北4.3m、柱穴、炉、竈は確認できない。床面は貼り床となっているが、あまりしまっていない。住居跡の南には、後述する5号畠が存在するが5号畠との切り合いはない。また住居の北にも畠跡は検出されないで、この住居跡の位置は畠の東端にあたると考えられる。しかし、住居跡の東の壁と5号畠との間は20cm程度しか離れておらず、住居に周堤があることを考慮に入ると、住居跡が5号畠と同時期とも、異なる時期とも判断しがたい。

遺物は土師器環。高坏、刷毛目調整の甕などがある。高坏は脚が発達しかなり長くなっている。

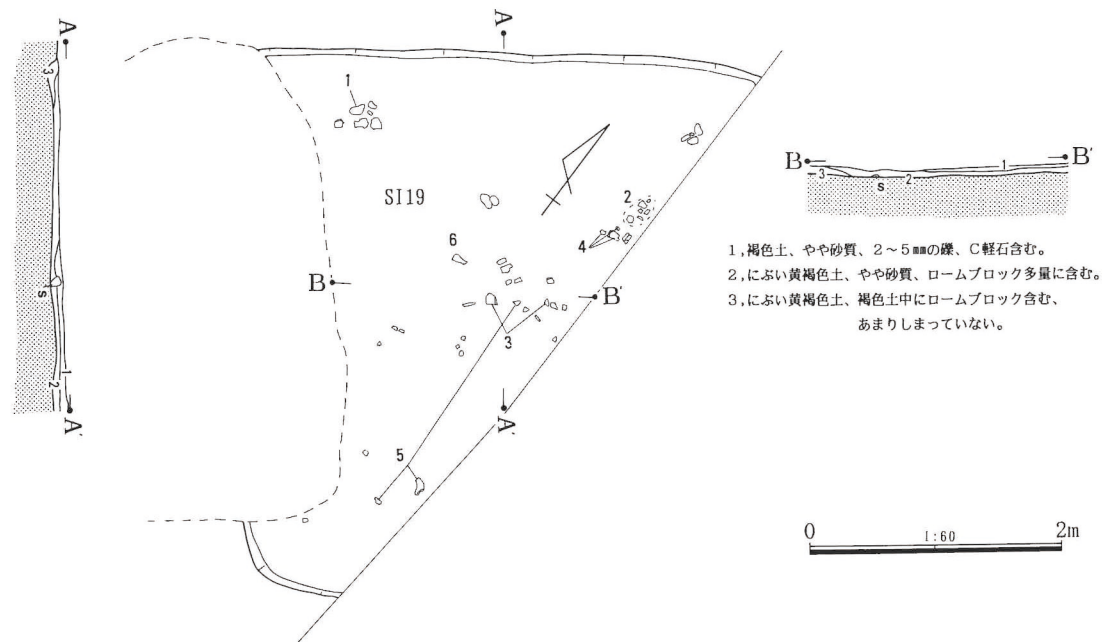


図17 19号住居跡遺構遺物図

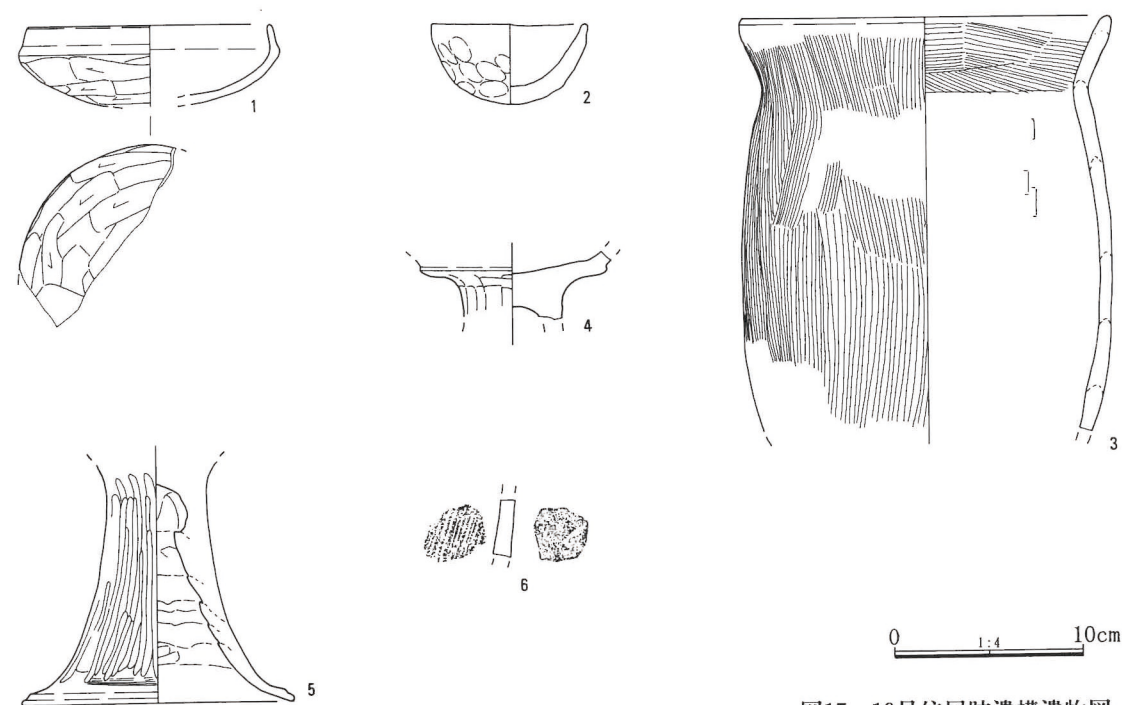
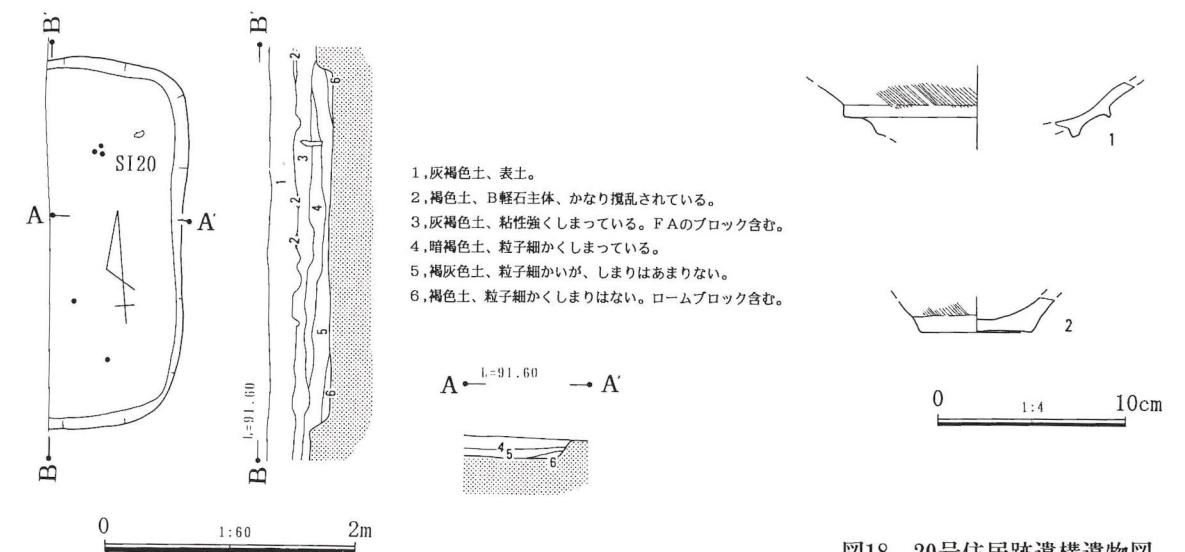


図18 20号住居跡遺構遺物図

20号住居跡(SI20)

3区北の北西で検出した。住居西側は調査区外で東半部だけの調査となった。規模は南北3.0m、柱穴、炉、竈は確認できない。床面は井野川泥流堆積物層上面につくられ、全体にやわらかい。遺物は土師器の壺の口縁、及び甕の底部がある。住居跡の東には5号畠があるが、この住居跡は5号畠の広がる場所とは少し離れており、切り合い関係がないため、畠との時期関係を知り得る手がかりはない。なお、住居覆土の上層には、やや黒ずんだ黄褐色の洪水層がみられる。3区北にある洪水層は、後述するが7号畠を埋める層と、さらに上層に8、9世紀の洪水が推定される。洪水層が似通っているため、20号住居の黄褐色土が、どの洪水層に対応するかは判断できない。



21号住居跡(SI21)

3区北の北西隅で検出した。南には20号住居が位置する。住居の北西と西側は調査区外となるため不明である。規模は南北2.2m、東西はそれよりやや長い方形と推定される。床面の壁際には、直径8cmから10cm、深さ5cmから8.5cm程のピットが、20cmから30cm程度の間隔で並ぶ。なお、柱穴、炉、竈は調査範囲内では確認できない。床面は、やわらかなシルト質の井野川泥流堆積物層上につくられている。出土遺物はないが、住居跡の覆土上層には、洪水が起こった時に堆積したと考えられる黄褐色土層が見られる。この層は20号住居の覆土上層で確認した層に連続する。なお、20号住居と同様に洪水層がどの段階のものかはわからない。

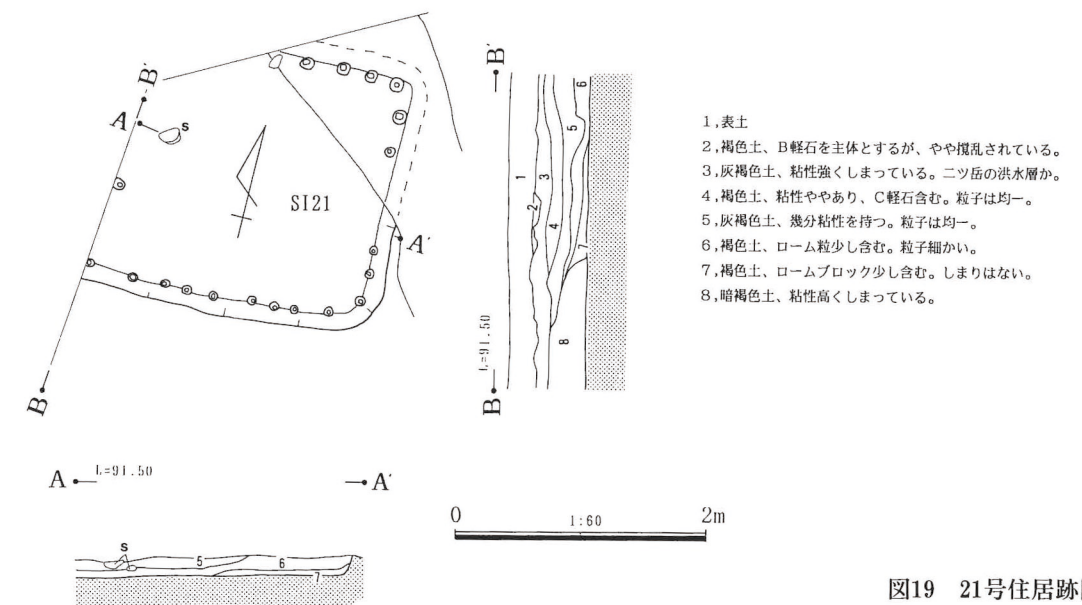


図19 21号住居跡図

22号住居跡(SI22)

3区北の北部中央で検出された。SD16、SK61、現代の攪乱などにより住居のかかなりの部分が破壊されている。東西5.4m、南北3.7mの住居跡である。柱穴、炉、竈などは確認できない。また明確な貼り床も認められない。この住居跡は5号畠を切ってつくられている。また、覆土上層には7号畠を埋没させる洪水層に似た層が薄く認められる。遺物は土師器甕の破片であるが、口縁の破片は小石を少し含むやや厚手の土器である。また、底部破片には木葉痕がある。6世紀代の土器である。

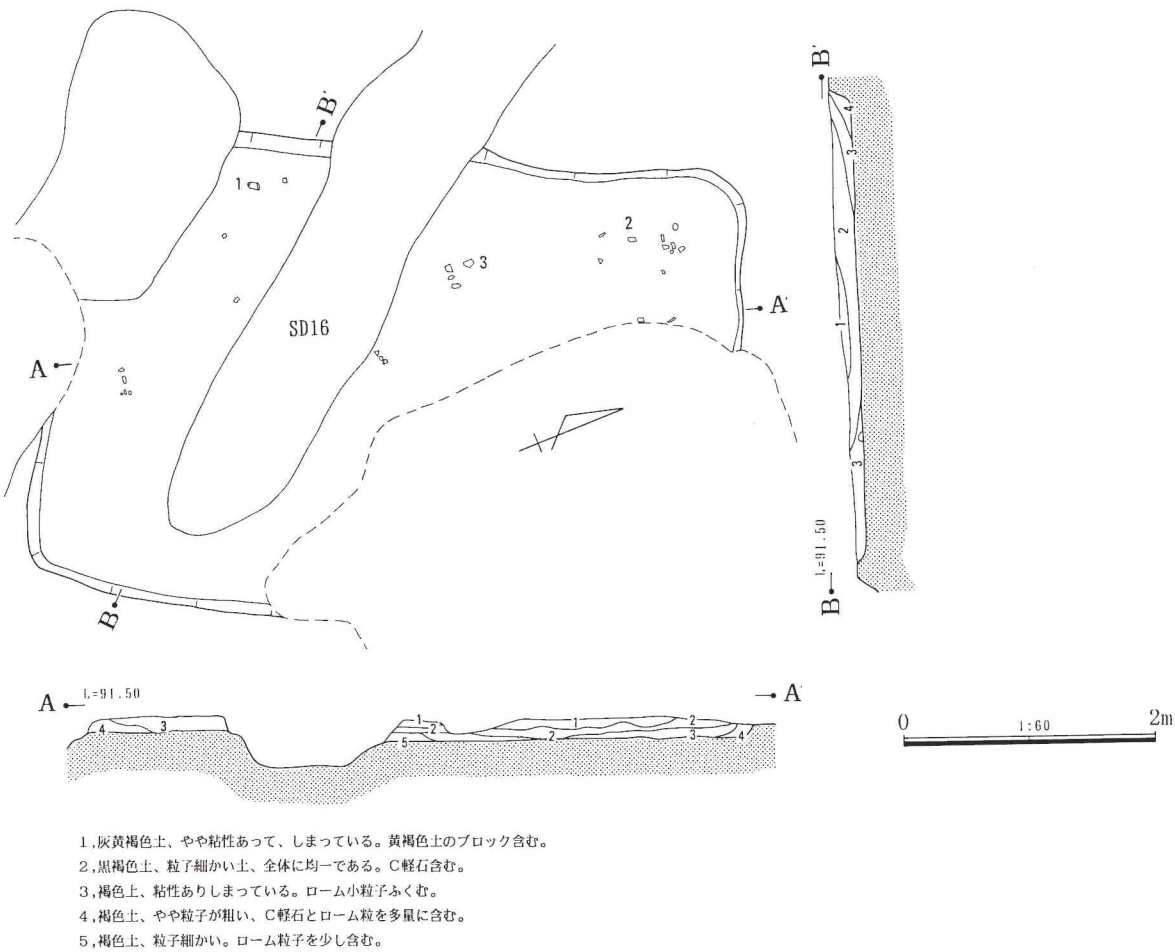


図20 22号住居跡遺構遺物図

25号住居跡(SI25)

3区北の南寄り部分で検出した。遺構確認面は、7号畠よりさらに下層である。東西2.7m南北2.8mの小型で方形な住居跡である。炉、竈、柱穴等の施設は検出できなかった。床面は全体的にやわらかく、井野川泥流上部の褐色シルト質の土の上に直接つくられている。住居からの出土遺物には、内面は筥磨き、外面が筥削りされた壺、古墳時代後期とみられる長胴甕、古式土師器のS字甕などがある。しかし、これらのうち一番新しいとみられる長胴甕は胴部小破片である。

25号住居は5号畠を切り、5号畠よりは新しい。また、南側は35溝、中央は11号溝に切られ、これらの溝よりも古い遺構である。35号溝は7号畠調査後に確認し検出した、7号畠よりも下層の溝であり、また、11号溝は上層の7号畠を切り、さらに新しい段階の溝である。この住居跡は5号畠埋没後、7号畠以前の遺構であることは確実で、2枚の畠の時期を決定する上でも重要である。なお、土師器甕の胴部破片は、筥削り後に部分的に筥磨きされており、5世紀或いは6世紀でも早い段階の土器と考えられる。

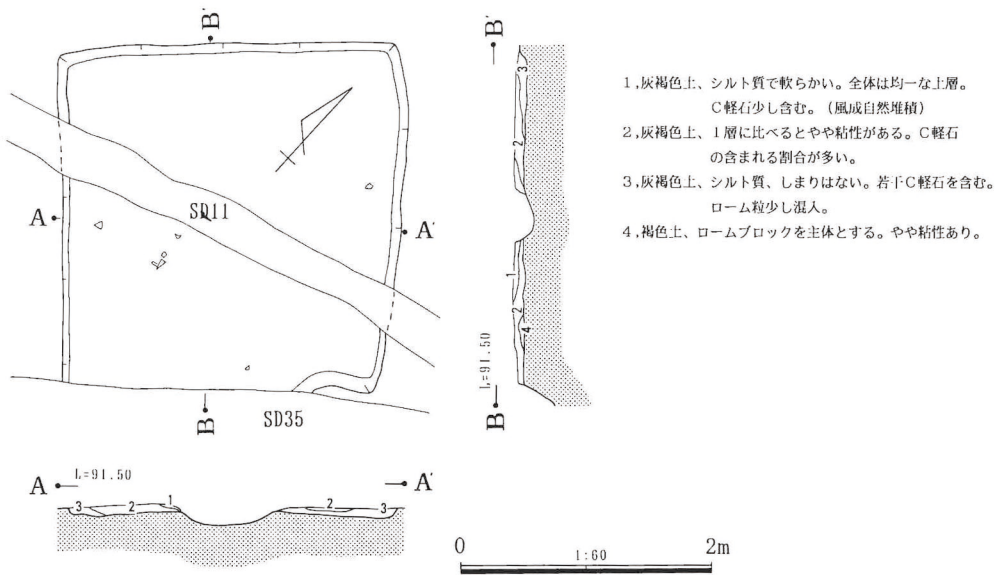


図21 25号住居跡図

24号住居跡(SI24)

3区北の南西隅で検出した。南北2.45m、東西は西側が調査区外のためはっきりしないが、検出範囲内では1.9mである。住居跡南東部に幅0.5m奥行き0.4mの竈をもつ。竈の袖は8～10cm程と、わずかに住居内に伸びている。竈内部には古墳時代の高坏脚部破片を利用した支脚を検出した。また竈の前面には東西50cm、南北90cmの範囲に炭化物と灰が広がっていた。柱穴、壁柱穴は確認できなかった。

この住居跡はこの付近に広がる7号畠を切ってつくられており、7号畠よりも新しい住居跡である。また、住居跡の床面より5cmほどの間層をもって、7号畠のサク部分を埋める土によく似た洪水層が埋没している。

7号畠は洪水層によって埋没した遺構である。その後24号住居がつくられているが、この住居を埋める洪水層は明らかに7号畠を埋める洪水とは別の、より新しい時期のものである。

出土遺物は、土師器甕の胴部破片と8世紀段階の浅くて小型の坏があるが、坏は不注意から盗難にあった。

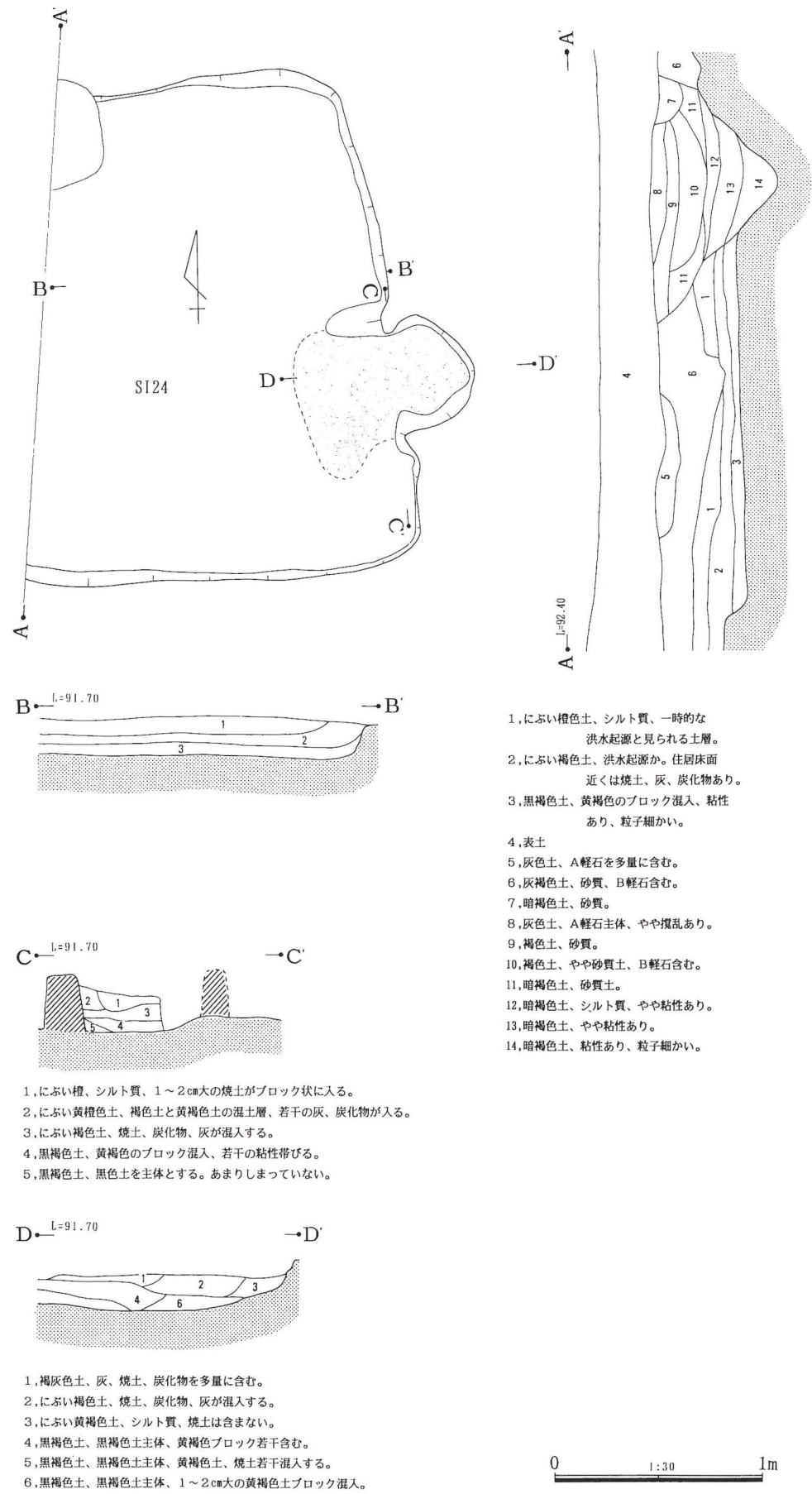


図22 24号住居跡図

30号住居跡(SI30)

4区西側で検出した。遺構検出面は上層のB軽石下水田跡よりも下層である。南北5.2m、西側は調査区外で不明だが、調査範囲内では東西は3.9mである。調査区で東側に南北に柱穴が2本検出されているが西側では未検出であり、このことから東西幅は5m前後はあると考えられる。住居の東側中央やや北寄りには、住居内に袖をもつ竈がある。竈幅は95cm、袖の長さは左が67cm、右が62cmである。袖はやや砂を含む鼠色の粘土が主体である。北側には口縁を下にして甕がふせられている。断ち割りで見ると口縁は掘方の上に置かれ、床の構築土と一緒に埋められている。ただ、左袖の先端はこの甕と接した位置であり、甕は竈の袖の補強用と推定される。竈内はよく焼けており、炭化物や灰、焼土を含む土で埋没している。竈の南には隅丸長方形の貯蔵穴がある。貯蔵穴の規模は南北89cm、東西83cm、深さ50cmである。周溝は幅12cm～15cm、深さ10cm～12cmの規模である。南側から南東部では壁に近い位置であるが、北東部では検出した壁とやや距離をもつ。住居の北側には竈とも考えられる崩れた状態の粘土があるが、これを竈の右袖とすれば、調査したときには明らかにできなかったが、2軒の住居跡の重なりとも考えられる。床面は掘方の上部に厚く褐色土と井野川泥流の黄褐色土の混土を入れ床をつくっている。上面はかたくしまっている。住居からの出土遺物には土師器の坏と甕がある。遺物は比較的床面に近い状況であり、住居廃棄後のあまり時間を経ない段階での廃棄と考えられる。竈の袖強化に使用されたと考えられる甕の胴下部は破損し、破片は散った状況である。

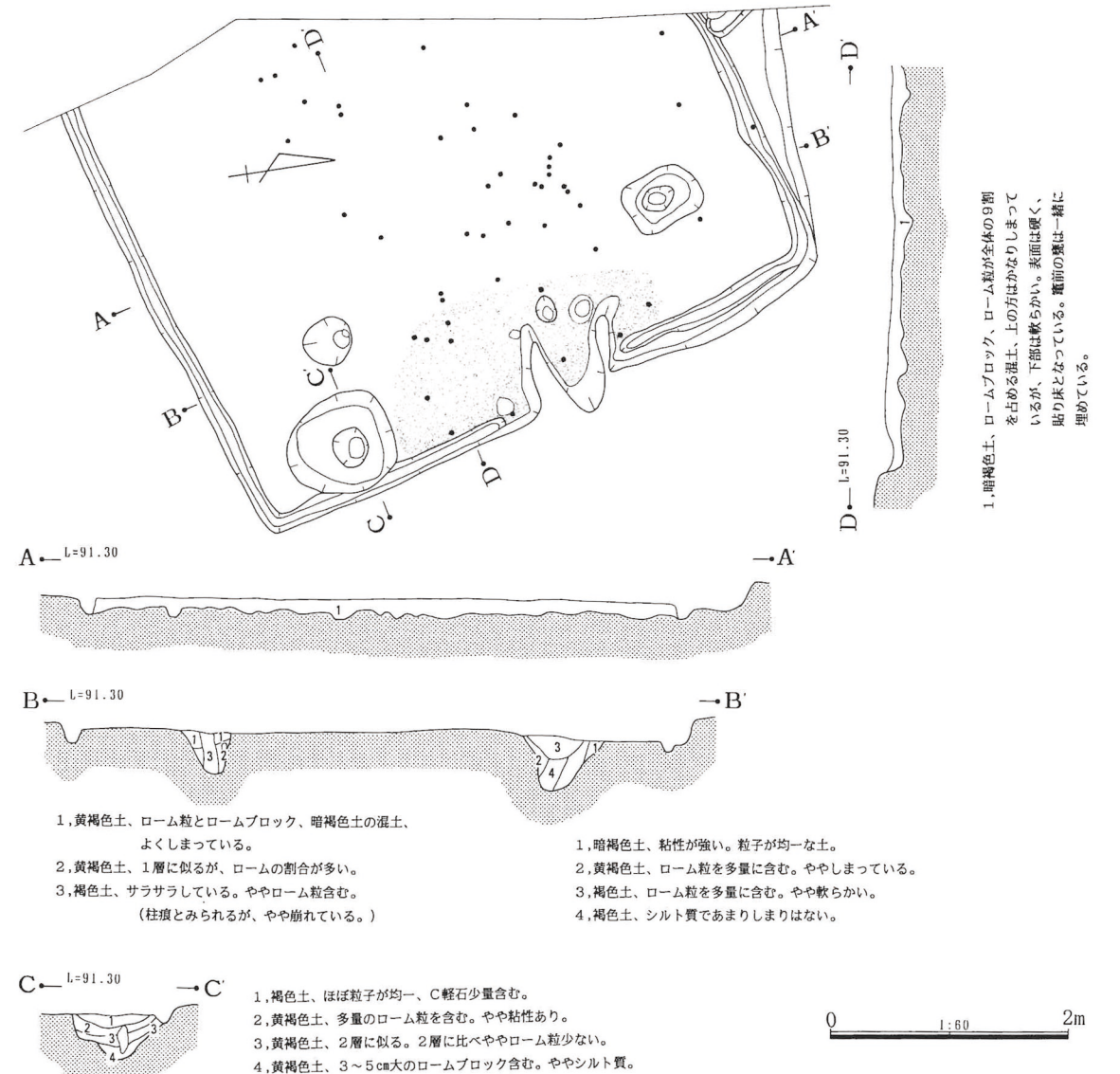


図23 30号住居跡図

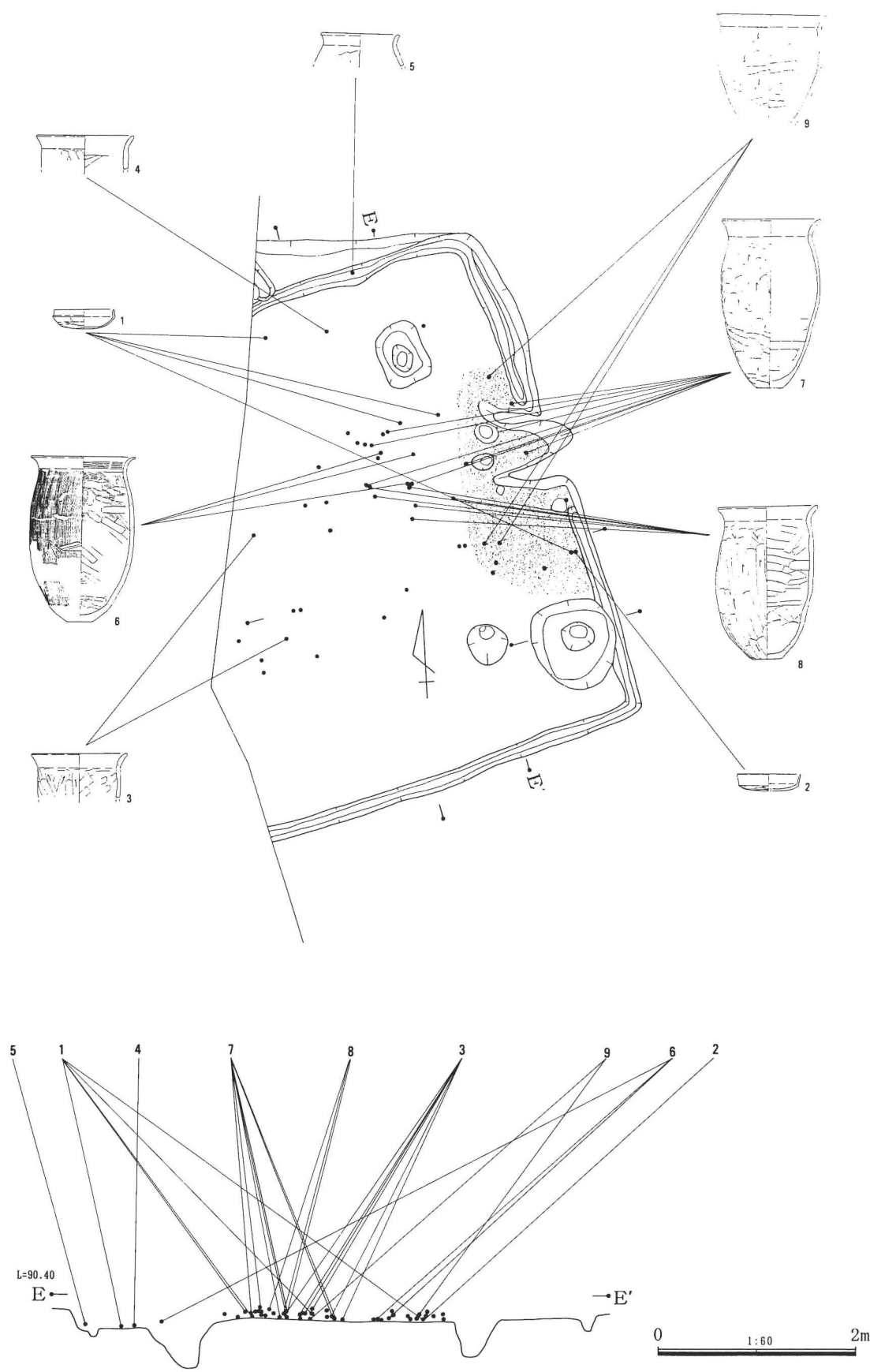


図24 30号住居跡遺物出土状態図

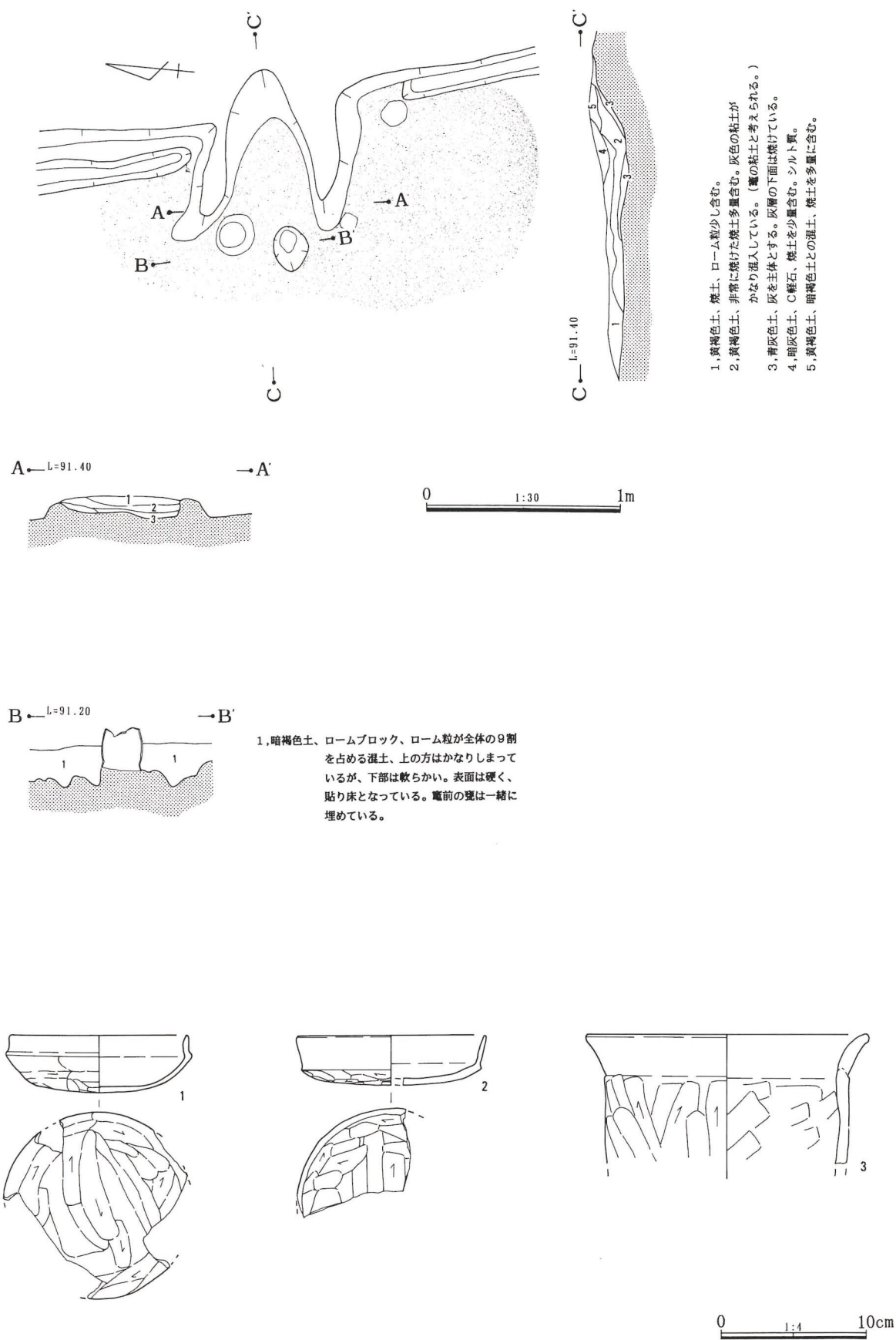


図25 30号住居跡かまど並びに遺物図

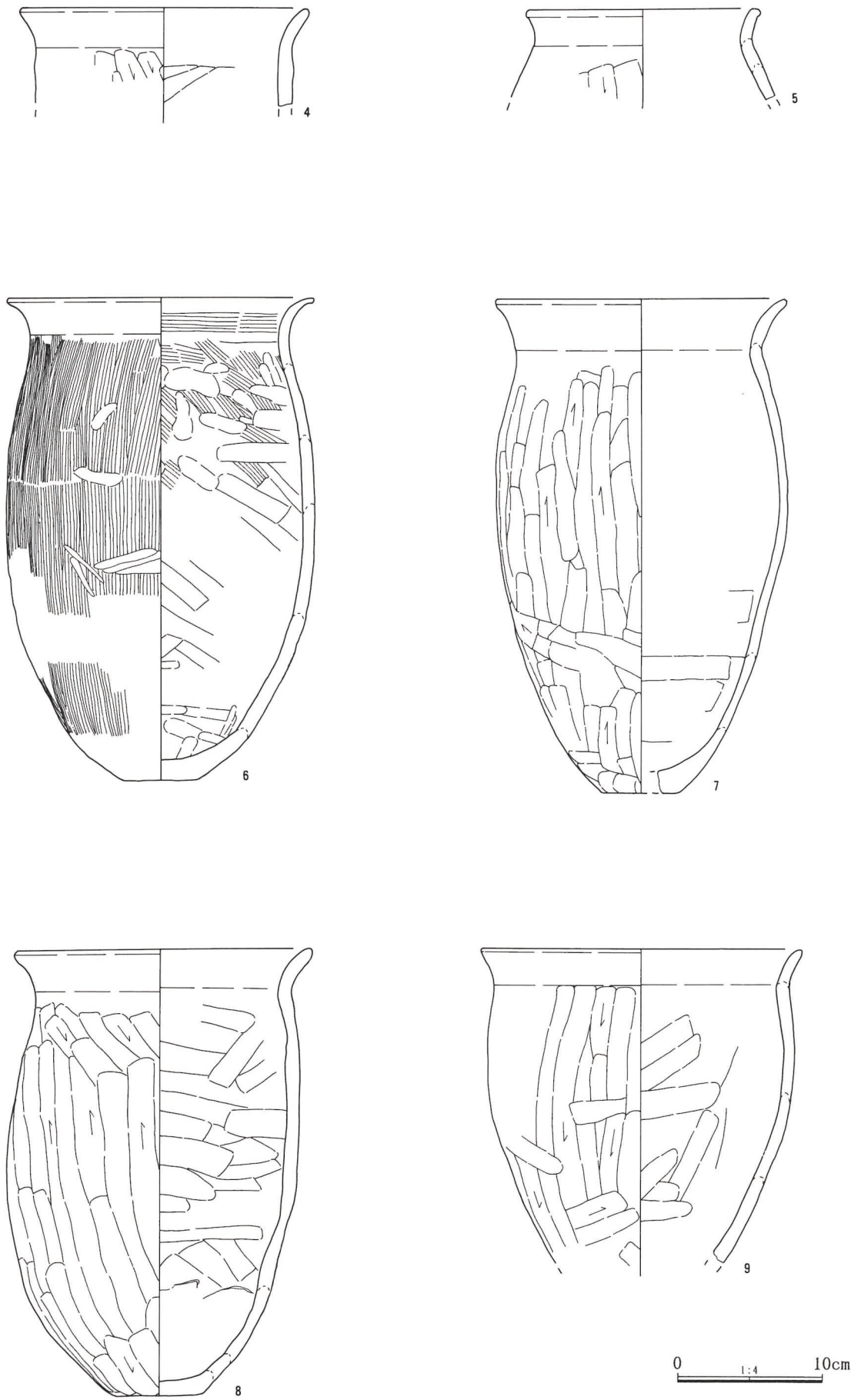


図26 30号住居跡遺物図

29号住居跡(SI29)

5区の北西隅で検出した。北側は調査区外のため不明である。南側は50号溝に切られる。平面の規模は東西3.8m、南北は不明であるが3m以上はあると考えられる。炉及び竈は検出できなかった。柱穴は南側に2本検出した。東は直径30cm、深さ15cm、西側の柱穴は直径25cm、深さ25cmである。なお住居の壁際に沿って25cmから60cmの間隔で、直径5cm、深さ5cm程度のピットが並ぶ。

出土遺物は土師器坏と高坏がある。前者は土器形態から8世紀代に位置づけられる。

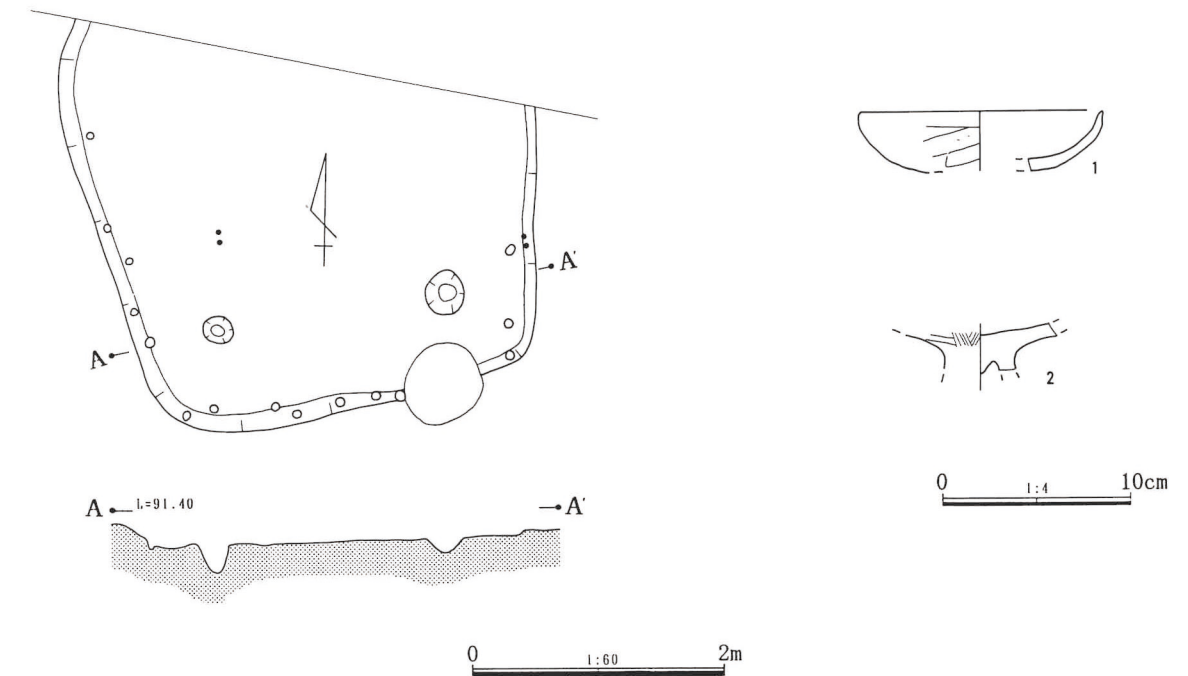


図27 29号住居跡遺構遺物図

3, 畠跡

5号畠跡(SH5)

3区北でほぼ全面に平行する溝を検出した。これらの溝はその状況から、畠跡のサクと判断し、5号畠と名付けた。この5号畠の南半部の上層には7号畠がある。5号畠は7号畠の調査を終了して、その下部での確認検出である。よって、7号畠よりは古い遺構である。なお、7号畠がある位置以外の遺構も連続性があり、畠跡と同時期のものと考えられる。

遺構の検出は井野川泥流上面まで達した複数条の平行する溝跡確認から始まった。溝中の覆土は浅間C軽石混じりの褐色土で、これを剥いでいくと溝底には一対の小ピット、及び先の丸い鋤ないし鍬先よってついたと見られる痕跡が見つかった。これらの鋤ないし鍬先による大小のピットは溝位置に限定されることから、この溝は畠のサクと考えた。なお、この畠の遺構を確認したのは、あくまで井野川泥流上面であった。泥流層よりさらに上部でも耕作によって土が攪拌していることが十分予想された。しかし、何分にも検出した遺構は、泥流面についた農具の痕跡だけであり、畠の使用状況の確認や、畝の検出はできなかった。

畠は北東隅の1号、2号柵列から南北方向に広がるものと、それより南側のほぼ直行する方向に広がるものがある。サクとサクの間隔は30cmから80cmである。ほぼ平行であるがせまくなったり広くなったりしているところもある。鋤ないし鍬によって掘削されたサクの幅は30cmから40cmである。なお、鋤ないし鍬による掘削が浅いところでは溝は確認できなく大小のピット列にすぎないところもある。ただし、ピット列はサクとみられる溝に続いており、連続する遺構考えられる。サクは平行しており、畠の耕作した際、サクの位置が同じ場所であったことが窺われる。

この畠跡より新しい遺構では25号住居と22号住居がある。これらの住居は6世紀の土器が出土しており、5号畠を切り込んでつくられている。6世紀代の高坏を出土した35号溝、8世紀の須恵器を出土した11号溝、8世紀の土師器甕を出土した23号溝も5号畠よりは新しい。なお、5号畠の南東の32号掘立柱建物跡は、5号畠と同じ面で確認し検出した遺構であり、また5号畠のサク列がない位置であることから、畠と同時期存在の可能性はある。

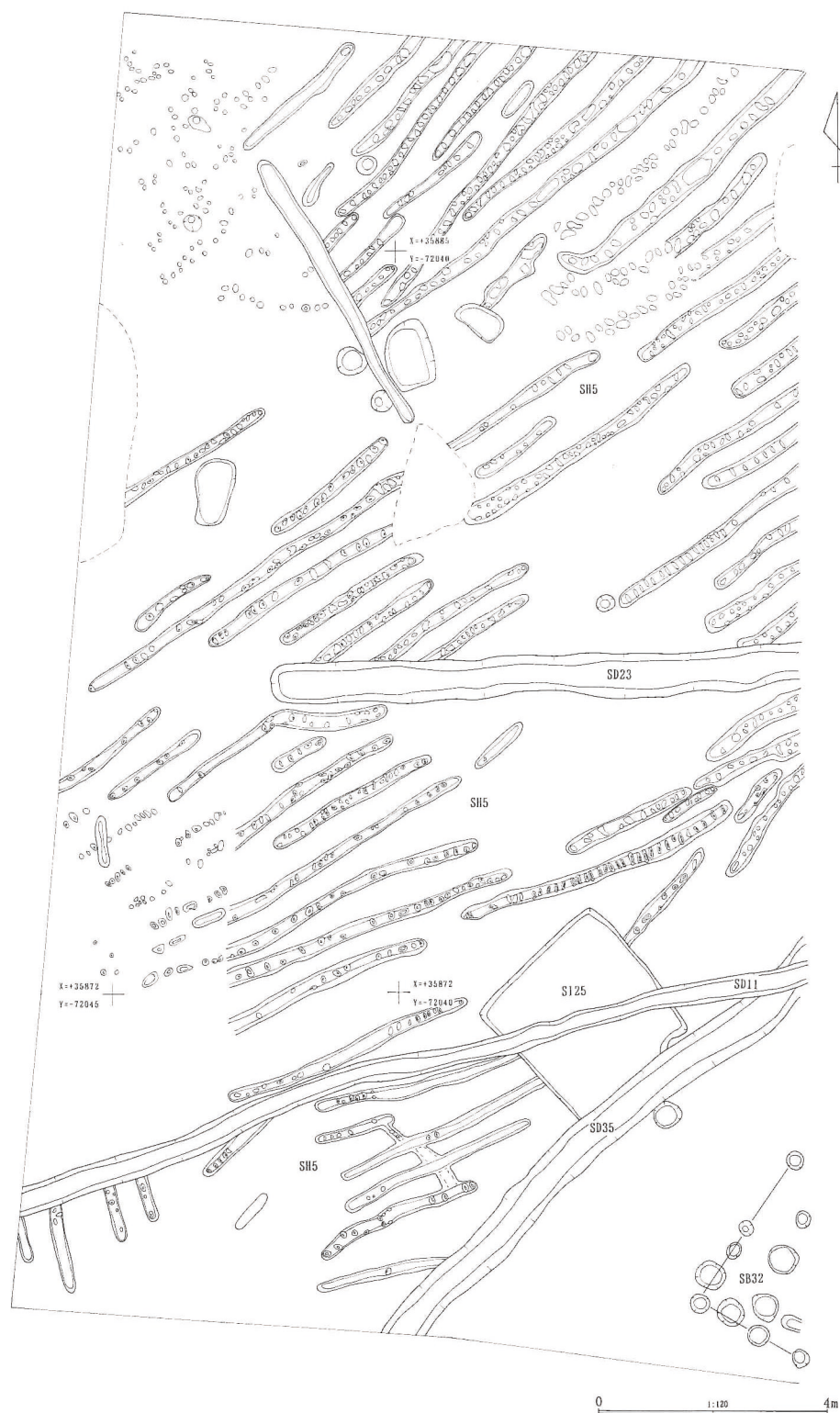
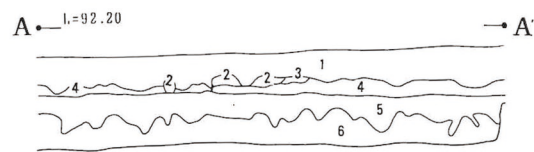
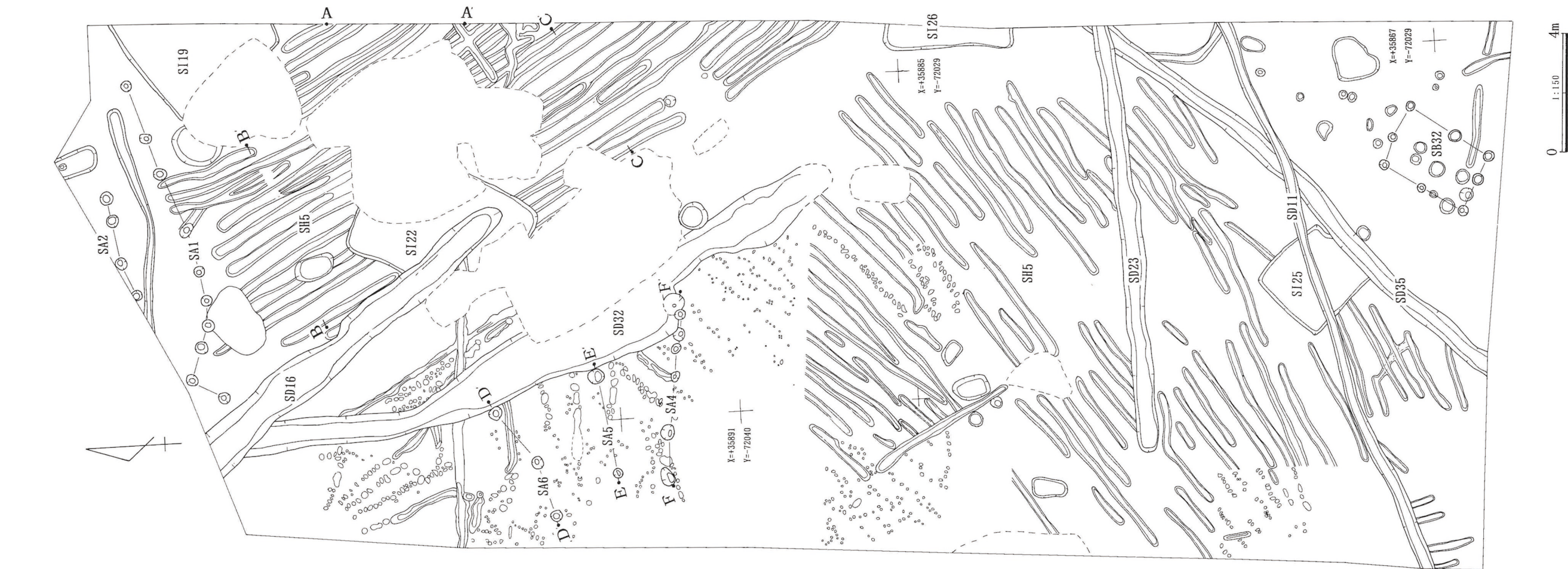
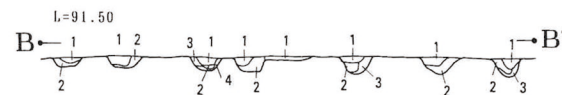


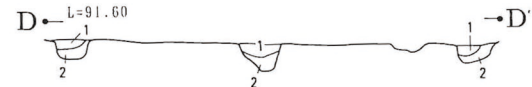
図28 5号畠跡南半部



- 1, 表土。
- 2, 灰褐色土、A軽石主体とする。
- 3, 褐色土、B軽石がかなり含まれる。砂質。
- 4, にぶい褐色土、粘性あり。二ツ岳の土を主体とした洪水層と見られる。
- 5, 褐灰色、C軽石含む。ややシルト質。
- 6, にぶい褐色土、シルト質。井野川泥流堆積物上層。



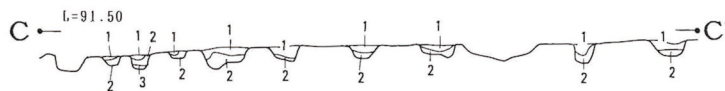
- 1, 褐色土、ソフトローム小粒子、暗褐色の1～2cm大のブロック含む。
- 2, 褐色土、褐色土とソフトロームの混土。
- 3, 褐色土、ソフトローム主体。軟らかい。
- 4, 黄褐色土、ソフトローム主体、軟らかい。



- 1, 灰黄褐色土、砂質土、C軽石含む。
- 2, 褐灰色土、C軽石含む。しまっていない。
- 3, にぶい黄褐色土、ややシルト質、C軽石含む。
- 4, にぶい黄褐色土、ややシルト質、上層より軟らかくロームブロック多い。



- 1, にぶい黄褐色土、ややシルト質、C軽石含む。(柱痕か)
- 2, 灰黄褐色土、砂質土。
- 3, にぶい黄褐色土、ソフトローム主体の土。



- 1, 褐色土、ソフトロームと褐色土が2～3cmのブロックとなって入る。さらさらして軟らかい。
- 2, 褐色土、やや砂質、2～5cmのソフトロームブロックと2cm程の暗褐色土ブロックが混土となっている。軟らかい。



- 1, 褐灰色土、やや砂質で軟らかい。C軽石含む。
- 2, 黒褐色土、かなりしまっている。
- 3, 灰黄褐色土、軟らかい。
- 4, 褐灰色土、砂質、C軽石含む。しまっている。



畠と同時存在した住居があったかどうかははっきりしない。北側の19号住居は、畠と切り合いのない住居である。この住居の南に存在した畠は北にはなく、ここは畠の東端の様相である。しかし、畠と住居の切り合いがないといっても、その距離が20cm程しかなく、あまりにも近すぎる。住居の周提を考えなければ、19号住居が畠と同時に存在した可能性はあろう。

なお、5号畠跡検出時に出土した土器は耕作の時に、下層にあったものが畠中に入ったものと考えられるが、S字甕のような古墳前期の土器から内斜口縁坏に代表される6世紀はじめの土器までがある。5号畠の時期は、古墳前期から6世紀前半の幅で考えられる。

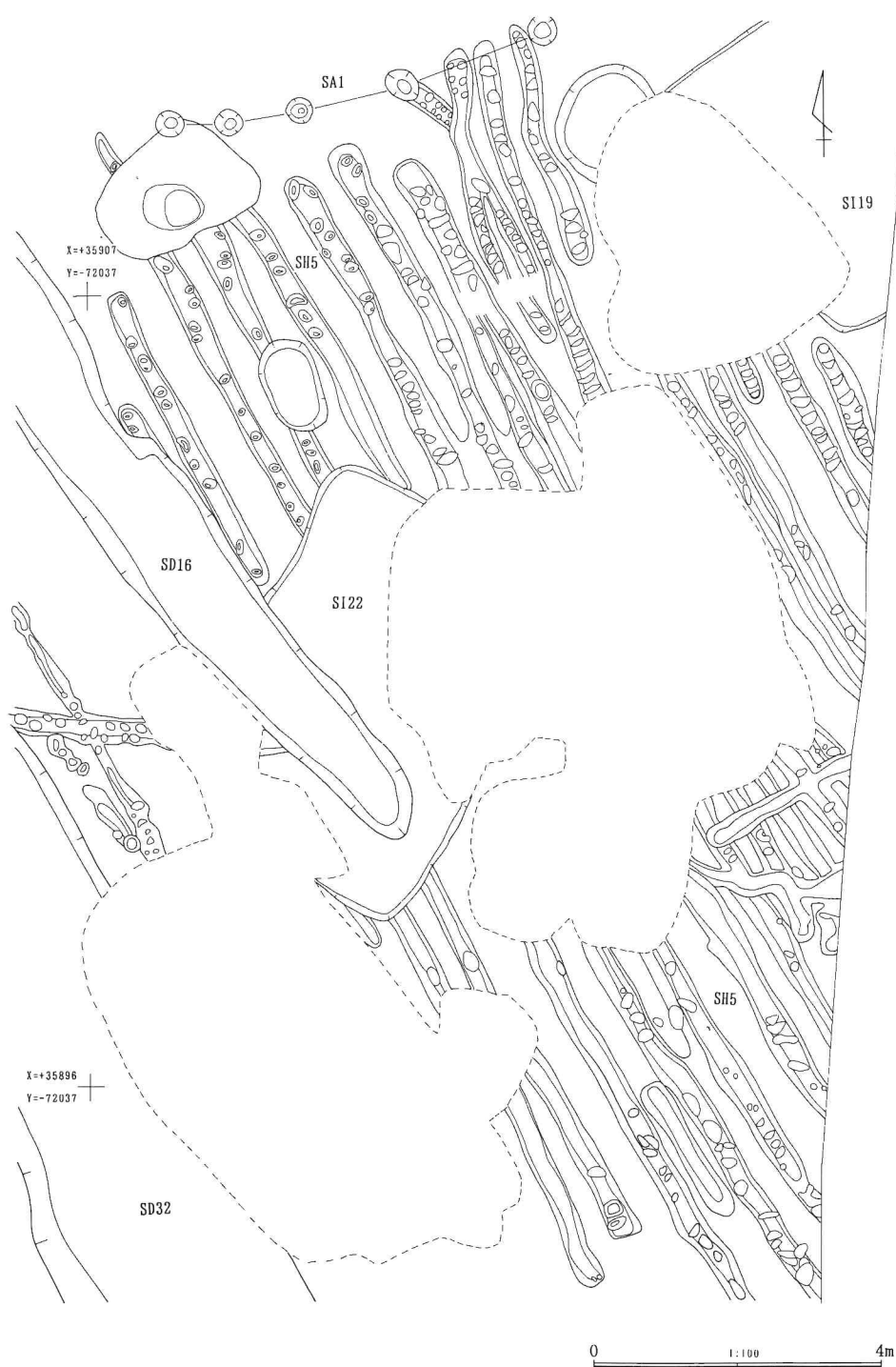


図30 5号畠跡北半部

石製模造品の出土

3区北では石製模造品が5号畠の西、柵列SA4～SA6南付近から比較的まとまって出土している。ただし石製模造品の出土位置、及び層位は一定ではない。1と6だけが確実に5号畠の遺物である。泥流層に比較的近い褐色土中での出土で、1は5号畠のサクとサクの中間、6が発見された場所はサクが見られない部分である。なお、2から5は5号畠調査時点ではなく、上層の7号畠調査時での発見である。なお、8は北側の現代溝SD16からの出土、7は3区北覆土出土である。

以上のように全ての石製模造品が5号畠と直接結びつけられる状態での出土ではなく、5号畠の祭祀行為の遺物とも断定はできない。しかし、7、8を除く6個の石製模造品は平面的に見ると比較的近い位置での出土である。7号畠の石製模造品は、耕作により5号畠の模造品が上に移動した可能性が高い。石製模造品の出土は5号畠で祭祀行為があった可能性を示す。



図31 石製模造品出土位置図

石製模造品の特徴

石製模造品の器種は円板と剣形の2種類であり、臼玉などは出土していない。1と6は有孔円板で1は2孔、6は1孔である。1は一部欠損するが、表面と側面の大部分はミガキ成形している。なお、裏面は剥離面が大部分で、一部分だけに成形痕が残る。6は表面、裏面、側面とも丁寧にミガキ成形している。1は黒色片岩、6は蛇文岩製である。これら以外の個体は剣形である。2は上部が欠損するが、表裏に鐙の表現が見られ、しっかりしたつくりである。石材は滑石。3も上部欠損、切先の表現が鋭い。上下にだぶってある2孔のうち、上の孔は貫通していない。上の孔をあけると失敗して、あけなおしたとも考えられる。なお、側面部は打ち欠いたままである。滑石質岩製である。4は丁寧にミガキ成形されている。側面の片方はカーブを描き全体につくりは丁寧である。緑質片岩。5は打ち欠きのままの完形品。切先の部分も打ち欠きで仕上げている。孔はなく、石材は滑石質蛇文岩である。7は完形品である。全体に粗雑なつくりで、表裏及び側面の一部分にだけミガキ成形が認められる。石材は滑石。8は下部が欠損、表裏はミガキ成形だが側面は打ち欠いたままである。滑石製。



図32 3区出土石製模造品図

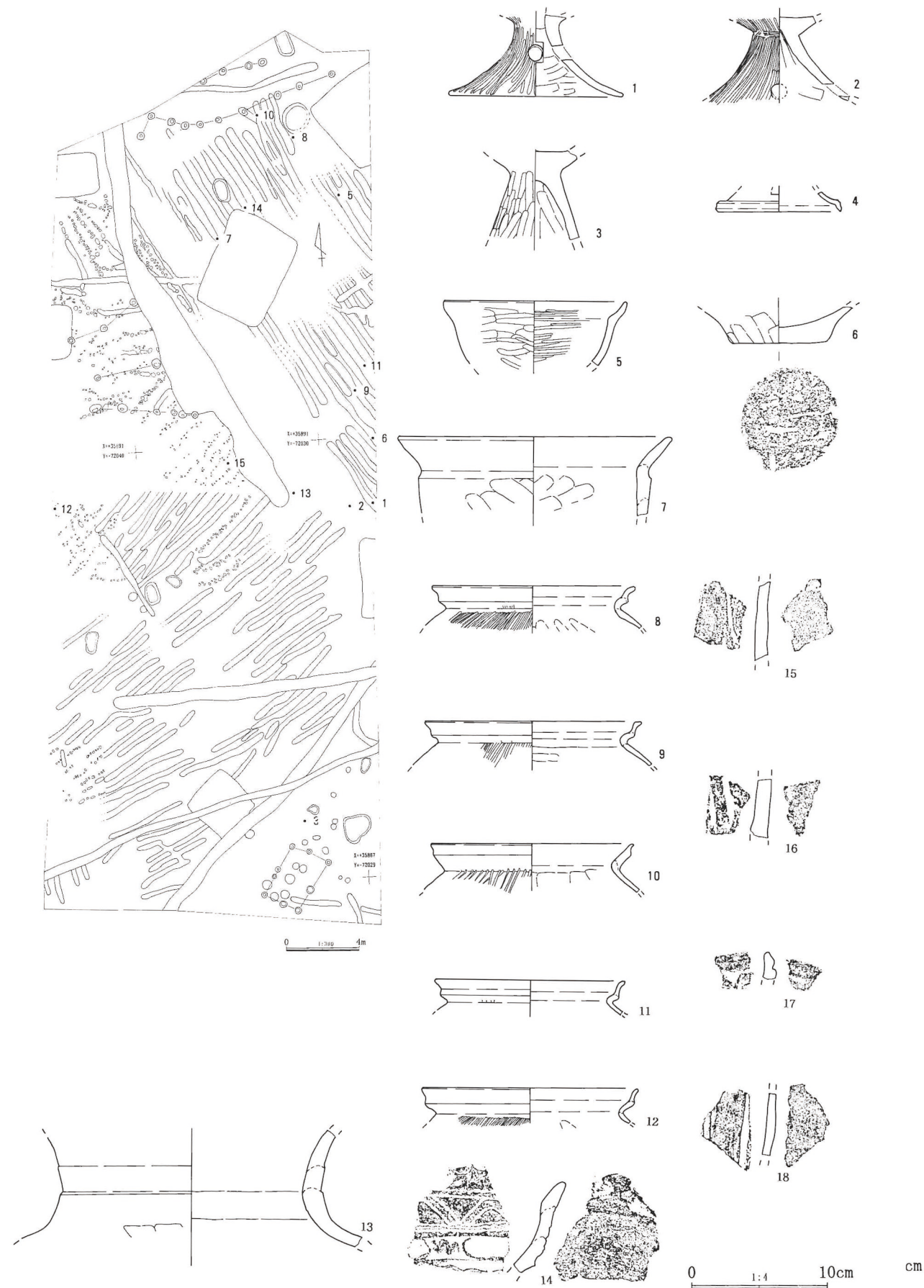


図33 5号畠跡出土遺物図

1号、2号柵列

5号畠の北及び北西部でピット列を検出した。ピットの大きさは直径30cm前後、深さ10cmから30cm程度である。北側は東西方向にピット列が2列ある。そのうちSA1と名付けた南側のピット列は1mから2m程度の間隔で19号住居のすぐ北から西に向かって並んでいる。ピット位置は5号畠が途切れる線にほぼ一致する。SA1の北側には2m程距離を置いた位置に、東西方向のSA1と平行するピット列SA2がある。ピットの間隔は0.1mから1.5m程度である。SA1及びSA2の両ピット列ともほぼ直線上に並んでおり、また深めなピットが多い。5号畠の途切れる位置でもあることから5号畠と有機的関連のある柵状施設の可能性がある。また、西の位置にも東西方向のピット列を検出したがこれも柵列と考えられる。(SA4～SA6)

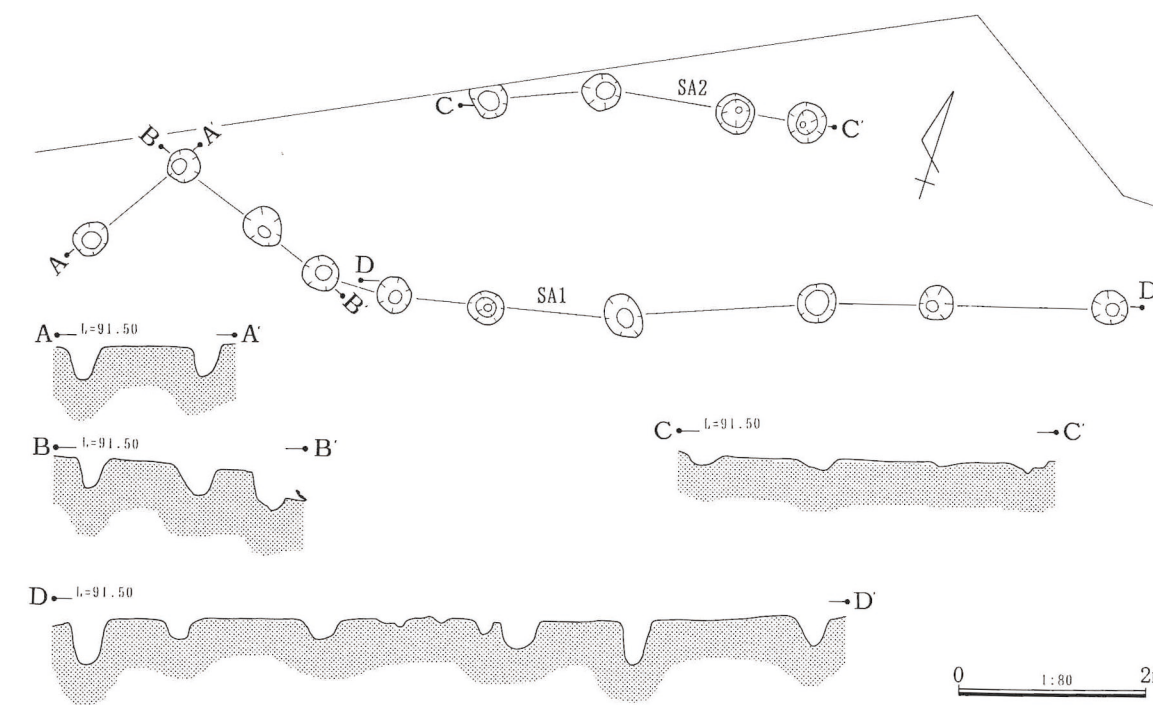


図34 1、2号柵列

32号掘立柱建物跡(SB32)

3区北、5号畠の南東で検出した。7号畠の調査後、その下部を調査した時に柱穴の存在を確認したものであり、7号畠よりは古い遺構である。建物は2間×2間で南北に長い。規模は南北3.1m、東西2.1mである。棟方向は北-32度-東と、5号畠の方向に近い。また、この建物跡を検出した部分にはサク跡が見られず、32号建物跡は、5号畠と同一時期の可能性もある。柱穴は直径30cm、深さ15cm～20cmである。また、柱穴の埋土はロームを幾分含む軟らかい土であることから、貧弱な上屋であったと推定される。

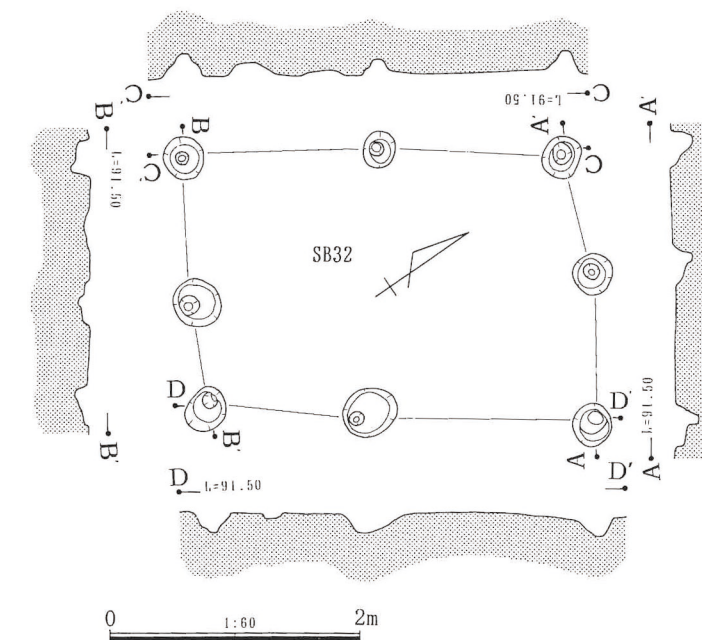


図35 32号掘立柱建物跡図

7号畠跡

3区北で、砂質の表土を剥いていくと、調査区の南部分で黄褐色の層を確認した。この黄褐色土はシルト質で全体に均一であり、洪水のような一時的堆積物と考えられた。この層の直下で畠跡と考えられる畝とサクを検出した。畝は高さ5cm程度でかなり低く上面は偏平である。一方、サクは溝状で明確に残っていた。畝とサクの方向はほぼ南北で約23m続く。この7号畠の下部は5号畠であるが、サクの方向は異なる。7号畠のサクとサクの間隔は、50cmから80cmでかなり規則的である。南端部分ではサクを溝ではなく、小ピット列の図で表現している。この部分は、7号畠の土が薄い部分である。しかし、下部の井野川泥流堆積物の黄褐色土と畠の黒色土の色の差がはっきりしていた。よって、小ピットは耕作によってついた痕跡であると判断できた。小ピットは2個で対になるものが多く、間隔は15cm程度である。小ピット列は北側のサクに連なり、耕作に使用された鋤もしくは鍬は、先が二股に分かれている形態が考えられる。

畝部分については、作物の痕跡は確認できなかった。なお、この畠の調査終了後、下層の遺構を検出する時に多数の土器が畠の中から出土した。畠を起こした際に下にあった土器が移動したと考えられる。また、7号畠の北の部分では、石製模造品が畠の土の中から出土している。これは、5号畠の項でふれたが5号畠の石製模造品出土位置と重なっており、5号畠の祭祀遺物を掘り起こしたと考えられる。

畠跡には水路と考えられる23号溝、11号溝がはしっているが、遺構確認や地層からも溝は畠より新しい遺構である。この畠跡の南西部には24号住居があるが、この住居は畠跡が埋没した後に造られた住居である。

7号畠の土を完全に除去した後、下層で5号畠を検出した。なお、この5号畠は35溝に切られている。よって、35溝は5号畠より新しく、7号畠よりも古い遺構である。

7号畠の北端は32号溝直上まで続くため、32号溝は7号畠より古い。なお、32号溝からは土器が多数出土しており、7号畠の上限をおさえる手がかりとなる。

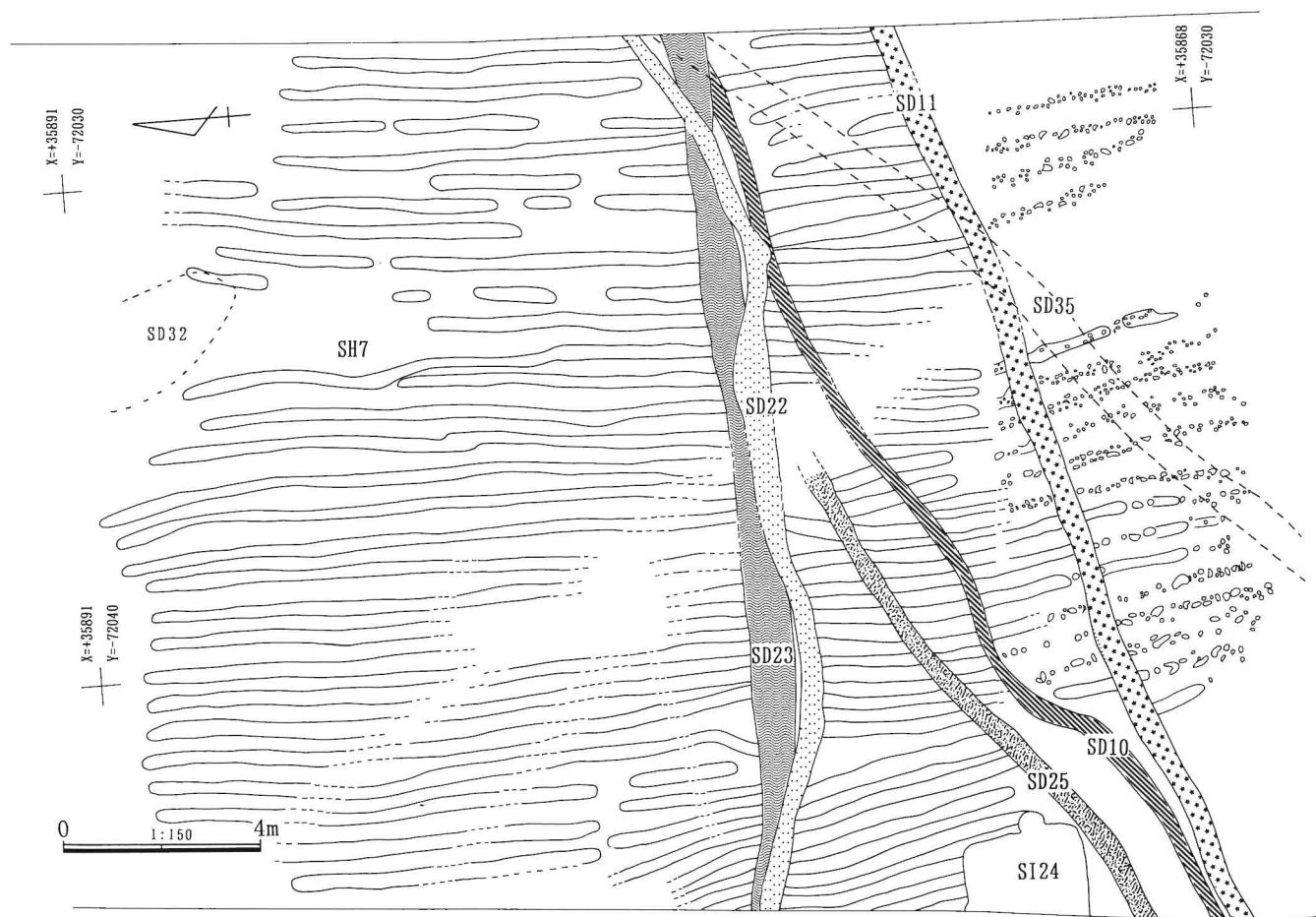
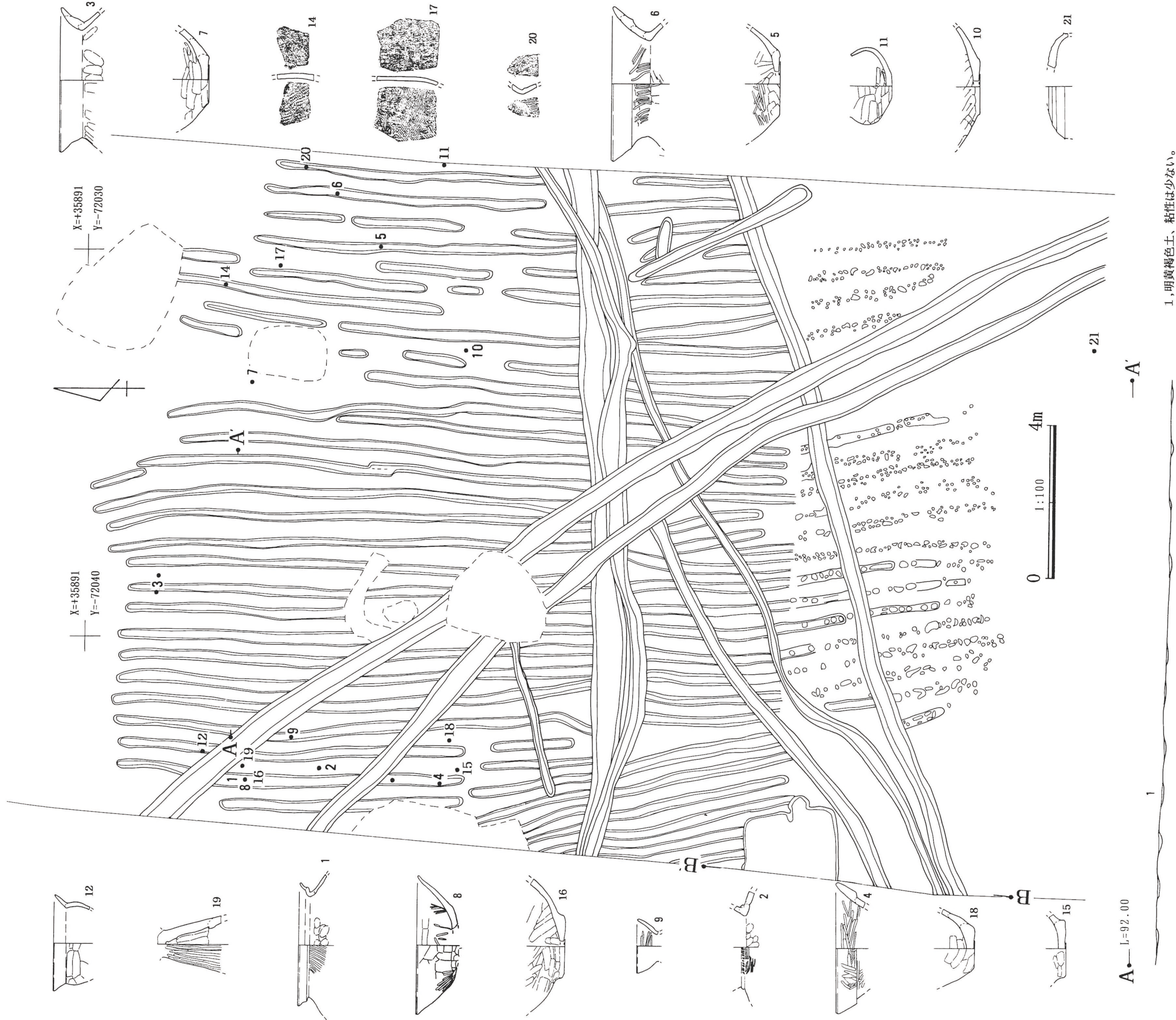


図36 7号畠跡と溝



A • L=92.00

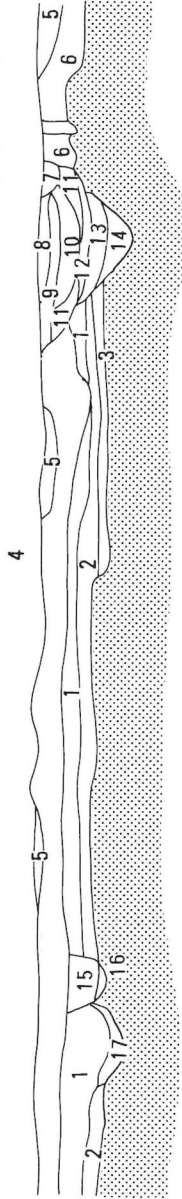
—A'

1

1, 明黄褐色土、粘性は少ない。
粒子は均一で洪水層と考えられる。

B • L=92.40

—B'



1, にぶい橙色土、シルト質、一時的な洪水起源と見られる土層。
2, にぶい褐色土、洪水起源か。住居床面近くは焼土、灰、炭化物あり。
3, 黒褐色土、黄褐色のブロック混入、粘性あり、粒子細かい。
4, 表土

5, 灰色土、A 軽石を多量に含む。
6, 灰褐色土、砂質、B 軽石含む。
7, 暗褐色土、砂質。
8, 灰色土、A 軽石主体、やや攪乱あり。
9, 褐色土、砂質。
10, 褐色土、やや砂質土、B 軽石含む。
11, 暗褐色土、砂質土。
12, 暗褐色土、シルト質、やや粘性あり。
13, 暗褐色土、やや粘性あり。
14, 暗褐色土、粘性あり、粒子細かい。
15, にぶい橙、シルト質、洪水起源か。
16, にぶい橙、やや粘性あり。
17, にぶい橙、やや粘性あり、シルト質。

図37 7号畠跡全体図

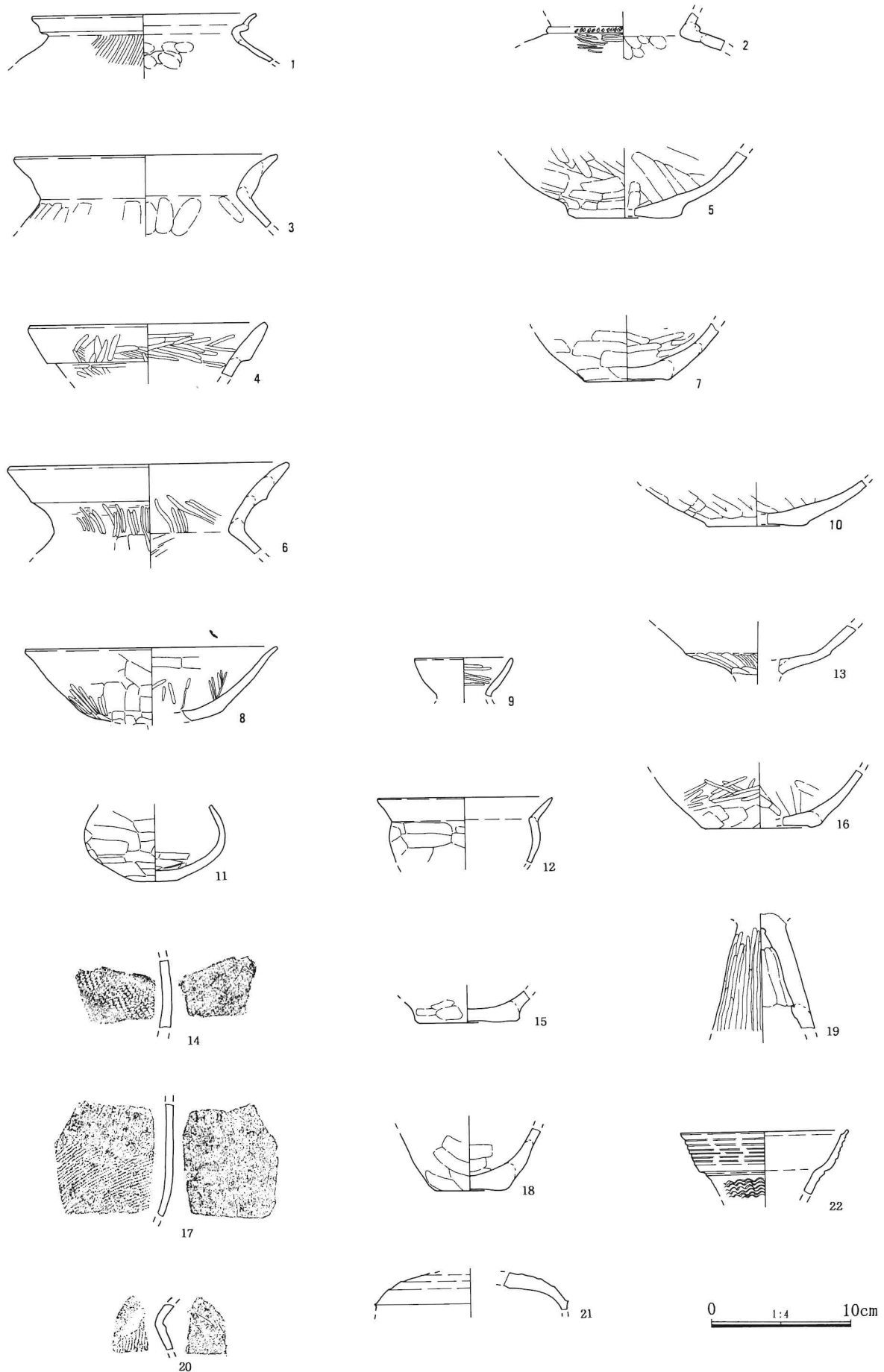


図38 7号畠跡出土遺物図

2、3号畠跡

3区南上層で検出した。2号畠は東西に60cm～80cmの間隔で平行して溝が走り、また3号畠も50cm～80cmの間隔で南北に規則正しく溝が並ぶことから畠跡と考えられる。しかし、検出したのはサク跡にとどまる。また2号、3号畠の西側は本来遺構が広がっていたと考えられるが、検出はできなかった。畠跡を埋めていたのは黄褐色の洪水層であり7号畠と同一時期とも考えられる。しかし、この地域一帯は11号溝や24号住居を埋めた8世紀以降の洪水もある。また、2、3号畠及び付近の洪水層中から9世紀段階の土器も出土していることから、これらの畠跡は7号畠跡より新しい段階の可能性もある。

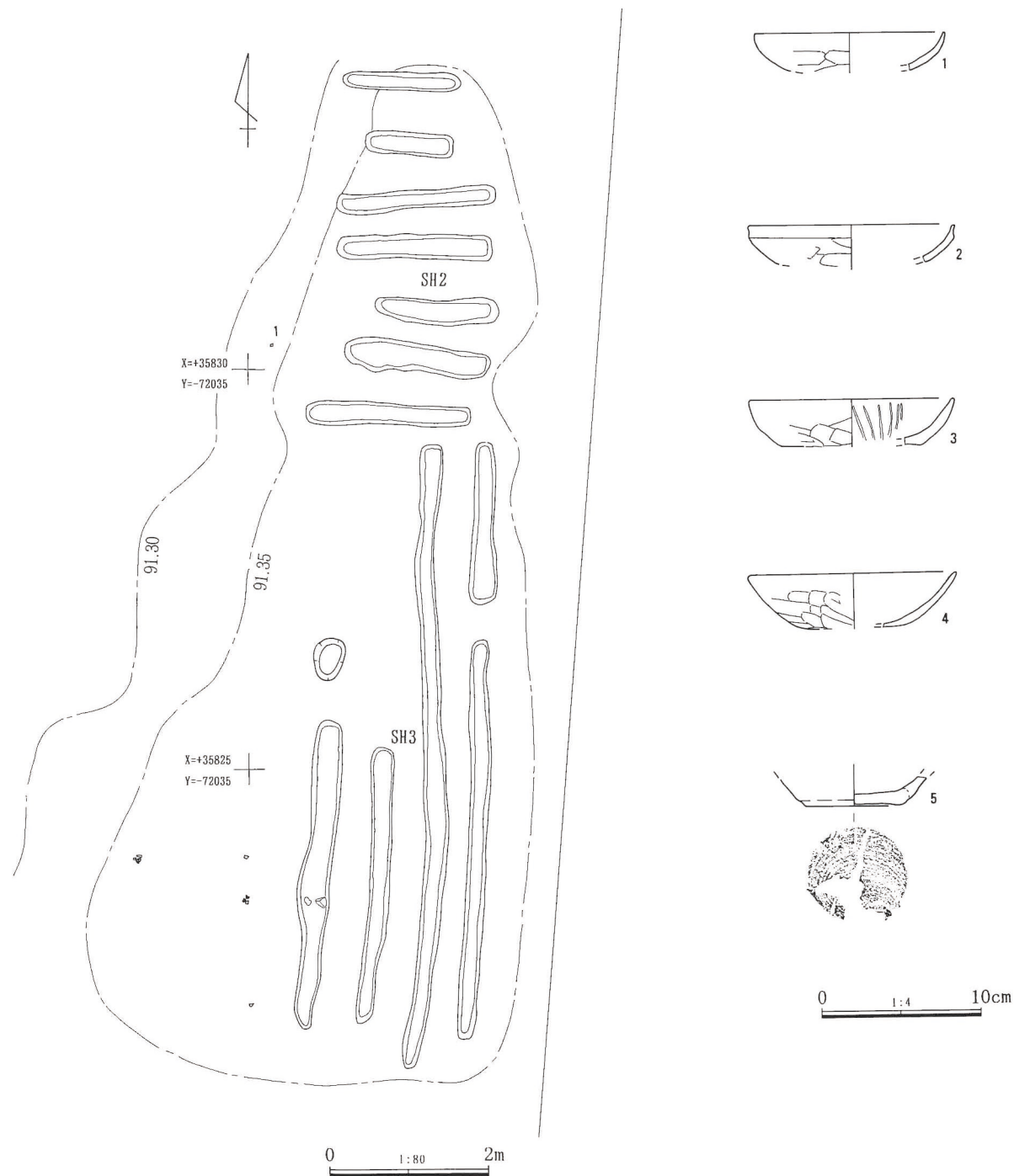


図39 2、3号畠跡と出土遺物図

4、溝跡

35号溝

7号畠調査終了後、下層で35号溝の存在を確認し検出した。7号畠よりは古い遺構である。溝幅60cm、深さ25cm～30cmである。溝の断面形はゆるやかな台形を呈する。溝は両側から土が自然に落ち込んだ様相であり、流水の痕跡は見いだせない。25号住居や5号畠を切り、これらよりは新しい。また、8世紀代の須恵器(図41-2)を出土した11号溝に切られる。なお、35号溝からは土師器の高坏が出土している。

3区北の溝について

7号畠を切る溝のうち、12号、13号溝、28号溝は覆土にB軽石を含み中近世に位置づけられる。

11号溝は西が高く0.5%の勾配率をもつ水路である。25号溝は浅い溝で中央付近で途切れ、それより東側は確認できない。10号溝は西壁の地層断面では11号溝を切る東への蛇行した水路である。殆ど勾配はなく、東方で22、23号溝に切られる。23号溝は底が凹凸な勾配率1.2%の東への水路で、22号溝に切られる。22号溝は勾配率0.5%の東への水路である。これらの溝覆土は黄褐色の洪水起源と見られる土である。

図41の1～3は11号溝、4は22号溝、5、6は23号溝からの出土である。



図40 35溝遺構遺物図

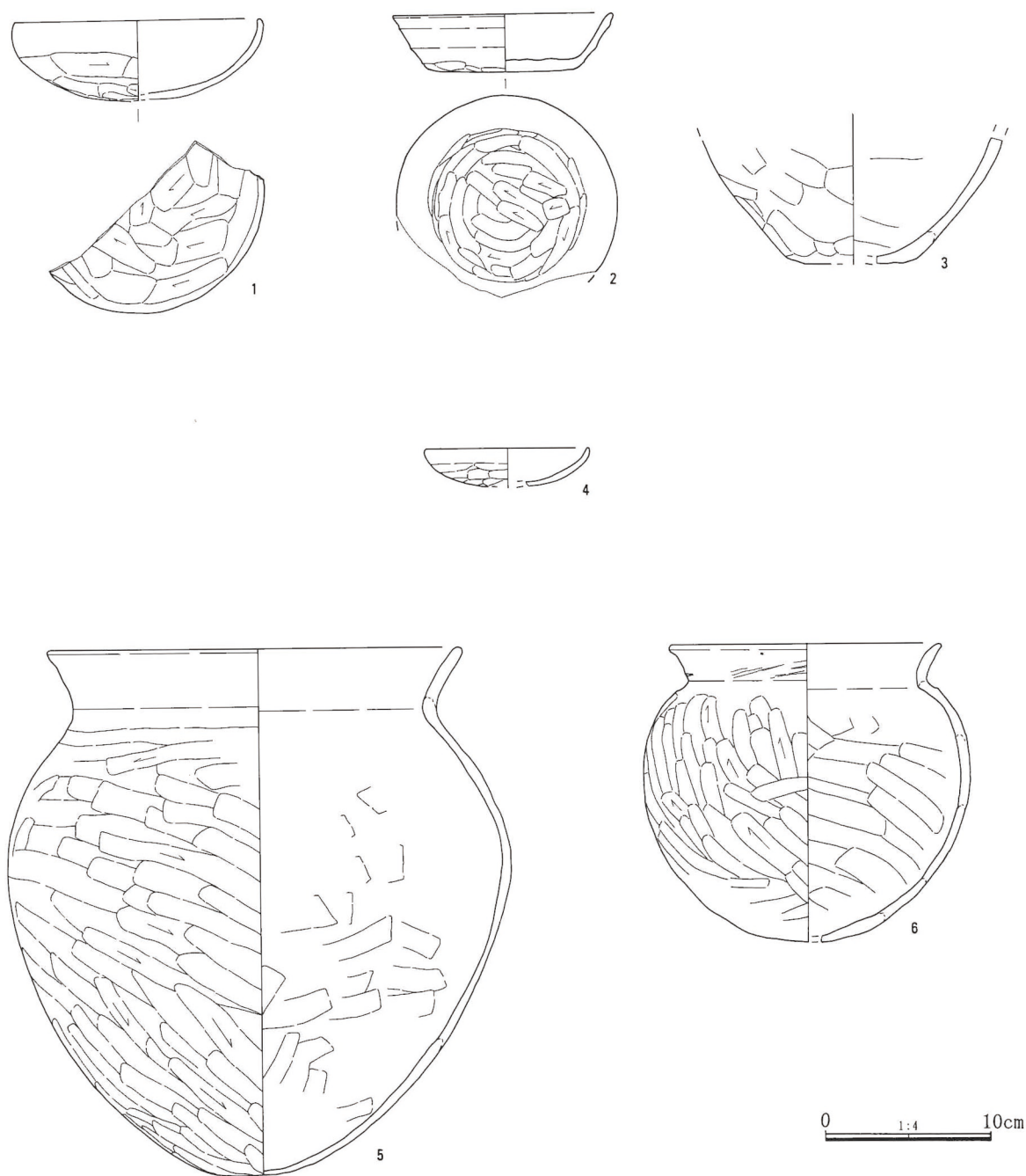


図41 3区北溝群出土遺物図

32号溝

3区北で検出した。5号畠と4号柵列のピットを切る溝である。中央から北では、北5度西、南ではやや東寄りで北25度西の方向となる。溝の北部は現代の溝SD17、北端では同じく現代溝SD16に切られ北限は不明である。南では溝は7号畠の部分まで伸び、やや幅広となってなだらかな傾斜で立ち上がる。7号畠とは溝の南端部分で切り合い溝の方が古い。また、溝の覆土上層に7号畠を覆う黄褐色の洪水層が連続することからも、溝の方が古いことが確認できる。

溝幅は北部で1.25m～1.5m深さ40cm～50cm、南部での最大幅3.1m、深さ35cm～50cm程度である。溝の断面形は北と中央ではゆるやかな台形、南方では横に広いUの字形を呈する。溝の覆土下部はロームブロックを含

Figure 1 is a geological cross-section diagram. It shows a horizontal line at the top labeled 'C' with a value of 91.70. Below this line, the cross-section is divided into five numbered regions: 1 (top center), 2 (top left), 3 (bottom center), 4 (top right), and 5 (bottom right). The regions are separated by wavy lines representing geological boundaries. The entire cross-section is filled with a stippled pattern.

D. — $L=91.70$ — D.



$F \bullet l = 91.70 \quad \bullet F$



图42 3区北沟遺構図

む灰褐色土で、かなり速く堆積した土であると考えられる。なお、地層観察では水が流れた痕跡は見られない。

溝からは多数の土器と10cm～20cm大の転石が出土しているが、大部分は上層からの出土で洪水層下である。

出土した土器片は可能なかぎり復元をし図化した。図以外にも多数の土器片が出土している。なお、破片の接合関係からみると、土器が土圧で破碎した様子は見られない。また、土器は殆ど破片の状態である。石製模造品の出土はない。

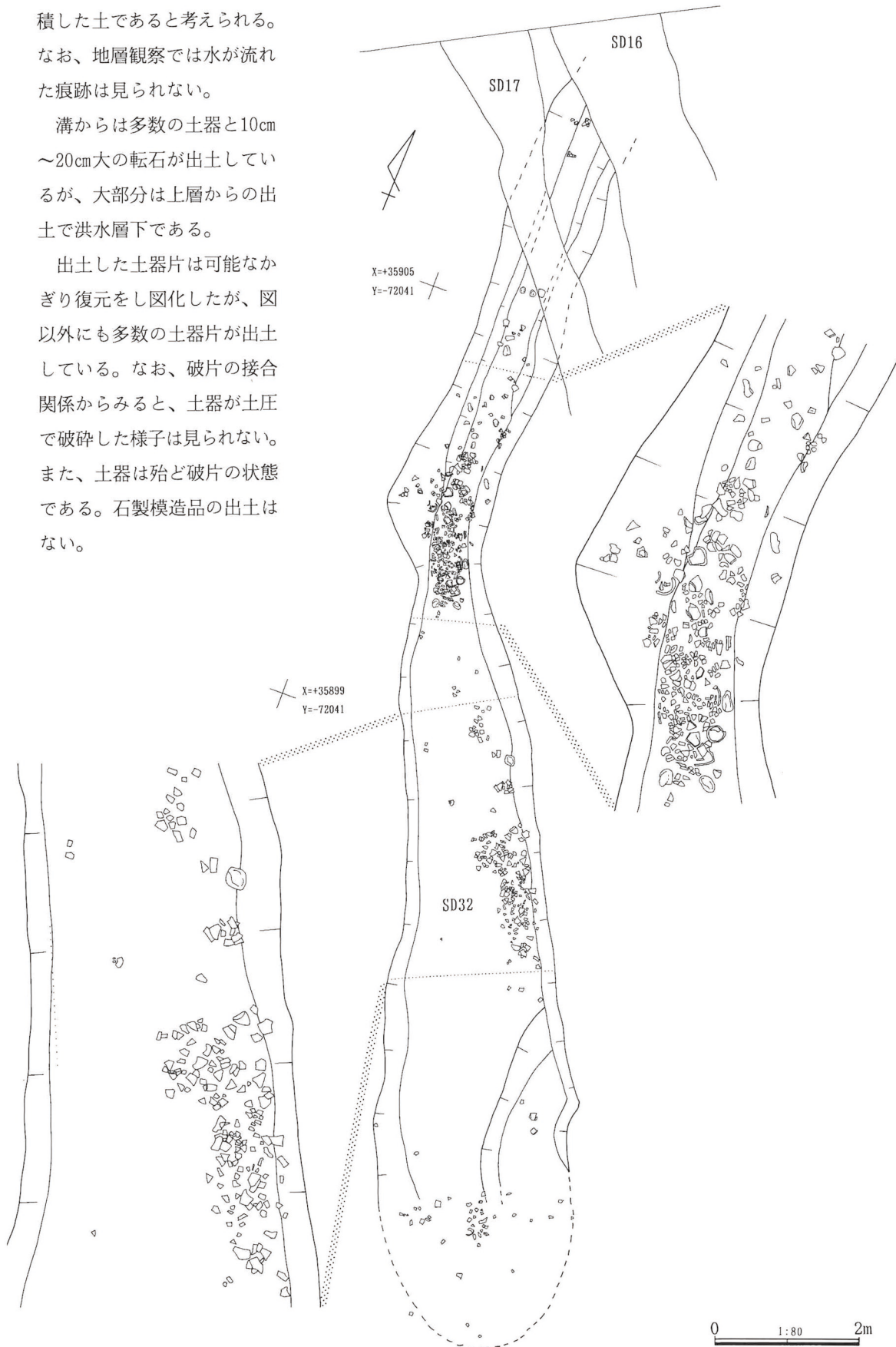


図43 32号溝遺構図

土器片は細片でも、人為的に砕いたと思われるものはない。出土の位置を図化したものをみると溝の上部に破片がまとまってあるものと、1つの土器の破片が離れた位置にあるものとがある。また土器は溝全体ではなく溝の中央と、やや南に下った溝の東寄りに集中する傾向にある。また土器の集中する部分では破片が重なって出土している。32号溝が短期間に埋没した後に、大量の土器が廃棄されたものと考えられる。

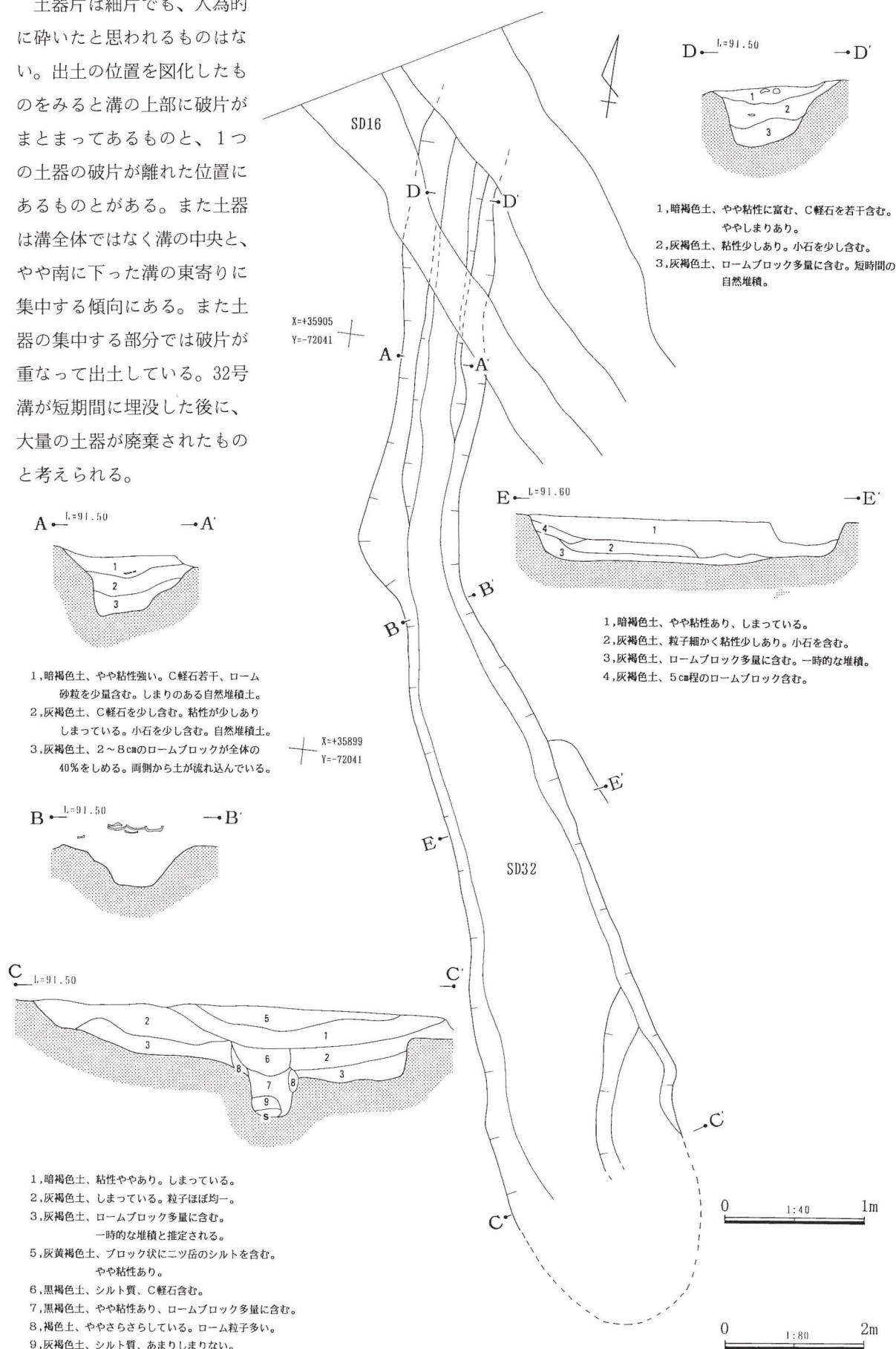


図44 32号溝遺構及び地層図

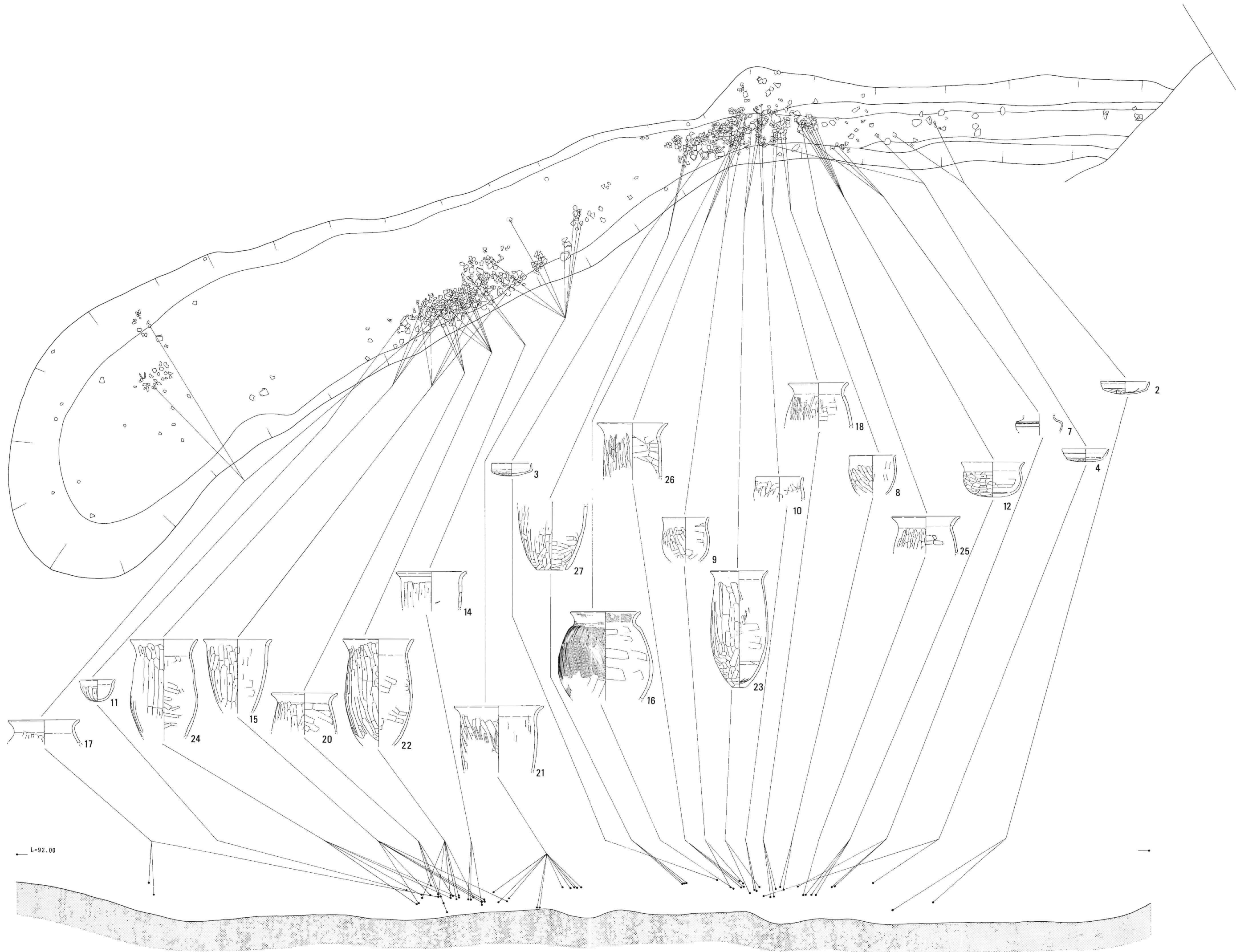


图45 32号沟遺物出土状态图

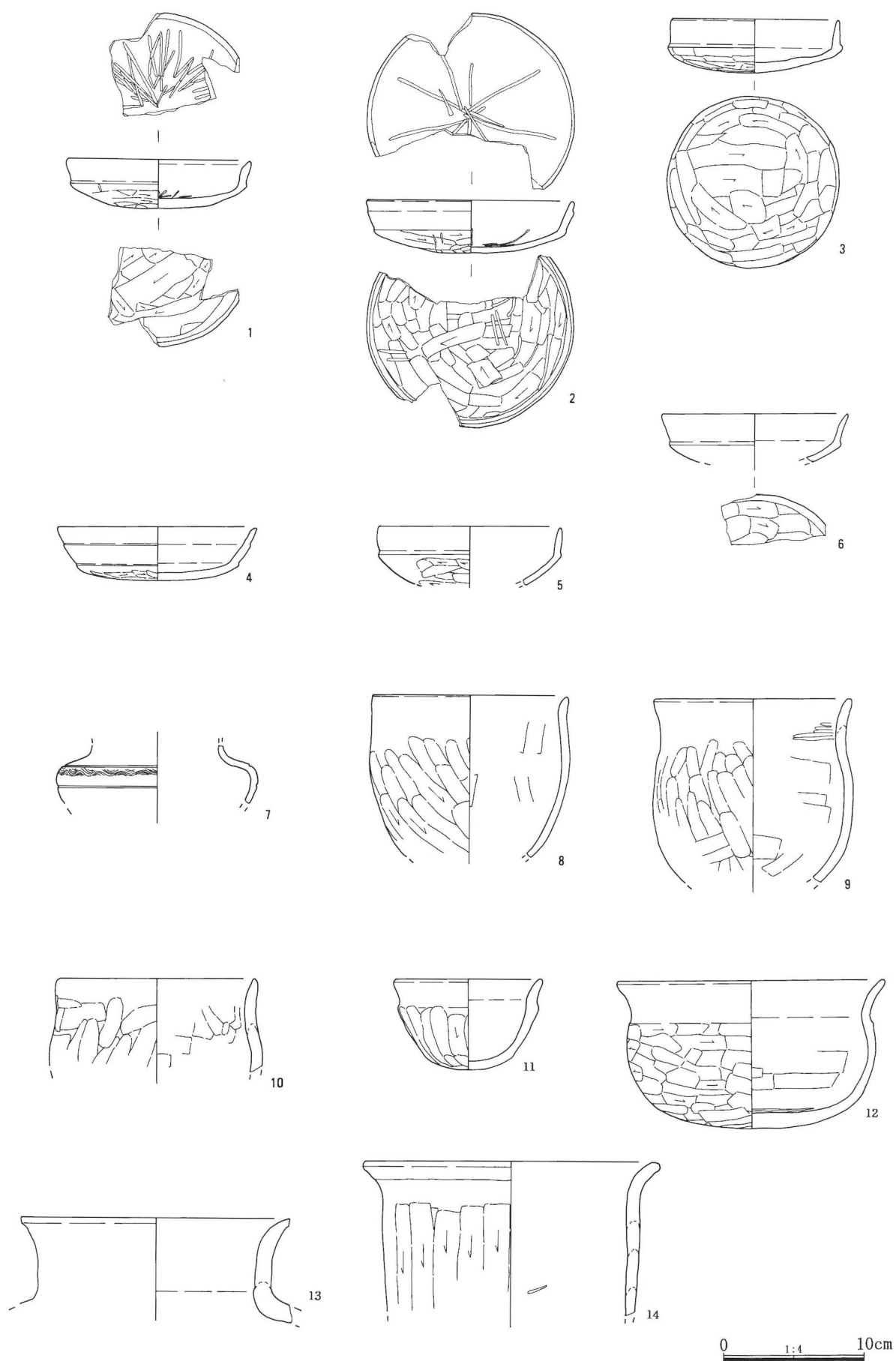


図46 32号溝遺物図

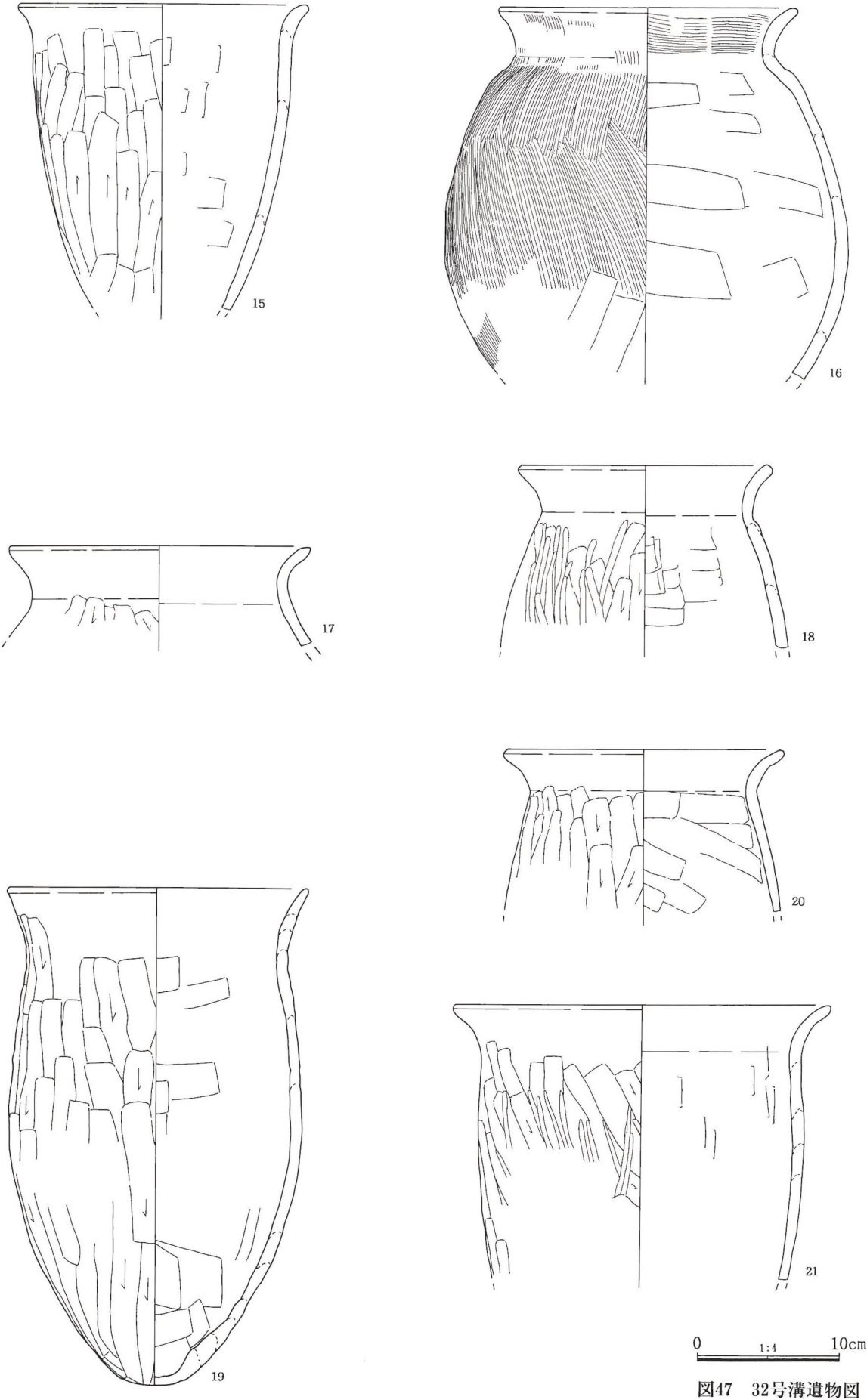


図47 32号溝遺物図

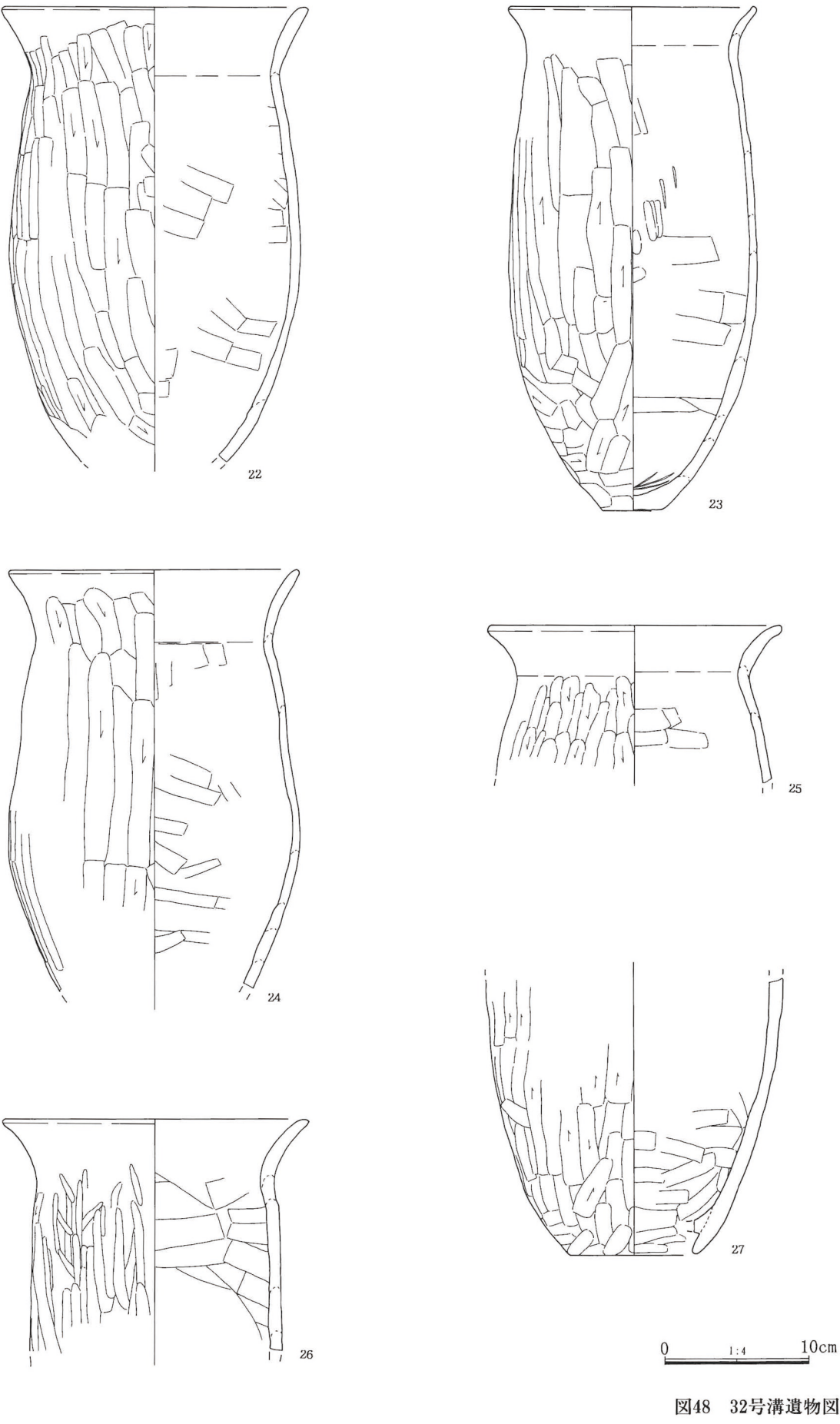


図48 32号溝遺物図

50号溝(SD50)

5区北で検出した。西から東へ向かう全体の幅が3.4m～4.8m、深さ55cm～80cmの断面がU字形の溝である。東端では8世紀の29号住居を切り、これより新しい。溝の土層AからDまでの最下部は風成堆積物であり、水路とは考えられない。溝がかなり埋もれてから、南側を掘り直し水路にしている。この時、二ツ岳の土砂を主体とする洪水に襲われた様子が土層に見られる。その後、水路の使用を一時放棄したのか、溝は自然埋没している。しかし、しばらくして北側を再度掘り直している。掘削面の底には川原砂が確認でき、再度水路としたと考えられる。溝の側面にはピットがあり、特に北側に多い傾向にある。直径15cm～40cm、深さ15cmから60cmの大きさで、30cmから80cm程の間隔である。溝は何回か掘り直されており、ピットがどの時点でのものかは不明である。溝からの出土遺物には土器と石製模造品があるが、遺物を個体ごとに3度の溝の掘削、埋没と結びつけて捉えることは出来なかった。土器は古墳時代のものが多いが、溝が29号住居を切っていることから、1～6の土器が溝の時期を推定する参考になろう。坏の体部は比較的浅いものが多く偏平であり、2や6は口縁と体部が直角に近い角度である。これらの土器は8世紀後半に位置づけられ、溝も8世紀頃と考えられる。

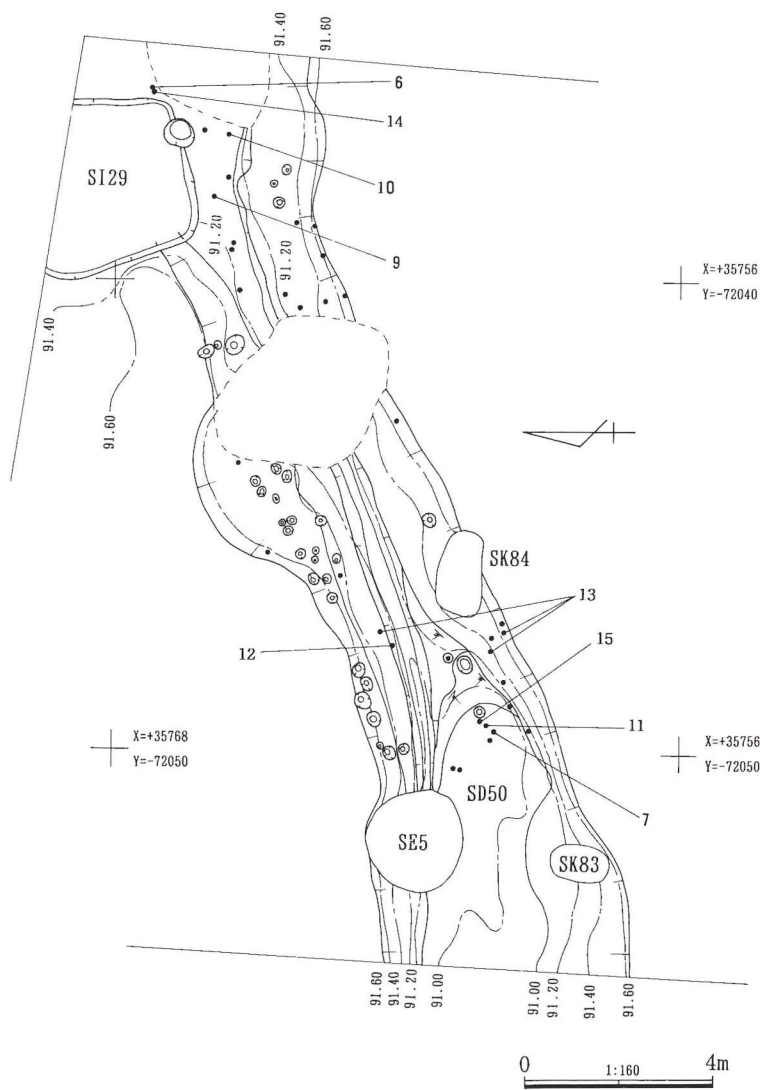


図49 50号溝遺構図

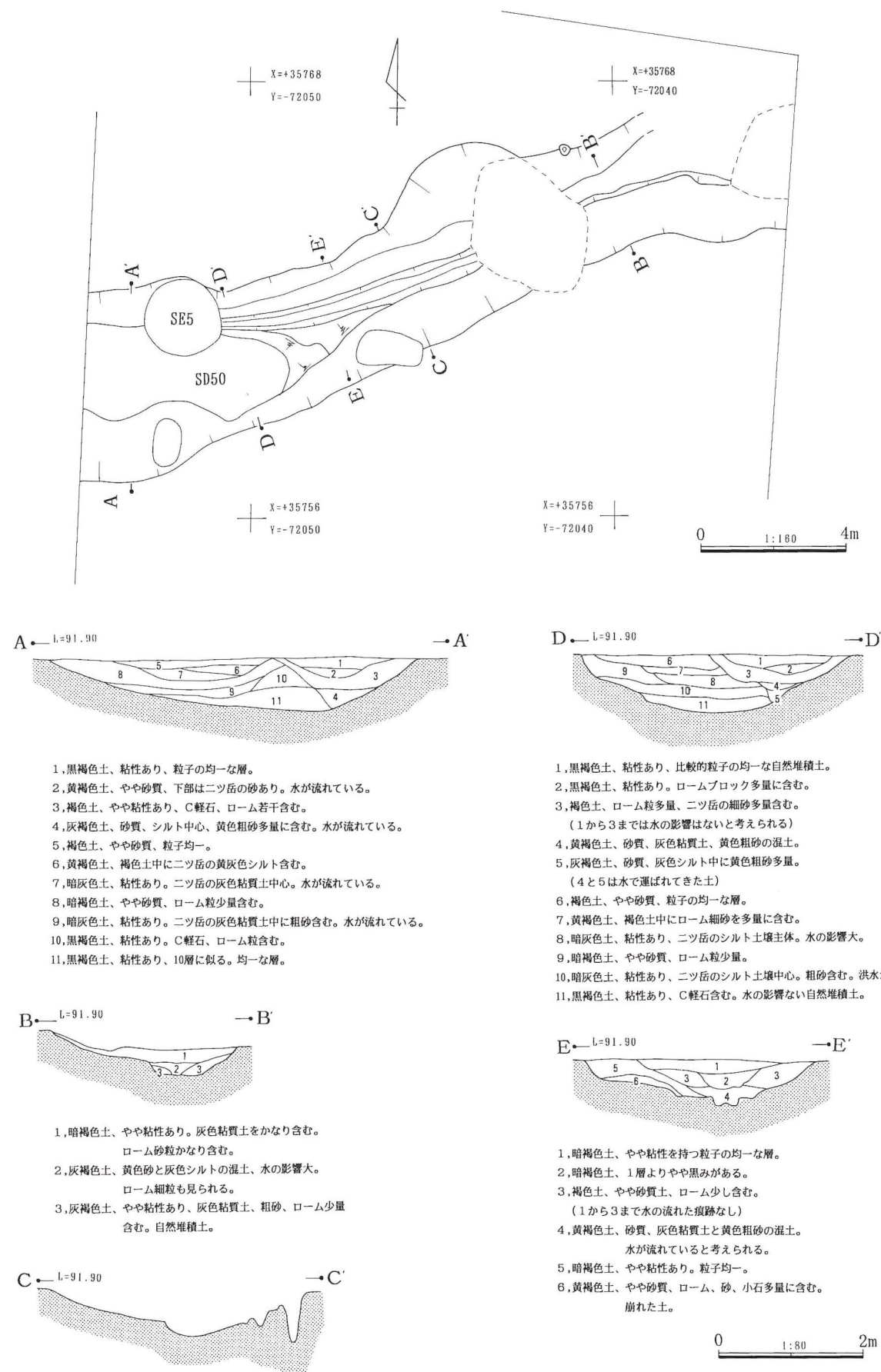


図50 50号溝遺構及び土層図

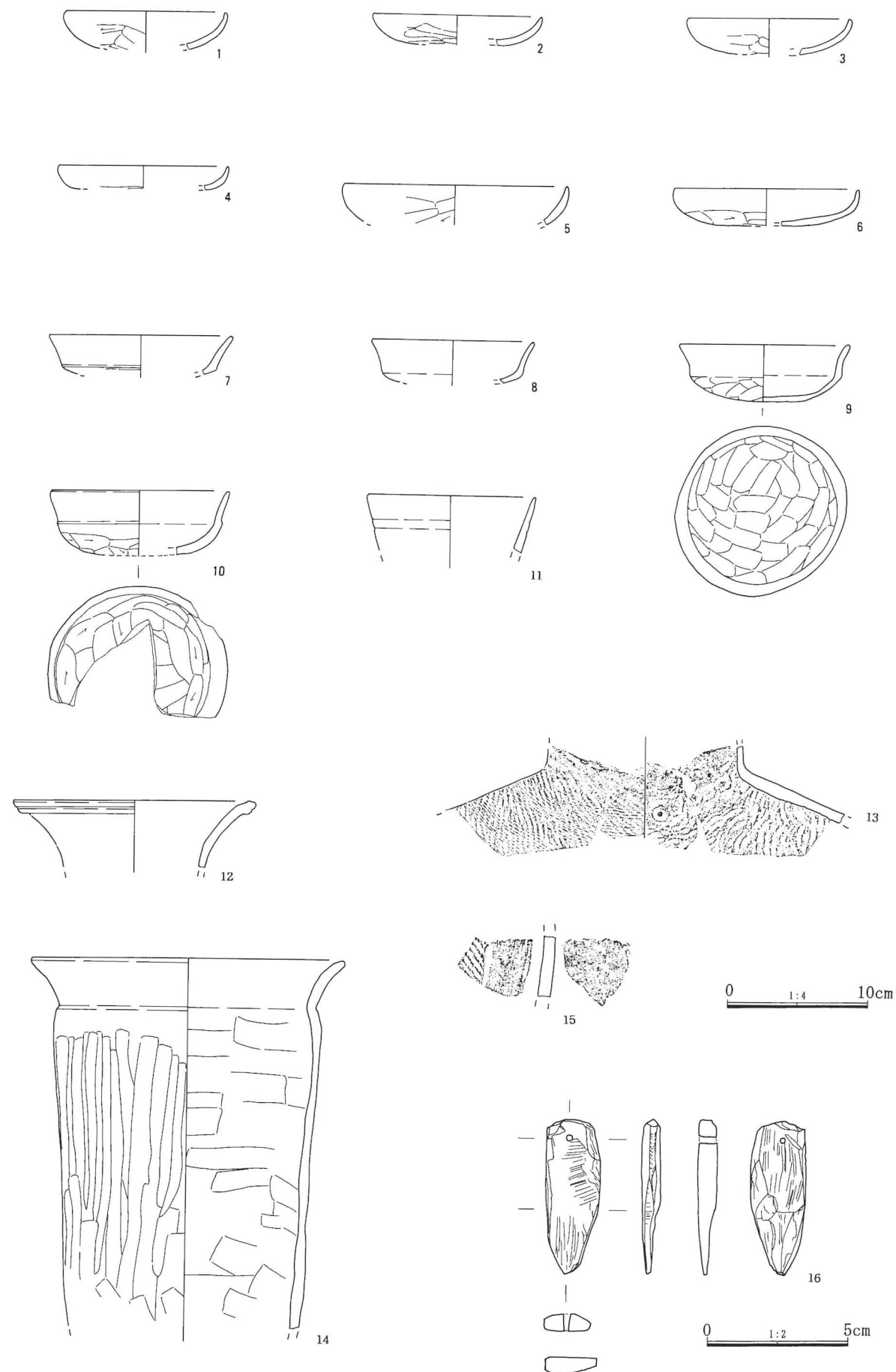


図51 50号溝遺物図

5, 土坑

76号土坑

76号土坑は5区の東部に位置する。規模は4.7m×3.7m、深さ15cmの土坑である。下層には洪水起源のシルト質の層、上層は褐色土とローム粒の混土である。両層とも、浅間B軽石が多量に混入する。この土坑からは剣形の石製模造品が8点出土している。5区全般で見ると、77号土坑から1点、50溝から1点出土している。また、遺構外からも1点石製模造品が出土している。この76号土坑は、覆土中に1108年噴火とされる浅間B軽石を含み、古墳時代の遺構とは考えられない。石製模造品は古代の遺構中にあったものが、二次的に76号土坑に入ったと考えられる。

77号土坑

77号土坑は覆土に浅間山A軽石が混入する近世の土坑である。石製模造品の有孔円板が出土しているが、76号土坑と同じく他の土坑からの二次的混入物であろう。土坑の規模は2.8m×1.6m深さ40cmであり、土層の状況から一時期に埋め戻された遺構と考えられる。

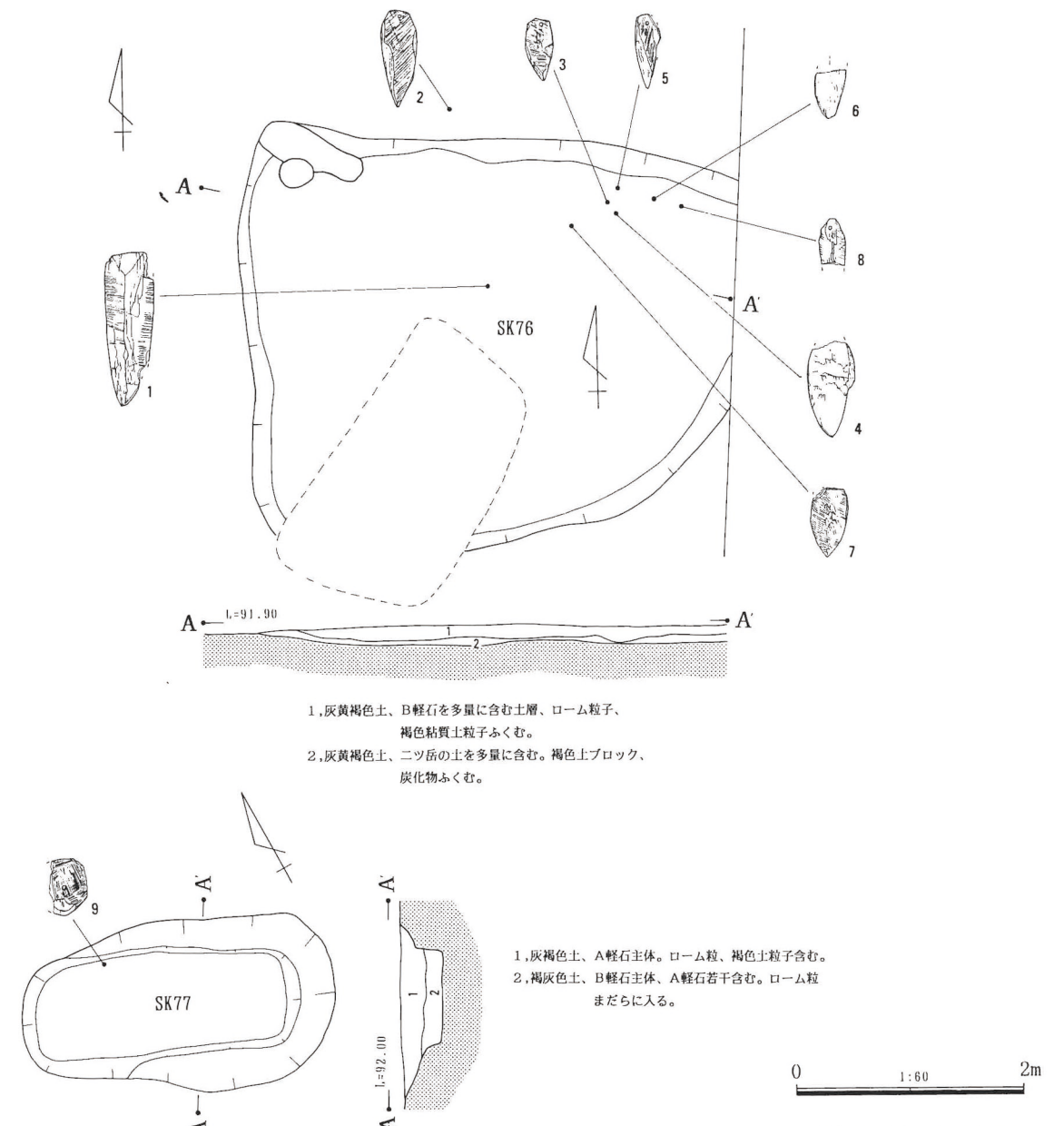


図52 76、77土坑図

SD50、SK76、SK77出土の石製模造品について

50号溝(図51-16)の剣形は滑石製の完形品である。下図の1～8はSK76出土、9はSK77出土である。1は長さ8.9cmの大型品で片面に鎬表現が見られる。緑色片岩製。2は丁寧にミガキ成形されている。滑石質岩製。3は完形品でつくりは丁寧。蛇文岩製。4は打ち欠き後に一部だけミガキ成形、上部は欠損。滑石質岩製。5は側面部の一部を欠損。滑石質蛇文岩製。6は上部欠損、片面に鎬表現。雲母石英片岩製。7は穿孔がなく側面上部を欠損している。滑石質蛇文岩製。8は下部欠損、全体をミガキ成形。片面に鎬表現がある。滑石質岩製。10は5区覆土出土、上部は欠損し表裏ともミガキ成形。側面は打ち欠きのままである。滑石質岩製である。



図53 5区出土石製模造品図

6, 水田跡

4区でB軽石層の下部から水田跡を検出した。高関村前、高関村前Ⅱ、高関堰村、高関東沖地区は微高地であるが、ここはその微高地の一番高い所からやや北に向かって低くなり始める地点である。

水田跡はB軽石の残りが非常に悪く、所によっては畦は検出できなかったため、水田跡を調査区全面では確認できていない。水田は長方形を基本とする。畦は下幅50cmから70cm、高さは上部が削られている所が多いが、5cm程度残っている。西隅の南北方向の畦は北－9度－東と一直線に伸びる。それ以外は、北を基本とはするがやや蛇行する部分が多い。また、東西方向の畦はゆるやかな弧を描くような形状である。水田跡の南の部分には2本の畦が平行し、その中央が水路となった全体幅1.1m～1.5mの畦があるが、これもやや弧を描く。なお、調査範囲内では水口は検出できなかった。水田の傾斜は、等高線でみると南西が一番高く、北東に向かってゆるやかに低くなっていく。水路も西の底面の方が東側に比べて高く、水は東に向かって流れたと推定される。水田土壌は暗褐色でやや粘性に富んでいる。耕作土の深さは土層観察では確認できなかった。

4区以南の調査区ではB軽石の残存状態が悪く、水田遺構が在ったかどうかは判明しがたい。また、この4区の北側は高関堰村、高関東沖遺跡であるが、前者は中近世の屋敷跡と弥生中期の環濠、後者は弥生中期、古墳時代の住居は確認されているものの、B軽石下水田跡は検出されていない。

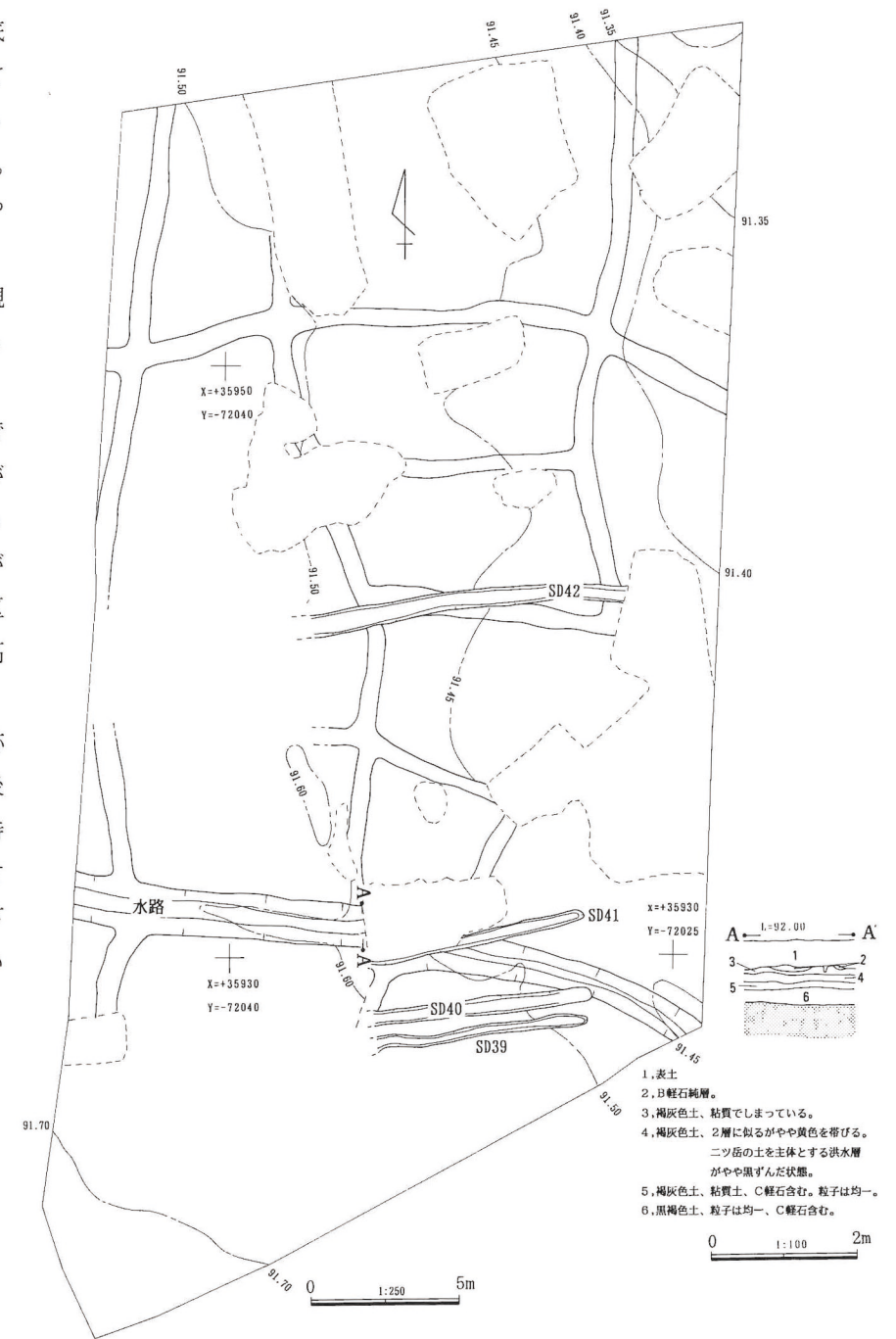


図54 4区B軽石下水田跡図

第4節 中近世

1, 遺跡の概要と溝跡

1、2区上層は前回「高関村前遺跡」で中世ないし近世の掘立柱建物跡が集中する地区として報告した。しかし、出土遺物が遺構に確実に伴わないため、掘立柱建物跡群の時期限定までは至らなかった。まお、北側の5、6、7、8区も、中近世とみられる遺構と遺物が集中する。

下図は6区から8区中央を西から東へ向かう54号溝である。南側が調査区外のため正確な幅は不明だが、少なくとも幅3m以上、深さは70cm程度である。43号掘立柱建物跡は、溝底の精査時に柱穴を確認したものであり、54号溝のほうが43号掘立柱建物跡よりは新しいと考えられる。8区中央には0.4m×1.8m、深さ35cmの楕円形の窪みがあり、その中はヘドロ状の土が堆積していた。窪みからは中世後半の埴や鉢などの軟質陶器や元豊通寶が出土している。8区東の54号溝の地層断面をみると、溝の掘削時に近い付近の堆積土はB軽石を多量に含む水性堆積土である。また、この水成堆積土は均一なシルト質なことから洪水とみられる。

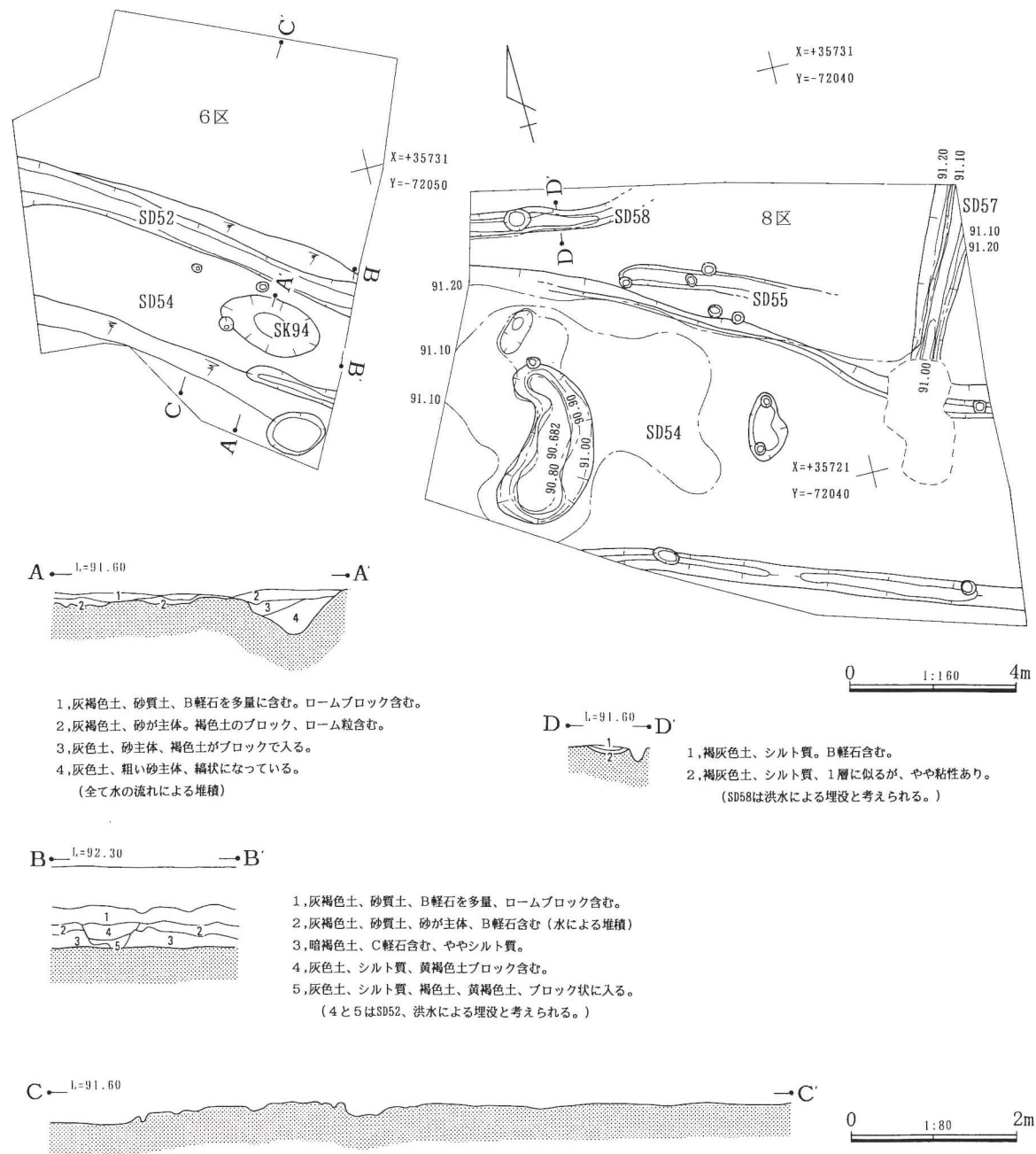


図55 54溝全体図

54号溝のやや南寄りの部分では、地層をカットした部分が観察でき、溝の掘りざらいをして継続して使用されたことが推定される。8区の南寄りの部分では近世陶磁器も出土している。またA軽石を含む堆積層も見られる。南すみには水路の石積みがある。内部はノロが水平に堆積し、その層から現代とみられる遺物も出土している。なお、8区のすぐ南は現在使われているコンクリート製の水路がある。8区南端の石積みは、コンクリート製の水路が出来る前の水路とみられる。このように、54号溝は中世に掘削された後、しだいに南寄りにずれてはいくが、継続して使われてきた水路と考えられる。

溝の南寄り部分の底面には、直径10cm深さ5cmから20cm、深いもので50cm程度のピットが無数に検出される。深さ50cmもある深いピットは堰跡の可能性が高い。しかし、それ以外の多数のピットは杭の跡ではあろうが、詳しい性格は不明である。

54号溝は中世に掘削された水路であり、この水路に先行する43号掘立柱建物跡も中世の遺構と考えられる。なお掘立柱建物群は、前回報告した1、2区や北側の5区まで広がる位置関係にあり、これらの建物跡は中世に始まる集落と推定できる。こうした中世集落が営まれていた場所は微高地が南に向かってやや低くなっていく位置である。水路をつくるのには適していたと考えられる。

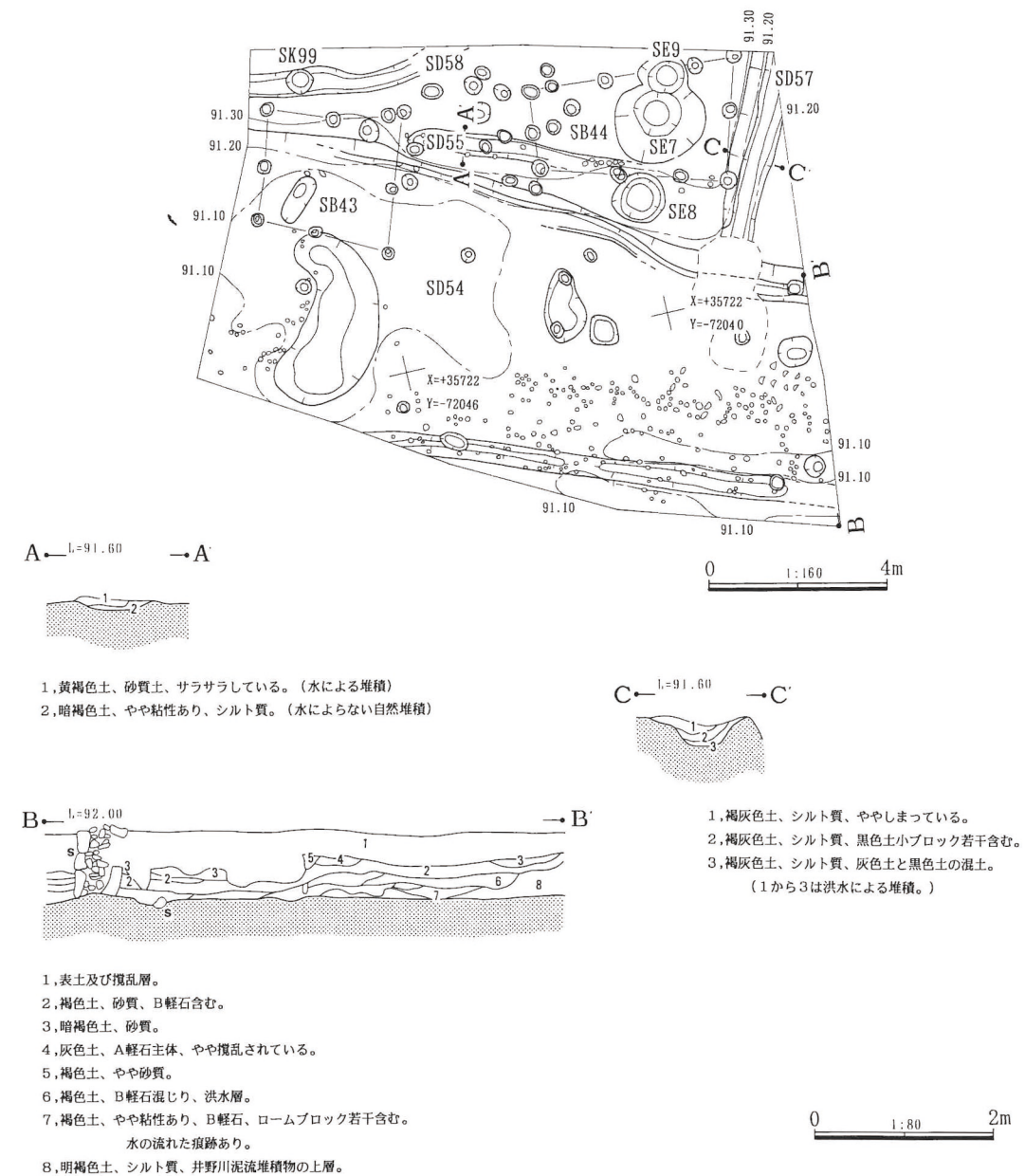


図56 8区遺構図

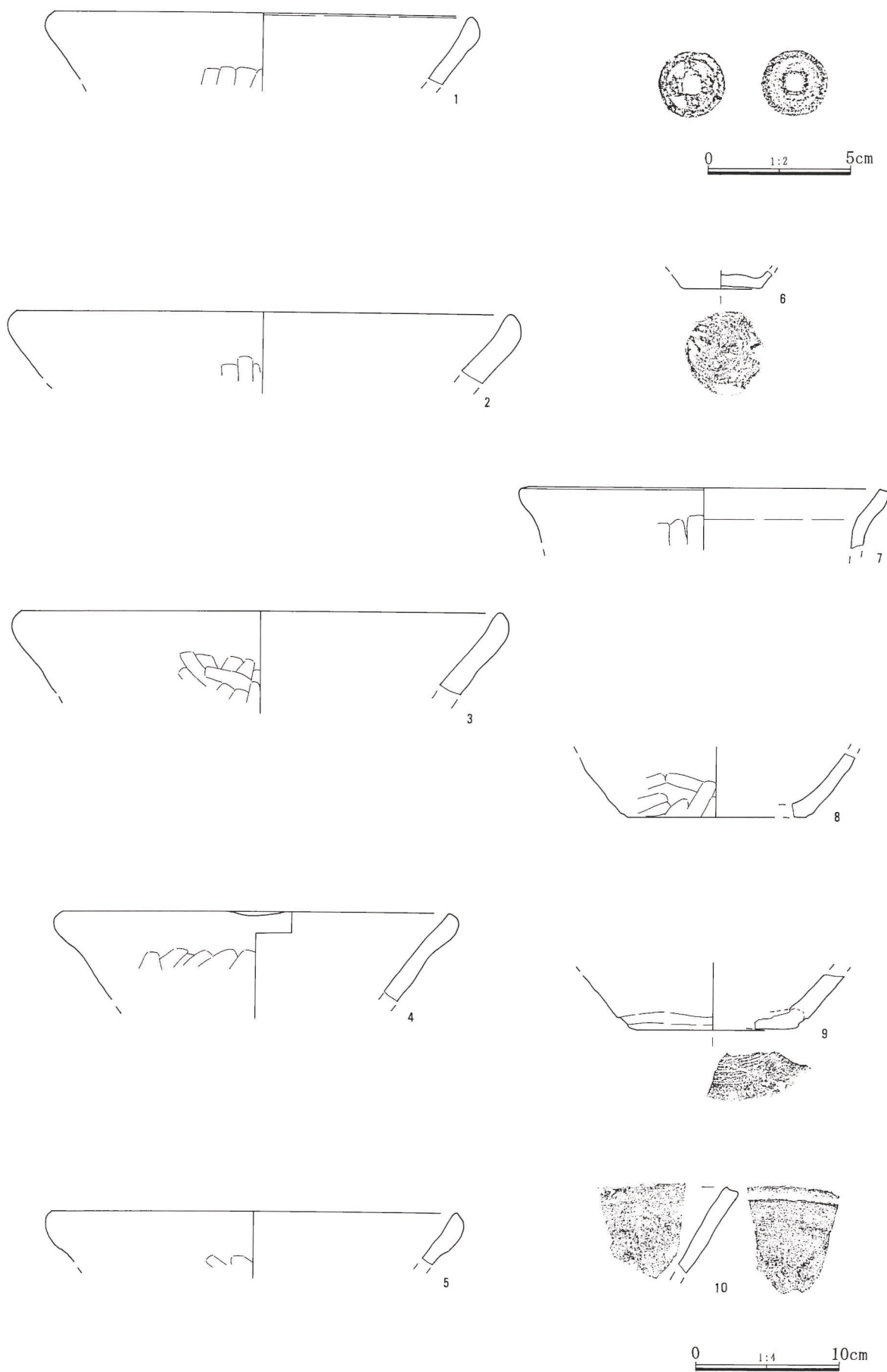


図57 54溝出土遺物図

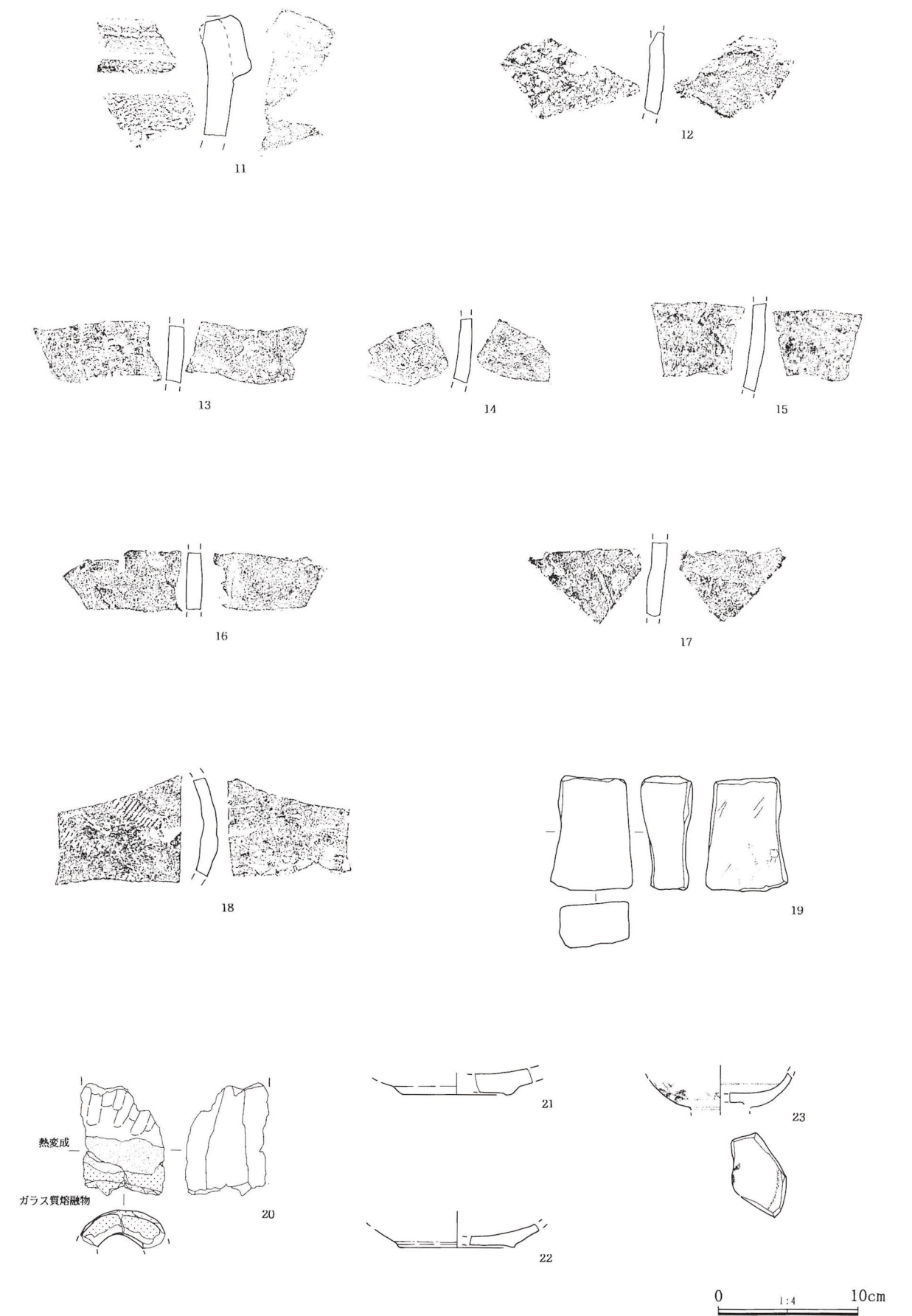
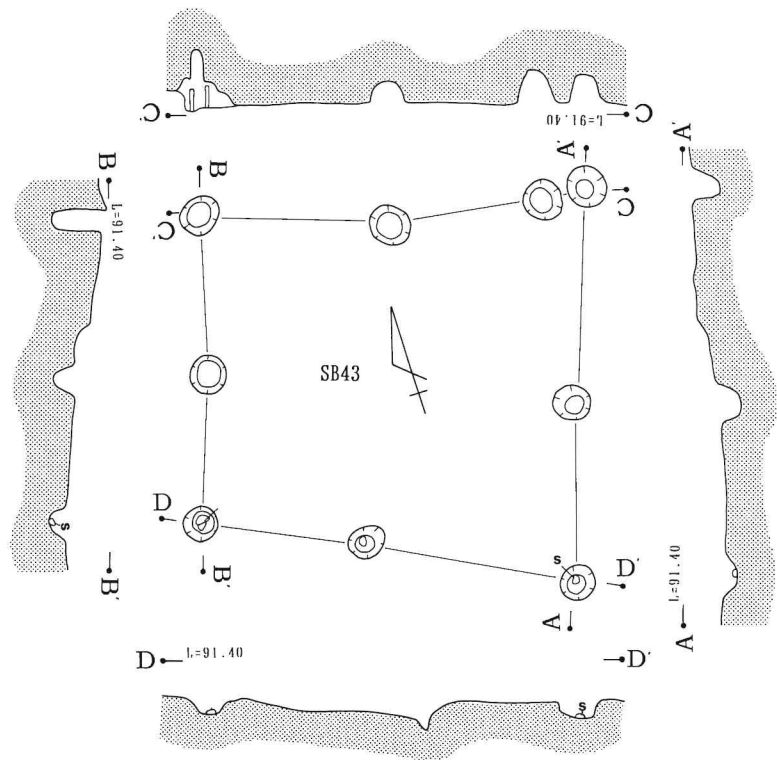


図58 54溝出土遺物図

2. 掘立柱建物跡と井戸遺構

43号掘立柱建物跡(SB43)

8区北西に位置する。北-22度-東を棟方向とする2間×2間の掘立柱建物跡である。東西は北で3.1m、南で3.0m、南北は西で2.45m、東で3.1mである。平面はやや台形に近い。北側中央の柱穴はやや内側へ入り込んでおり、また北東部では隅を追加して2本としている。南西隅の中穴には柱痕が残っていた。中央北の柱位置がやや建物内部に入る形状から、棟方向は南北と見られる。柱穴埋土にはB軽石を含む。南の54号溝よりは古い遺構であり、溝中から中世後半の遺物が出土することから建物跡も中世と考えられる。



44号掘立柱建物跡(SB44)

8区の北東に位置する。西側にはSB43が、またこの掘立柱建物跡の内部の位置には7、9号井戸が、また南には8号井戸がある。東西に長い2間×3間の建物跡で、北側は4.6m、南側は4.2m、西は1.75m、東は2.7mである。また西に庇の柱穴が3本並ぶ。棟方向は東西で北80度西、北西隅は柱穴が1本追加されている。建物跡内部にあるP1も棟の直下に位置することから、棟受けの可能性はある。P2には柱と柱穴の間を固定するための河原石が2個入っていた。柱穴の埋土はB軽石を多量に含む暗褐色土であり、中世以降の建物跡と考えられるが、それ以上時期を限定する材料はない。

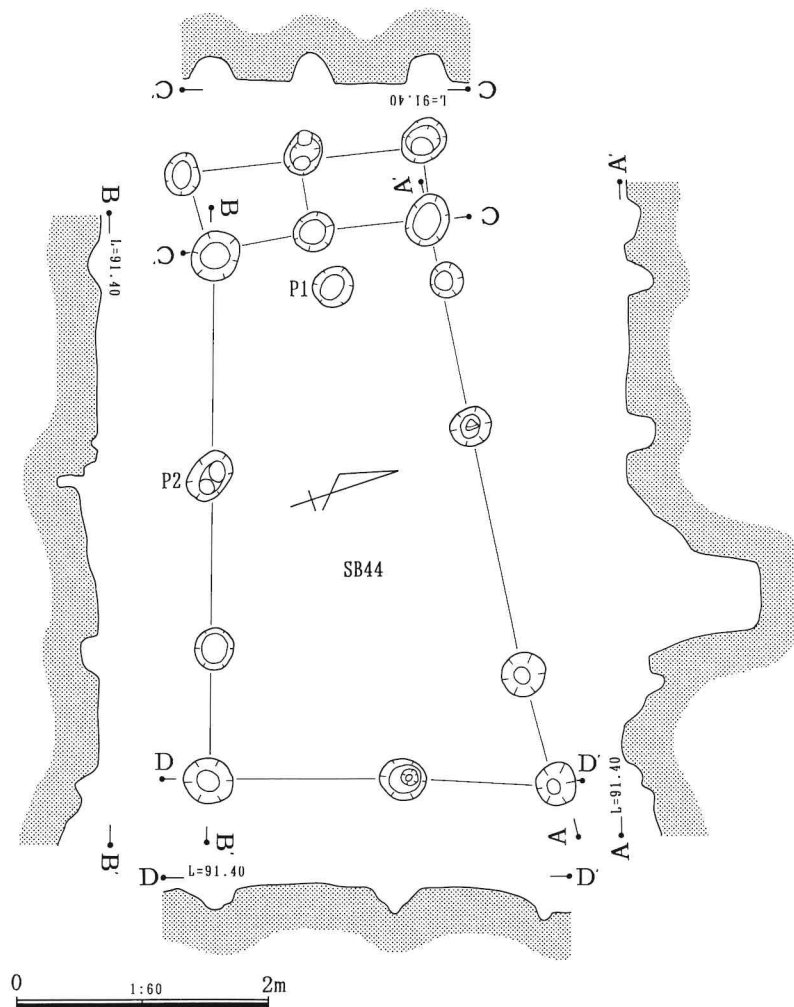


図59 43、44号掘立柱建物跡図

8区の井戸遺構

8区では3基の井戸遺構が検出された。南から8号井戸、7号井戸、9号井戸である。

8号井戸は確認面で長径1.2m、短径1.1m、深さ95cmである。やや壁が崩れているが断面はゆるやかな台形である。下層は二次堆積のB軽石を含む褐色土、上層は灰褐色土で、やはり二次堆積のB軽石を含む。覆土全体にロームブロックがかなり含まれており、意識的に埋填したと推定される。ただし、土はあまりしまっておらず、充分な埋填ではない。3基の井戸とも最上面は南の54溝の洪水起源の土が覆っており、ともに54溝と同時期ないし古い段階のものである。

7号井戸は2.0m×1.8m、深さ1.35mで、断面形はゆるやかなロート状を呈する。下層の3分の2程は褐色土とロームブロックの混土であり、埋め戻したと推定される。上部はシルト質の二次堆積のB軽石を含む、洪水起源とみられる堆積の速い土によって埋没している。この洪水層は54号溝の覆土と同じであり、井戸が54号溝より古いと考えられる。1と2はこね鉢で、2の内面には使用痕がある。3は東海系焼締陶器である。

9号井戸は7号井戸の北で、7号井戸と切り合う位置にある。平面1.2m×0.9m深さ1.1mで、断面形は西側には段がつくが東側は直線的である。覆土は二次堆積のB軽石を含むシルト質の洪水起源の土で、自然埋没の状況である。残念ながら7号井戸との新旧関係は確認出来なかった。ただし、7号と9号井戸の覆土の洪水層は54号溝の覆土と同じもので、同一時期と考えられるので、洪水の起きた時に機能していたと見られる9号井戸が新しいと推定される。

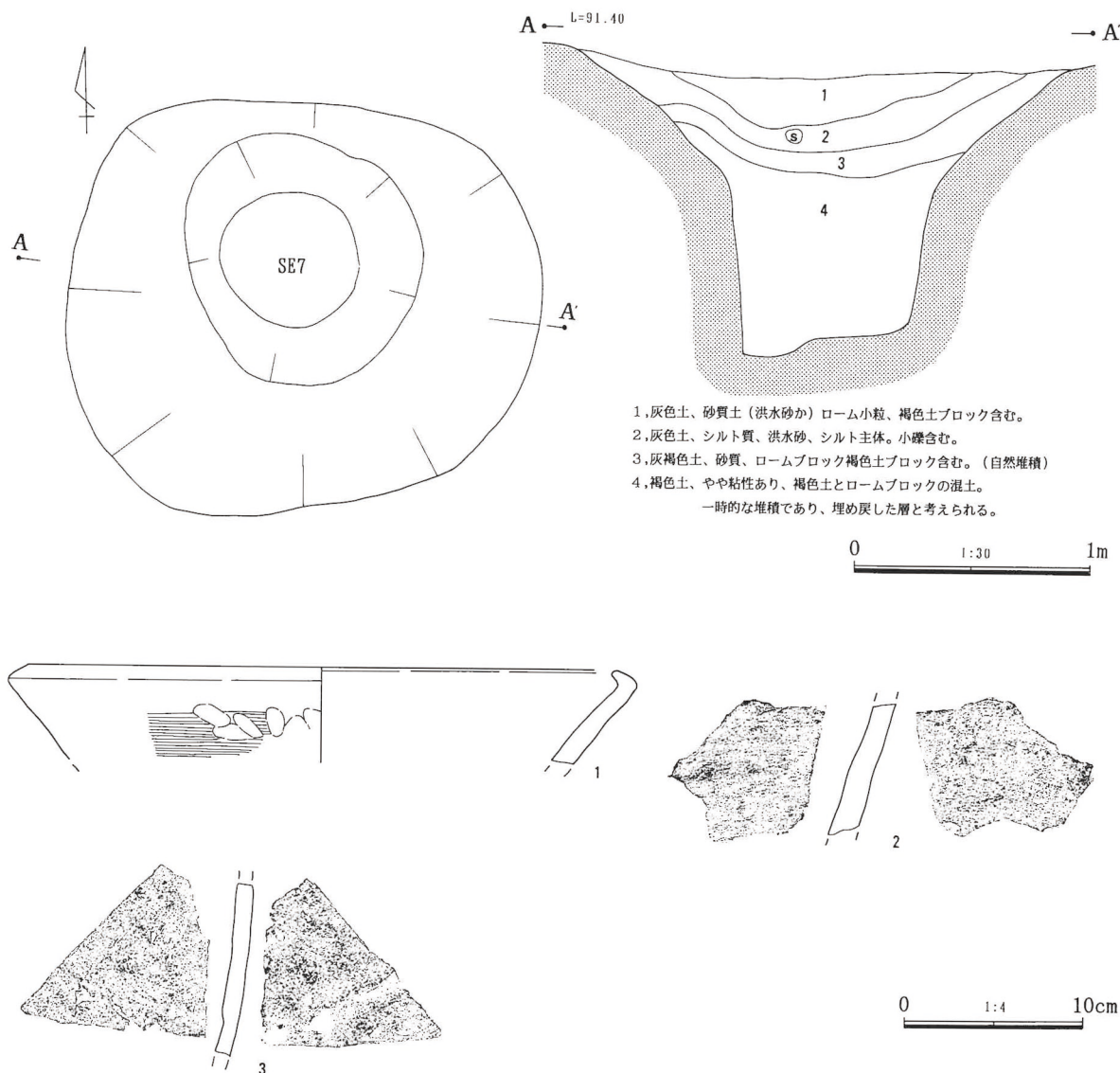


図61 7号井戸及び出土遺物図

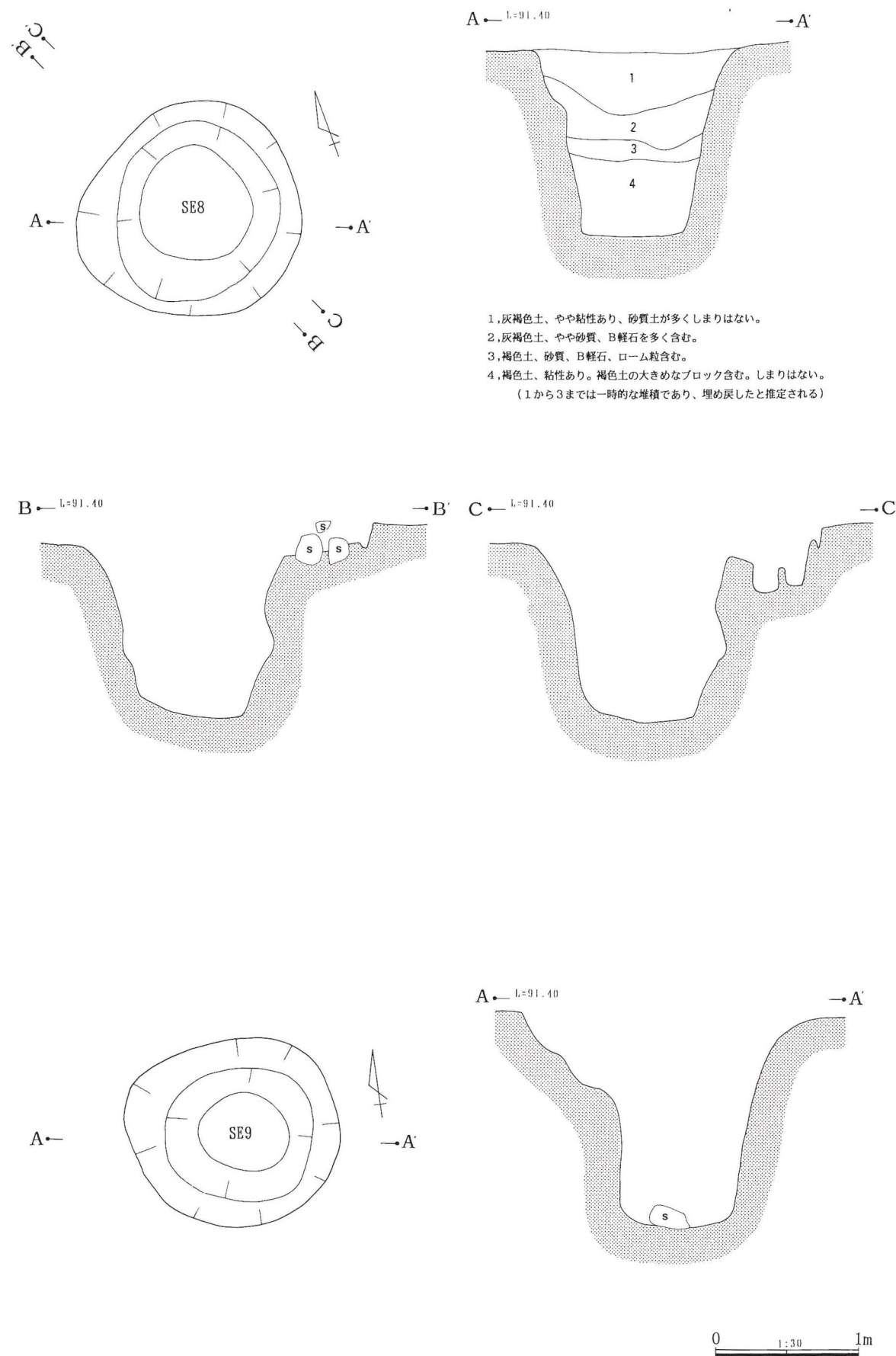


図62 8、9号井戸図

5区の中近世の遺構と遺物

5区は大規模な水路であるSD54の検出された6区、8区の北側になる。図63は、褐色土層面での遺構全体図である。掘立柱建物跡を調査区南東に1棟、西隅に2棟、中央に1棟検出した。なお、建物跡の柱穴と見られるピットが他にもかなり多いので、建物跡はもっと多いと考えられる。井戸は3基検出した。5区の南東、及び北西の位置である。北西の5号井戸は転石による石組み井戸である。墓址とみられる土坑は、SK83とSK92と2基検出した。SK83は土坑中から転石が多数出土している。なお、SK84も墓址の可能性もある。その他の



図63 5区中近世全体図

土坑は数が多いが性格は不明である。溝はSD48が規模が大きい。以上の遺構は、浅間B軽石の二次堆積物を埋土及び覆土にかなり含む遺構である。出土遺物は、5号井戸から軟質陶器鉢が出土しただけである。この5号井戸は、5区で検出された建物群の北西すみにあたる位置である。なお、5区で検出された掘立柱建物跡は、8区や1、2区の建物跡と有機的関連が推定される配置であり、建物跡も中世の範疇におさまるものが多いと考えられる。

こうした中近世の遺構に対して、溝SD46、47は北が高く南に向けて勾配をもち水路と考えられる。二ツ岳の土を主体とする洪水砂で埋没しており、古代の遺構と考えられる。50号溝は前述したように8世紀頃の溝で、水路跡と考えられる。29号住居も8世紀の竪穴住居である。

溝SD48の覆土はB軽石を含む褐色土である。両側から自然に堆積しており、水の流れた痕跡はない。溝の幅は2.2mから3.5m、深さ20cm程度である。溝の側面はゆるやかで、また底も凹凸が多い。出土遺物には大きな片岩の破片があるが、板碑かどうかは不明である。5区の北にあたる3区では中近世の遺構は殆ど検出されていない。こうした点から考えると、SD48は中近世の遺構と他の地区とを区切る性格を有すると考えられる。39号掘立柱建物跡(SB39)

5区の南東に位置する2間×3間の建物跡である。棟方向は北-26度-東、規模は西で5.2m、東で5.4m、北で2.4m、南で2.6mである。柱穴の規模は直径25cm～35cm、深さ25cm～40cm程度で、柱穴埋土には二次堆積のB軽石を含む。北東の77土坑と切り合うが、77土坑よりも古い。

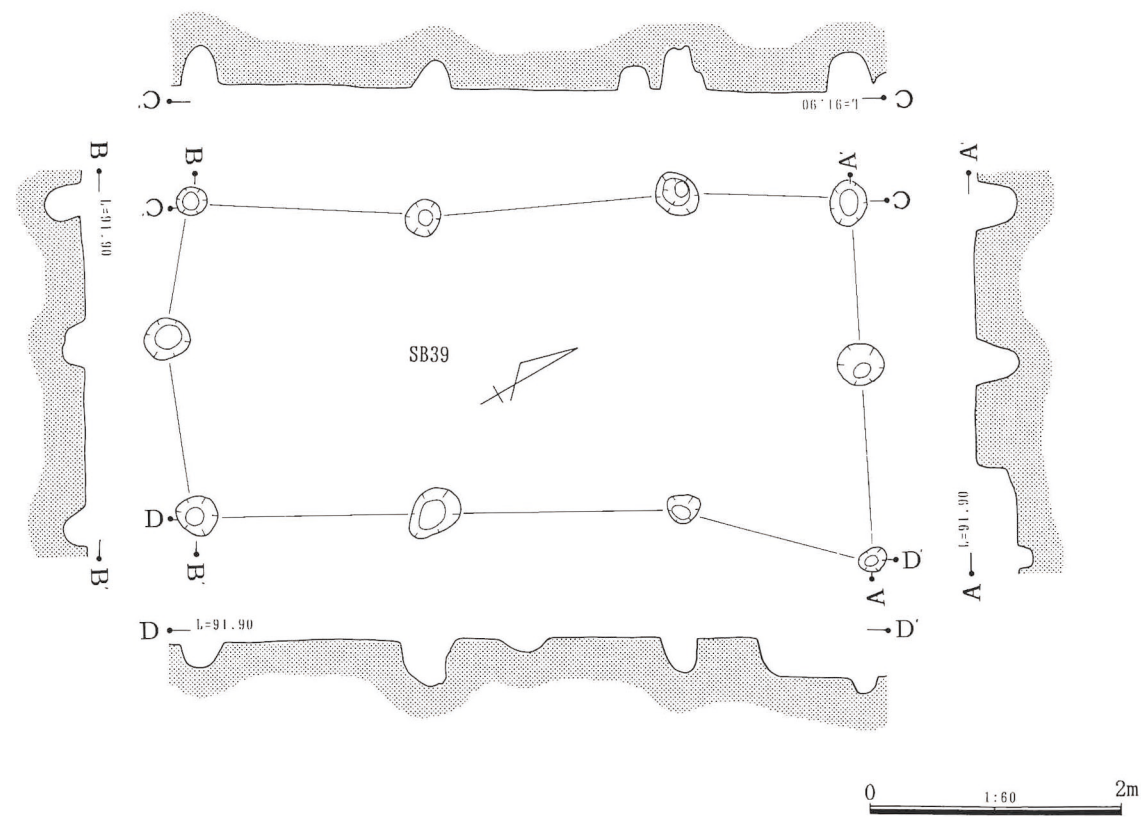


図64 39号掘立柱建物跡図

40号掘立柱建物跡(SB40)

5区の南西に位置する。南側の41号建物跡と重なり合う位置であるが、柱穴の切り合いがないため新旧関係は不明である。2間×2間の建物跡で北は2.95m、東は3.25m、西と東は隅の柱穴が調査区外のため測れない。西側は現状で4本の柱穴が並ぶ。調査区外にも1本柱穴があるとすれば、西側は5本で構成されることになる。棟方向は南北で北-35度-東で、柱穴埋土には二次堆積の浅間B軽石を含む。

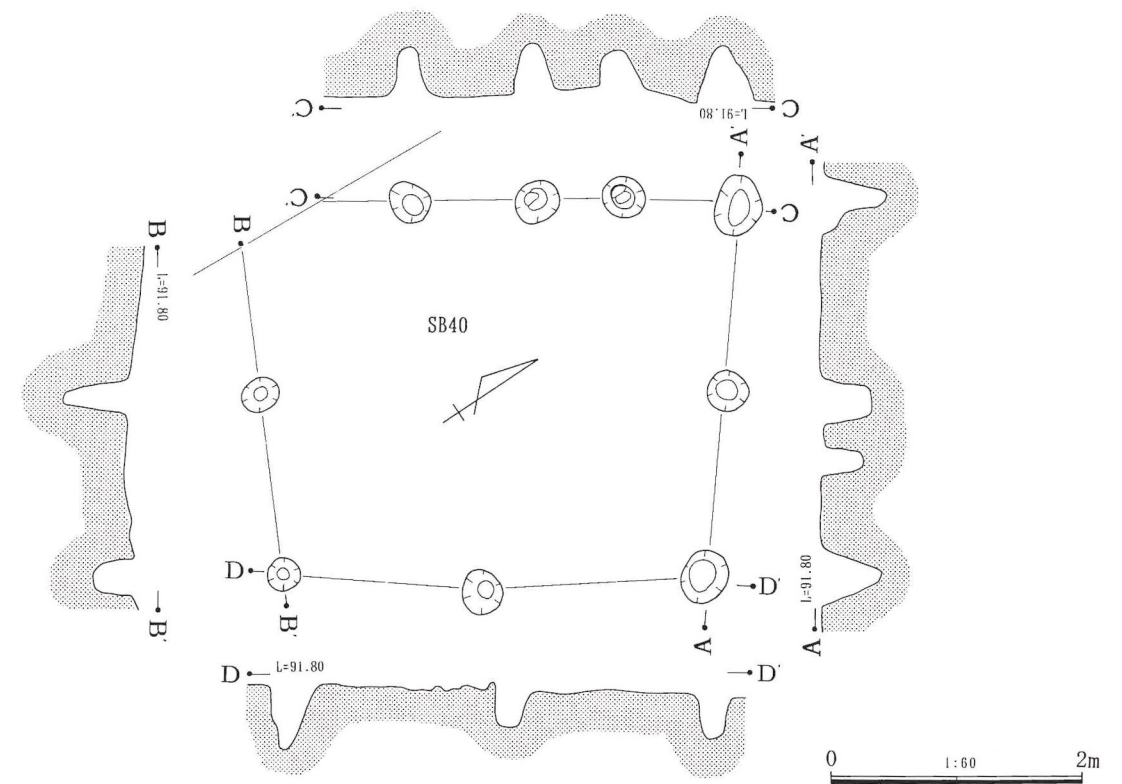


図65 40号掘立柱建物跡図

41号掘立柱建物跡(SB41)

5区、SB40の南側の2間×2間の建物跡である。北2.4m、東2.6m、南2.4m、西2.5mとほぼ方形である。南側の中央部は2本の柱で構成される。やや南北に長い建物であり、棟位置は南北とも見られるが、南の柱が2本であるのは梁より上の構造の違いであろう。棟を南北とするなら、向きは北-13度-東である。他の建物同様に柱穴埋土は二次堆積の浅間B軽石を含む。

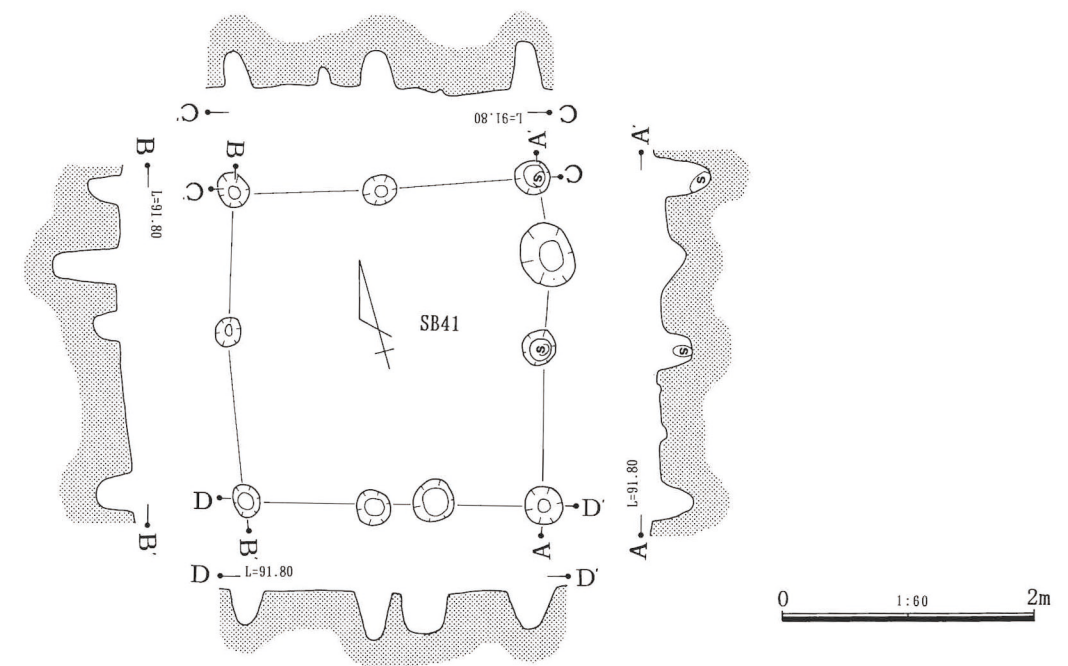


図66 41号掘立柱建物跡図

42号掘立柱建物跡(SB42)

5区の中央部に位置する。南北に長い2間×2間の建物跡で、棟方向は北-1度-東となる。規模は北側3.9m、西側4.9m、建物中央で5.0mである。桁行き方向の柱間は、2.4m～2.5mとやや距離がある。2間×2間と小さい建物でありながら、柱間の長いのは他の建物と比べて例外的である。倉賀野万福寺Ⅱ遺跡の調査では近世の建物で柱間が長い傾向が見られた。こうした点から、近世まで時期が下る可能性もある。

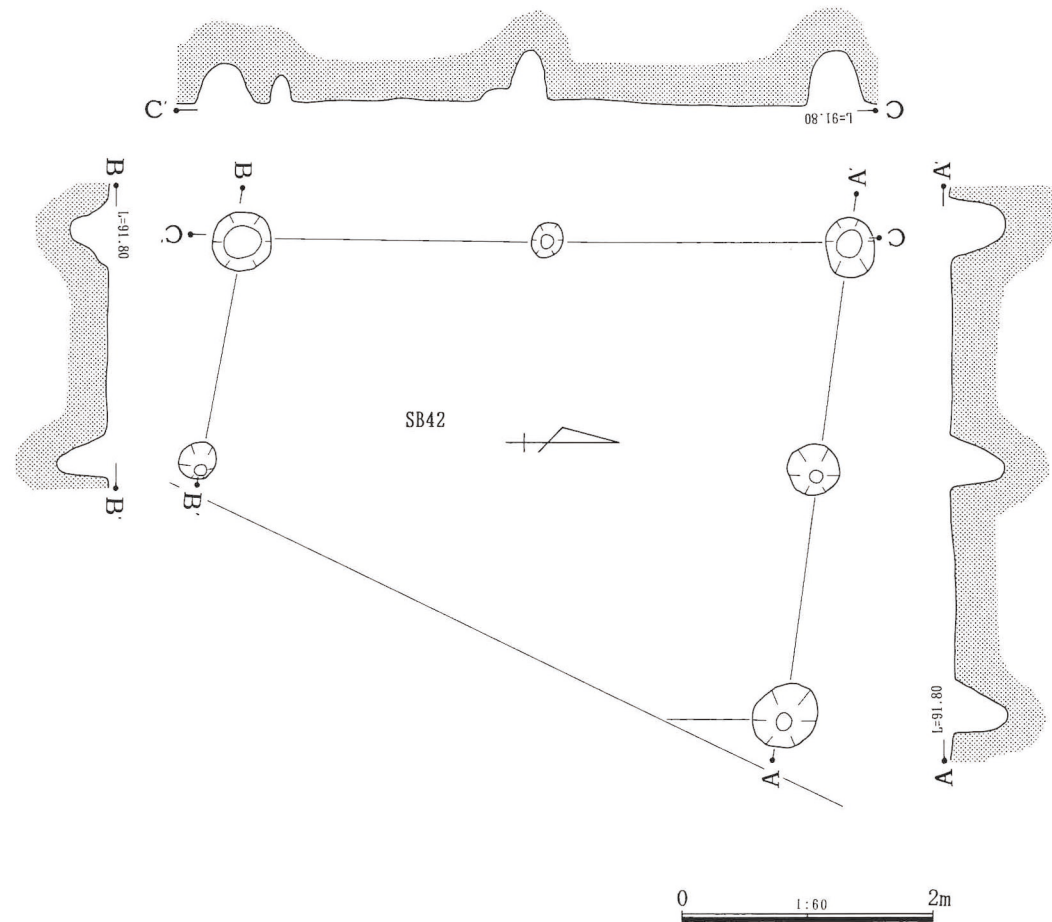


図67 42号掘立柱建物跡図

井戸遺構

2号井戸 平面形は1.4m×1.8mの楕円形で、確認面からの深さは1.25mである。覆土上層はB軽石を多量に含む砂質土で、下部は黄褐色土ブロックと二次堆積のB軽石を含む土である。セクションの観察から、井戸は人為的に埋め戻したと推定される。しかし、井戸の埋土はあまりしまっておらず、あまり填圧はしなかったと推定される。

5号井戸 石組み井戸である。掘方は直径2.1mで、内部に安山岩の転石を使用して、丁寧に石を組んでいる。石組みの上部はかなり崩れているが、中程から下部の石組みの残りはよい。最下部には直径30cm程の石を置き、その上は小口ないし横口積みである。井戸の深さは2.6m、覆土は二次堆積のB軽石を含む土で、内部は埋め戻されている。埋土中からは軟質陶器の鉢が出土している。鉢は推定口径30cm、酸化焰焼成で硬質である。ロクロで全体を、また外面はナデ調整されつくりは丁寧である。内面は使用のためか平滑になっている。

6号井戸 5区の北西隅で検出した。平面形は円形で直径1.7m、深さ1.5mの素掘り井戸である。断面形は段の少ないロート形である。埋土は二次堆積のB軽石を含む褐色土である。セクションの観察から、井戸は埋め戻したことが確認できた。

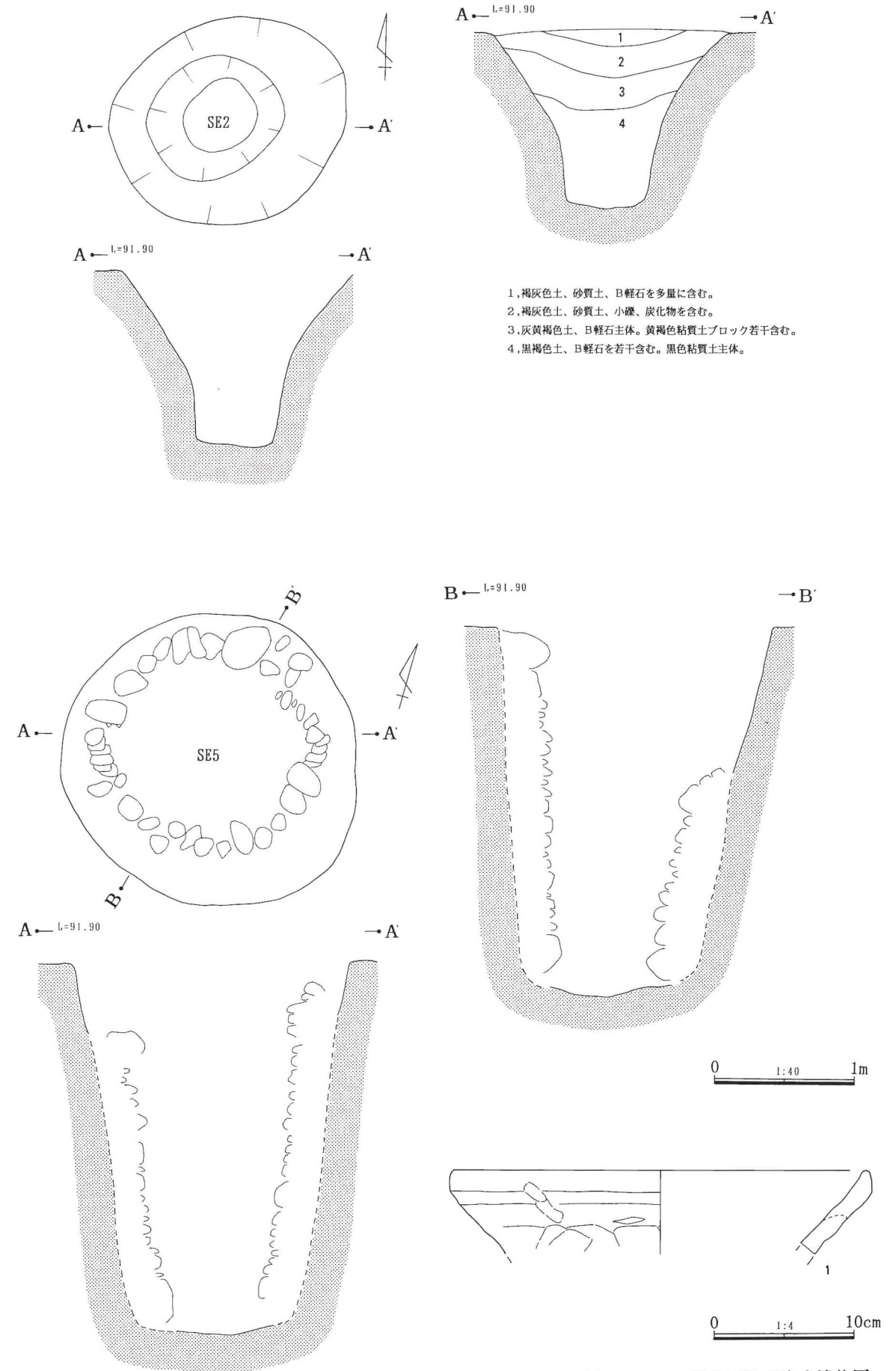


図68 2、5号井戸及び出土遺物図